明治三十二年六月二十四日發兌

女鑑

第百八拾參號

東京國光社

女鑑第百八拾參號　目録

島津日新公の母



己に求むべし

とかく、人は、足る事、を人に求め、足らぬ事を、己に求む、をかしき事なり。足る事を、人に求む。金錢の足るにてはなく、足らぬ事を、己に求む。衣食の足らはぬにてはあらじ。たゞ、よき心を求むるにて、曾子は、日々に三省して、その足る事を求めたりとぞ。人のためにはかりて忠ならざるか、朋友と交はりて信ならざるか、傳へて習はざるかと、萬一、我心に忠實ならざる事、もしくは、師の教にたがふ事ある折りは、必ず、之をあらため、又あらざれば、いよ〳〵、善より善にうつらんとす。故に、過はたえて、心足り、行ひ足り。身足る。禹は聖王なり、心を勞し、身をつくして、世を救ひ、遂に舜に擧げられて、天子となりけるが、路に、罪人に逢ひ、車より下りて、問ふて泣て曰く、舜堯の民は、舜堯の心を以て、心となし、寡人、君となりて、百姓、各自其の心を

以て心となす。寡人、之を痛むとて、大に、己の德の寡をなげき給へり。故に、民、之を聞き、大に感じて、おのづから、之に歸して、あしき事をなす事少し。もろこしにても、大和にても、かしこき人と云るゝは、皆、己を責る事重く、人をまつ事輕し。いにしへの人に、才あり、げいあり、道ありと聞くや、かれも人、我も人、同じ人に生れながら、何ぞて、我は、彼にしかずやとて、蚤夜、之を思ひ、之を求めて吸々。故に其の人、遂には、かしこき人となり得らるゝなり。其の人に於けるや、彼の人は、よく之あり、これ良人なり。よく之をよくす、之れ藝人とするに足れりとて、一の善を稱して、其の二をせめず。故に人、善をなす事をよろこび、しらず〳〵德に向ふ。しかるに、よの常の人はしからず。己を責むるは、實にうすく、己、未よからざるに、我、之をよくす。是れ足れりとて、己があしき事はひめおきてまた正さず、故に過にあやまち重なりて、善心日に〳〵消えゆき、そのあしき心をさへ、才あり、かしこしと思ふやうに至る。あやまちも、又甚しからずや。其の人を責むるや、甚こまかにして、彼の人は、之れはよくすれど、なほ、之をよくせず。之れ稱するに足らず。これはよくすれど、用ゆ

るに足らずとて、その人の善は稱せずして、足らはぬふしのみを數ふ。己が一善はほこりて、之を稱し、九惡は秘して、之を正さず。人の一不能は、甚、之を責めて、九善は、未稱するに足らずとなす。之れ足る事を、人に求むるにて、足らざるを己に求むるなり。故に、己いつまで得る事なき不能の人となり、人は善をなすをよろこびず。此の人や、なほ己を責めずして、人の己が心に從はぬを恨む。これいみじき過なり。たとへ、世はあやまるとも、己はあやまるまじと心し、人は如何にあるとも、己は、信を以て心とし、曾子の三省する所は、己は凡人、四省し、五省し、以て足る事を心に求むべし。俗言にも、「三度たく飯さへこはしやはらかし、思ふやうにはならぬ世の中」とげに己に求めてだにみちがたきを、人に求むるはかりかたく、又おろかなる事はあらじ。己に求むる少き故に、少成をほこりて、反つてあなどられ、人を責むる重きが故に、寛如の心うせて、すさまじくなるものなり。あはれ姫だち、世の完全たる婦人にならんと思ふ姫だちは、必ず足る事を己に求められん事、偏に我社の望む所になん。

論說

忠本論略（一）

霽軒

小學校の學科は、いくつありますか、その各科が、獨立の働をしたなら、如何てあろう。讀書科は、字が讀めるに任せて、猥褻の小説を見たり、習字は、手がきくので、僞書を作つたり、算術が達者で、人の懐中の金を數へたり、体操が上手で、力が強くて、朋輩の頭を打つたり、唱歌が巧みで、耳が堪能で、俗歌か甘かつたりしたならぞ、學問といふものは、世の中を紊乱するばかりで、大將のない軍隊と同じく、危險千萬のものでありませう。そこて、是非とも、各學科の上に立て、各學科を統一支配する學科ありて、軍隊にての大將と、同樣の職務をせねぞなりませぬ。それは何であるかといふに、即修身科で、此の科が主腦となりて、一般の學科の働を善導し、自身の趣意通りに、使令せねばなりますまい。修身即道徳の學は、古賢哲も、人間第一等の學とも、學問中の學問とも申しましたが、今日教育者流の用語にては、道徳的統一教授とでも、申しませうが、拙

者は、先中心教育と稱へておきませう。

さて、この中心教育の主意は、教育者として、誰しも、異存はなからうと、信じますが、實際、教育の狀況を觀るに、中々、さうは行はれて居らぬ、矢張、修身科と、他の科と、頭を幷べて、押し合うて居るやうなところもある。家では、親父が困る、學校では、先生が困る樣な、良くない兒でも、一般學科が、幷々に出來たるために、立派に、進級卒業するものも、隨分ある。生徒は措いて、學校の先生、殊に中等學校以上の先生には、心術が正しくなくとも、品行が修まらぬとも、或は學科が出來るとて、大な顏をして、教師となつて居るものがある。國体の概畧も分らぬに、外國人の通辯が出來るとて、堂々たる教師となつて居るものがある。耶蘇教の信者で、國語の教員となつて居るものがある。古典を虛妄なりといふて、歷史の教員となつて居るものがある。實に怪しからぬことで、これでは、中心教育などいふことは、思ひもよらぬことであります。右は、教育社會だけの話であるが、他の社會を見渡せば、言語同斷の事ばかりで、今日の世の中に、もて囃さるゝ者は、大抵は、才子か、能者で、賢者や、善人は、人中に顏出しが出來難い。才子も、能者も、わるくはないが、たとひ、道德の備つた、才子能者でなくとも、せめては、不德でない、才子、能者ならば、まだしもであるが、惡才子、惡能者では、困

る話である。これ畢竟、世の人が、道徳と、智識と、技藝とを、全く別々に離して、道徳が人間の通義たることを、思はぬからのことである。併し、今俄に、一般の惡弊を、矯正するといふことは、容易く行はれ難きことであるが、先づ、尤弊の鮮い小學教育には、充分にこの中心教育の實効を、擧げたいものと思ひます。且、申すまでもなく、教員自身に於ても、厚く道徳を修養し、所謂、人間第一等の學、學問中の學問に、重きを措かれたいことゝ思ひます。

修身即道徳は、諸學科の中心たることは、前陳の通りとして、さて道徳といふても、一概にはいはれぬ。今日流行の倫理學史の類には、夥しく、外國古今の學説を列擧してある。或は、宗教的道徳といふもある。現に今の學者連中でも、誰は何主義を持てするとか、彼は何説を取るとか、種々雜多である。又、世には實踐的道徳とか、理論的道徳とかいふ言もある。抑、道徳に、理論だの、實踐だのいふ區別のある筈がない。實踐しない道徳なら、道徳でない。誠に笑止の至りである。又、何主義とか、何説とか、何宗とかいふて、各自に主張すといふも、尤解らぬことである。我國には、各自の祖先が、經歷修理した平康正直なる大道が、目前に在るに、右往左往に、異道を尋ね探すとは、あまりうつけたことである。明治六七年の頃から、二十三年までは、かゝるうつけた詮議

が、甚、盛んで、終には、所謂道德標準論といふが、教育者學者間に流行して、教師も生徒も、立ち塲を失うて、動もすれども、危道邪徑に彷徨するが多くて、心ある者の、頗憂慮したことでありましたが、天皇陛下に於せられても、大御心を腦ませられ、乃二十三年の十月三十日に、教育に關する御勅語を、煥發あらせられた次第で、誠に以て、我我臣民の、恐懼に堪へぬ事であります。是に於て、道德の標準といふものは、炳然として、天日を仰ぐが如く、一人も敢て方途を誤るものはなき筈なるに、前にも申す如く、歷歷の學者でさへ、猶、主義學説などを異にして、私に主張するとは、御勅語の罪人といはうか、日本の外國人といはうか、不埒至極のことである。諸君に於ても、我道を修めらるゝ餘りには、或は外國の倫理書をも、繙かるゝでありませうが、我道とは、雲泥の違あることを見出し、充分に、その取捨を嚴にせらるゝことゝ、確信します。しかしながら、外國の道德説の中でも、孔子の言は、我道に抵觸することが少く、殆、我道の註脚といふてもよろしい、孔子は、我國に留學して、卒業したものかと思はるゝ程、我道に符合し、却て孔子の自國の實には、合はぬことがある。應神天皇の御代よりこのかた、御歷代に、御資用あらせられたるは、誠に故由あることでありませう。水戸學の、國体に嚴なるも、敬神に幷せて、崇儒の條を置き、平田篤胤の、尊內卑外の極論家ですら、孔

子の言には、間然する所なかりしは、偶然にあらざることゝ思はれます。故に、我國人の、道徳を學ぶ者は、敎育勅語を、本体とし、而して孔子の敎を羽翼として、然るべきことゝ思ひます。

嵯峨天皇

久方の天よりおろす玉矛の道ある國ぞ、今の吾國

かにかくに物は思はず飛彈人の打つ墨繩の唯一道に　　讀人しらず

皇の道唯一つ此を置きて他し小徑に依らめやも人　　平田篤胤

道徳の標準はこれで極りましたが、道徳の區分に於ては、何を中心とするかといふことが、必要でありませう。若も中心が立たず、各人說を異にし、或は仁を主とし、或は義を旨とし、或は敬を唱へ、或は知を說くといふ樣では、やはり支離に歸し、又諸の德に、本末輕重なくては、去就取捨を、誤ることになる。そこで拙者は、敎育勅語に據り、國典に依り、孔子の言を參して、種々工夫の上、終に、一の考案を立てました。それは、何であるかといふに、忠といふ德である。この忠が、諸德諸善の中心となり、歸着ともな

るのである。拙者、嘗、近江聖人中江藤樹の書を見たるに、藤樹先生は、諸徳の本を、孝に立てられ、頗ぶる廣大精密の論説があり、また先生の徳行は、凡の儒者も、推稱して居る所であるが、就中、孝の徳は、先生の一身を擧げて、實行せられた所で、徳の本を、孝と立てられた筈である。しかし、拙者の考ふるには、支那、其の外の國々にては、孝を本とすることと、尤適當であらうが、我國の道徳に、孝を中心と立つるは、稍、適當せぬ。其の説を紆回曲折にせねど、國性國体が説き盡し難い。そこで、嗚呼の爲ながらも、この忠本論を立てた所以でありますが、實は、藤樹先生の孝本論に、感發指導せられたものであります。是より、其の旨趣を述べませうが、説の順序として、先我國に於ける、忠孝の關係を、概論せねばなりませぬ。

（つゞく）

女子の爲（容貌より心）

なにがし

およそ女子が、容貌を以て、男子の愛を得んとするは、大いなる間違である。むかしから、容色を以て寵愛を肆にしたるものは、色衰へて、寵も亦衰へるとが極つて居る。人は、何時までも、若く美しくては居ぬ、宛轉娥眉能幾時、須臾鶴髪亂如レ絲で、若い美しい時は、少時の間である。齢をとつて、皺くちや婆になつて、醜をむき出して、笑を呈し、愛嬌を振

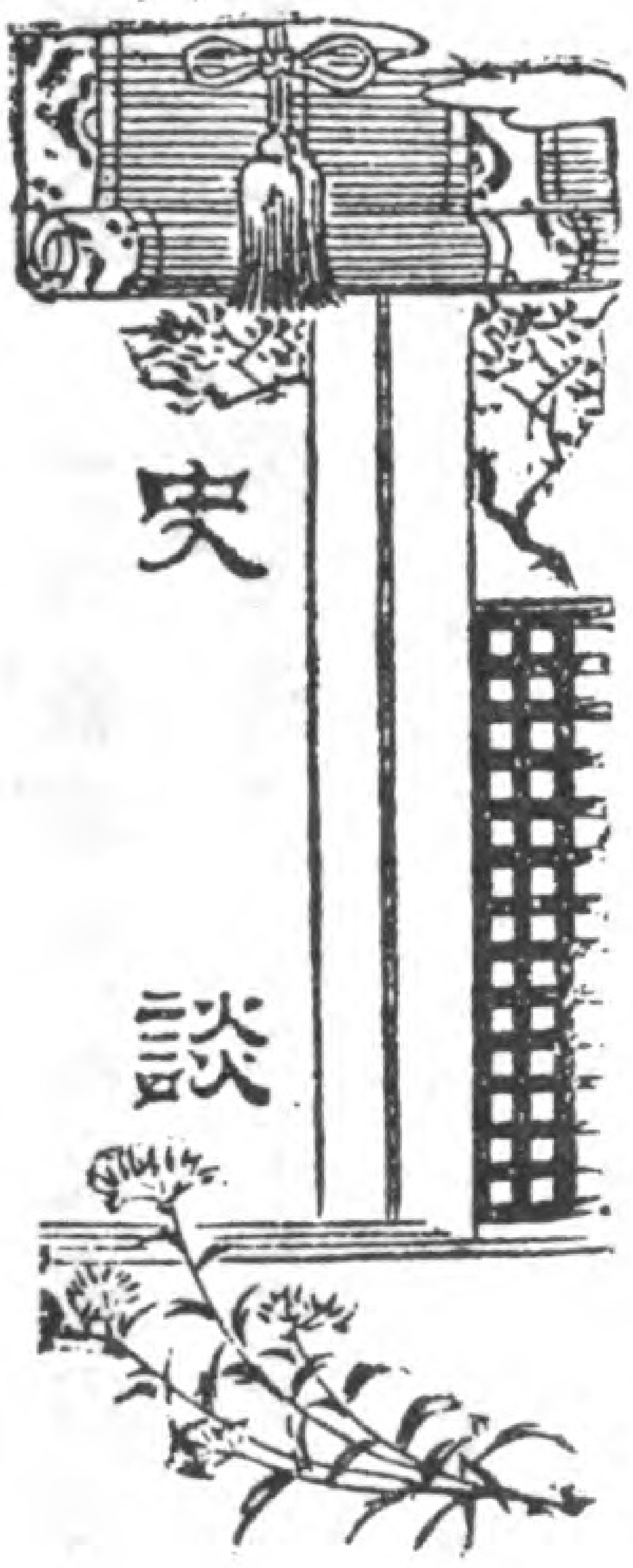
り蒔いたとて、誰が見向くものか。若い時は美しかつたからとて、色のあせたものが、眺めものになるものではない。楊貴妃の如き、絶世の美人だといつても、其の寵を專にしたは、若い時、即美貌を保つて居る間のことではないか。小野小町だとて、梓の弓なりの腰をして、白髮頭に鬢付油をぬつてからに、見かへるものがあつたとは聞きも及ばぬ事である。いふまでもなく、萬年美人で居る譯にはいかぬのであるから、容色を以て、長へに夫の愛憐をつないで置かうと考へるは、淺はかな了見である。勿論女子は、男を待つて、一生の苦樂を定むるものであれど、所天と定むべきものが、容色を愛するならば、其の意を迎ふるは、是非もない事である。昔より、士は己を知るもの丶爲に命を棄て、女は己を愛するもの丶爲に容くるなどいふ語もある。固より、其の知遇に酬ゆるは當然のことであるが、女子よりいへど、容色を以て愛せらる丶は、迷惑のこと丶いはねばならぬ。さるを、容くりて、男子の愛を一層、多く求めんとするは、ちと不見識な話ではないか。これ、自、其の品位を下すものではないかと思はれる。百年苦樂倚他人といふ積りで、良人の好に從ふは、前にいふ通りだが、世間の親達からして、我が子の容貌の美を喜び、氏なくして、玉の輿に乘らしめんとするは、惡い了見で、自然女子も其の氣になるのであらう。其の故に容貌は誰彼に劣れりとも、衣裳の好みにて、勝をとらんなどいふ樣にな

り、女子心に劣らじものと、化粧三昧に身を窶さしむるものあり、或は卑屈陰欝の性を助長せしむるもあり、はた、女子の本性を沒却せしむるもある樣になる。もしも、女子が唯一の資本は、容貌にありとせむ、容貌の美醜は、疾く業に運命を卜して餘りありというてよい。然るに、實際は、さういふ歸納的例證を示して居らぬではないか。もしも、容貌が唯一の資本なら世間、多くの婦女子は、この資本を缺けりといはねばなるまい。見よ、三十二相はおろか、四相を具へたのも少ないではないか。さて又、男子は、女子の容貌をのみ採るかといふに、人、皆審美の念のないものはなければ、美と醜と並べたとき、其の心樣の等しい場合には、無論美なる方を撰ぶに相違ない。是、自然の情である。然しながら、容色が主ではないのである。若し容色を以て採る人ならば、容色を以て棄てる人である。斯る人は、眞正に愛する人でない事は、瞭々火を見るか如くである。何時までも變らず、寧ろ濃なる度を增して褪めることのないのは、これぞ、即、心である。女大學にも見目より心と訓へてある。容貌は、たとひ夜叉の如くありとも、其の心術の美しければ、苦にはならぬ。彼の宿瘤が、文帝の皇后に擢んでられた例もあり。我が朝にても小早川隆景の後室、瀧鶴臺の妻の如き、幾らもある。つまり、容貌を愛せらるゝは、皮相の愛にして褪め易く、心樣を以て愛せらるゝは、眞正の愛にして、其の快樂も、亦神聖である。何も容貌を苦に

する事はない。其を憂ふるよりは、女徳の修まらざるを憂ふるがよい。女子が徳を修むるには、寧容貌の美しからぬが、却りて好都合のあることである。
心の鏡だに美しければ、其の光明は全身に輝き、萬人の愛を惹いて、長く、樂を享くるのである。勿論、男も女も心を磨くことが、必要なるはいふまでもないが、殊に、女子は、男子に對しての徳を磨き修めねばならぬ。そは歸ぎて後、最、必要を感ずるものである。抑一家を治むるときは、男は主で、女は從である。此の地位は、天地開闢以來、自然に具はつて居るので、男女同權などの屁理屈を並べたとて、之を變更することの出來るものでない。これは男子の壓制からでもなく、女子の卑屈からでもない。さて一家の組織和樂を得んには、女子は、男子に從はねばならぬ。のみならず、順はねば不利益である。語をかへていへば、所天の意を迎へて從順に事へ、其の愛を受けて苦樂を偕にするが、女子の本分である。サアこれが本分なら所天の好尚に應じ、希望に添ひ、和樂の質をあげねばならぬ。さりながら、たとひ所天の望みでも、容貌は、しん粉細工や飴細工の樣に、手加減で直し得るものでないが、心術は、いくらでも直すことの出來るものである。こゝに心術といへど、無論行爲を含めたもので、約めていはゞ、何事も、所天の意に添うて、忠實につとめ舅姑に事へ、小姑をいたはり、召使のものに目をかけ、子女を養育し、尚、餘

裕があらば、廣く慈悲を施し、家聲をおとさず、所天の名を汚さぬ樣、心がけかるまでの事である。これが大層六かしい樣だが、誰も生の親はあるであらう。又、兄弟もあるであらう。生家に在て親に孝養をつくすだけを舅姑につくすので、弟妹をいたはるだけ小姑をいたはるので、只、所天に對する務だけが、殖えたのである。夫に事ふるは、女子に取つては、一大義務がふえたのであるが、又一方から見れば、浮萍の寄るべを得たに等しいことで、樂も亦これより生ずることである。斯うはいつて見たものゝ、實は歸ぎての後の心配りは、生やさしいことではない。見ず知らずの家に得心して歸くので、幸に、知合の家に歸ぐとした處で、以前は、他人として遭つたのであるから、互に遠慮勝で、言語擧動から一切萬事に注意もし、又、あふとしても、時間の短い間であるから、ボロも出さずに取なし、倘缺點があつた處で、無遠慮に、いひ出すこともなかつたが、其の家の人となつて、日々一つ處に居たら何うあらうかと思はるゝ家に、たつた一人で入り込むのである。假令やさしい舅姑でも、實の親ではない。倘更小姑なぞは、我が家憲に熟れざるをつけこみて、兎角妨げ勝のものである。此處に僅に味方らしく、保護の位置に立つて吳れるが所天ばかりである。この時に方つて、所天を始め、舅姑に仕へ、小姑に對し、能く其の愛憐を受け、圓滑に家政を料理するには、何が必要であるか、それでも、倘、

化粧三昧に日を暮し、容貌を以て、所天を始め、舅姑と小姑との愛憐を求めんとする歟。眞逆に斯かる愚をせんと希ふものはあるまい。勿論、女子の嗜むべき四行中には、婦容といふことがある。身装のよしあしは、其の心の寫眞ともいふべければ、身装を取繕ふことは、必要である。さりながら、この婦容のことを、臙脂顔料をつけて磨き立つるとと思ひ、衣裳の綺羅を纏ふにある事と心得るが如きは、大きな考い違ひである。右の次第であるから、容貌に苦むだけを、心を磨き德を修むる事に苦心せらるゝ樣望むことでござる。



佐々木昭元

鹽井ふく子

能ある鷹は爪をかくす、爪をかくす又實に能なり。すべて、女の才あるもの、少しの知りたる事をいみじう知りたる貌し、世に得たり貌に、したり貌にふりまふ、されば女の才學あるは、なきにおとるなど無下に云ひおとされ、おなづらるゝも口惜し。むかし、高倉家の家臣に、粟津信濃之介と云へるあり。その人の妻女は、名高き書家、佐々木志津摩が女なりけり。廿年が間、いとむつまじう過しぬるが、一人の子寶をもまうけぬを世に幸なき事となしけり。さるほどに、夫病にかゝり、いまはと思ふかなしき夕ぐれ、妻なる人を省て謂ひけるやう、朝露のたとへ、げに己はあしたをま

たで、まさに消えなん心地す。我なからん後は、從ふべき子もなければ、世渡らひのたづきもなかるべし。さりとて、あまなどにさまかへて、すみぞめのあはれ世におちぶれ給はんも悲しう、草葉のかげの露もいや深く、口惜しかるべし。やう〳〵さた過ぎ玉ふ齡にはあれど、さるべきゑにしもなかるべきかは。何方へも、再びとつぎて、やすらかに過し給はん事こそ、なきたまもおちつき侍るべしとかなしげに云ひ終りて、息もたえだえなり。さらぬだにかきくらす妻女は、いとゞかなしく、一入にふりまさる涙をせきあへず、妾、不幸にも子なきを、幸に、君にすてられず、罪ある人ともならで、今までむつまじう過し侍るも、偏に君が御なさけなるを、亡き御あとまでに心をくばり給ふあつき御心くみまゐらするも中々。又更に人にとつがんなどの心はゆめ出で侍らず。さりながら、必ずうれひ給ひて、年ごろは、かくとも聞え侍らざりしかど、妾、幼きより、父の物かく事を教へ給ひしを、おろ〳〵學びおきたれど、身ひとつは、ともかうもして過し侍らんに難からじと答へけるに、夫はよにもうれしげにて終りぬ。その後、此の妻女、父が氏を名のり、昭元、字は由也とて、能書の聞え高し。寶鏡寺の尼宮などへも御手本めし出され、後の世にも、その書けるもの、いともてはやされ、みさをもふしも、いと高し、くれ竹の世を、いさぎよく過しける、またありがたき事にて、畸人の傳のうちにも、またまれに見るは、此の妻女と、今ひとりなるは、中京のある家のひとり娘にて、其の娘、幼より文よみ、歌よむ事を好みけるが、その親、聟をとりて、家をつがせたるに、其の聟は、無下にむくつけくて、すぎはひの事より外は、知らぬ人なりしかど、その娘も、年ごろのたしなみすてゝ、しきしまの道も、大和言の葉も忘れたる如くなりけるを、いかにと問ふ人ありしに、其の娘、ひそかに答へけるやう、他より來たる夫なれど、よろづにつけて、あなづらはしく、もてなされんとや疑ふべき。まひて文雅のこと

などは、心高く思はれんもうるさくてと云ひきとかや。此の用意たふとむべしと伴蒿蹊ぬしのものせられたるを、拙き筆して此處にうつすも、又はづかしうなん。

島津日新公の母

邊渡盛衛

世に、女子ばかりあしざまに、いはるゝは少し。あるひとは曰はく、國を亡ぼすも女子なり。城を傾くるも女子なり。家をやぶるも女子なりと。あるひとは曰はく、女子は、智あさく、胸せましと。あるひとは曰はく、女子は、あまりに、情にもろく、あまりに、猜忌ふかしと。先哲も、また、婦人と小人とは養ひがたしと嘆き、英の詩人も、亦「やよ孱弱、女子とは汝が、名なりけり。(Frailty, thy name is woman!) とうたへりとぞ。然はいへども、一家の美風をつくるはいふも更なり。一國、一社會の大に及びて、うるはしき俗をつくり、富强の基をひらくことの、一婦人の賢德にもとづくも、亦すくなからず。

今こゝにあぐるは、久しく、西海の雄藩として、その名、天下にきこえたる島津氏の中興の英主、貴久の祖母、梅窓の上とよばれたりし人の事なり。

抑々島津氏は、源頼朝の子、忠久にはじまる。されどその薩、隅、日三州の地を、悉く、打ち平げて、勢威、大に、加はりしは、第十五世貴久に始まれり。貴久の父は、島津氏の一族にて、日新公といひて、文に長じ武をかね、才德、古今にすぐれ、島津氏中興の業を扶翼したる人なれど、今に至るまで、その國人の追慕尊仰すること、甚深く、一たび、その名をきけば、そゞろに、崇敬の念を起さぬはなし。梅窓の上は、實に、その母なり。

梅窓の上、まことの名を常磐といふ。梅窓とは、その諡なり。日州福島の領主、新納駿河守是久の女にて、薩州、伊作の領主、伊作善久の夫人なり。(兩家共に、島津氏の宗族なり。)

さて、夫人が日新公をうみしは、明應元年(紀元二千

百五十二年)なりき。さるを夫善久は、明應三年に、不幸にして、敵邑の間者に殺されぬ。享年僅に二十有四なりき。このころは、足利時代の末にて、天が下、悉く、みだれて、島津氏宗室の威力も、いたく、衰微しぬる折なりしなり、夫人は、これより、かよわき一身をもて、舅姑をなぐさめ、家臣をなづけ、子女の養育にこゝろをひそめて、世子の生長をぞたのしみける。

さるほどに、明應七年とはなりぬ。夫人は、子を、よく、そだてんには、よき師を選ぶにしくはなしとて、之を舅久逸にはかりて、二月の十五日といふに、僅に七歳になれる最愛の子をぞ、海藏院といふ寺に入れて、その教育を、院の住持、頼増といへる名僧に委托せり、頼増、囑をうけて、いと嚴重に、導き、たま〱命に背くことあれば、少しも、假借することなく、之を責め、ある時は、柱にいましめて、君には、伊作家の正統たることを忘れたまひしかとて、いたく、こらしもしたりき。こらされて、公は、いと、高う泣かるる折もあり。されど、その泣聲のもれきこゆる時もあり。又、頼増がふるまひを告ぐる人もありて、そのさまは、しば〱、夫人の耳に達すれど、夫人は、つゆ、いかりたるけしきもなきのみか、かくてこそ、まことの人ともなるべけれ、といひて、ひたすら、頼増のするがまゝに、まかせおきけり。大方の人の、子をそだつるさまを見るに、子を思ふ心の暗にまどひて、とほきおもんばかりとてはなく、たゞ、その子のいふがまゝに、益なき慾をみたさせて、蝶よ花よと之をあづかひ、風なさはりそ、雨ないためそ、とのみ、うち念ずるのみなれど、その師のこゝろありて、叱るをだに、直に、うらみ訴ふるも多かるはうたてし。この夫人のこゝろ、そ、げに、かぐはしく、ゆかしき限りなりけれ。夫人は學の道のたしなみもふかく、殊に論語を好みて讀みしとぞ。

かくて、日新公は、永正三年(紀元二千百六十六年)八

月、十五歳にて、海藏院を辭して歸館せり。夫人は、又さるべき師傅をと、心をつくして求め、遂に、我が甥なる新納能登守忠澄(號[illegible])をぬき出でゝ、公につけたり。忠澄、賢徳のきこえ、空しからずして、よく〳〵、その職に叶ひにければ、公は、ます〳〵、文武の道をはげみ、心身を修錬して、才徳いよ〳〵すゝみ、長ずるに及びて、宗室をたすけて、三國の亂ををさめ、又、文教をしきて、徳澤を後世にたれにけり。今、公の「いろは教訓歌」の中より、數首をとりいづれど、

(イ)　いにしへの道をきゝてもとなへても
　　　わが行にせずはかひなし

(ロ)　樓の上もはにふの小屋もすむ人の
　　　こゝろにこそは高きいやしき

(リ)　理も法もたゝぬ世ぞとてひきやすき
　　　こゝろの駒のゆくにまかすな

(ス)　すこしきを足れりともせよみちぬれど
　　　月もほどなくいざよひのつき

の如し。平田宗敬(鹿兒島の人)の遺著(寫本)に、この夫人の事をしるせり。その最後に、

かの御母君、もとより、御賢徳の御本性に、おはします上に、御學問好ませ給ひ、もの〳〵理、よくしろしめしてこそ、御子たち、御教導の御ことども、かどかりに御心をつくさせ給ひにけん。かくて、公(日新公)の御子孫、大中公(貴久)龍伯公(義弘)そのほか、かずかずの御子弟たち、皆御賢徳の御かたがたのみにて御家の今に至るまで、幾久しう、御さかえさせ給ふも、そのもとづく所は、此の母君の御賢徳ぞと申奉り侍らんも、ひがごとにはあらじかし。

とあり。げに、ひがごとにはあらじかし。あゝ、一婦人の力も、また、大なるかな。



家政

茶の湯

茶禮初學（續）

孤峰庵祿仙齋不美

關　葦雄

夜咄の部

「註釋、」不羨曰、衆客、席入して、着座定まりたれど、亭主出で、客に挨拶して、互に禮儀を述べ合ふべし。「但夜咄は、迎に出る時、手燭を持出、蹲石の右方の石に置て入べし。客方は此の光照にて手水を遣ひ可申。亭主差水に徃たる時、此の手燭を持て入、是、則夜話の習也」、而して薄茶をまゐらすべき由を云て勝手へ入、直に、薄茶、菓子を持出、上客の前へ進むべし。次に水指を運び出、次に薄茶器茶碗を持出置合、次に水飜持ち出、例の通り柄杓、引薄茶を點る事、「但飜持ち出づる時は、手燭を右の手に持ち出で取扱て、炉の上客の方、釜の鐶付を目當に置べし」。次に點前は、夜間も差違なしと雖、若四疊半ならぞ如心齋流し點などは、婦人には取合べし。大に點前の配置替りて、一興ならん。茶碗も、重ね茶碗尤よし。偖又、點る事例の如し。客方、喫茶も換る事なし。此の時に限り、客方は、後の濃茶もあることとなれぞ、一服位にて、仕舞候樣にと云方、最此道熟練の腕前と云ふべき歟。薄茶仕舞時、薄茶器、茶杓は、必所望して拝見なさるべし。次に薄茶濟たらぞ、直に炭を直す旨を云て、炭取を持出、炭手前有べし。「但炭の手續には差違なしと雖、夜間寒さの強き時などは、炭を

十分に差添ふべし。是則防寒の一助なり。そこで、炭濟、香合拜見濟たらば、直に湯漬をまゐらすべしと云ひて、一旦勝手口を締切。更に、膳部を持出べし。此懷石も、餘り永々と飲喰すべからず。客方は成丈、早く歸路につきたる方、歸宅早くして辨理ならん。二つには亭主方も、跡の仕舞も、中々の手數なれど、其の邊をも察知して、成丈、箸早に喰し玉へ。されども婦人は、男子と違ひ、麁暴に流れては、不體裁にも成事なれば、心を用うべし。次に飯濟たらば、菓子を出して后、御中立可被下と申すべし。「但此の時は勝手口締切るべし」又客方は、懷紙を出し、是に菓子を取、揚枝を當、菓子を押切、喰すべし。菓子器は、重ねて、順次に送り末座にて見斗片付置べし」。次に上客より掛物、釜の煮音を能聞、湯相、火相に注意して、中立あるべし。二客以下同斷。御客樣方は、腰掛に到り、例の如く、圓座を用ゐ給ひて、腰を掛、休憩あるべし。喫烟もすべし。閑話もすべし。二便にも此間に往べし。されども夜間闇夜の程は、路次の詠めもしがたければ、可成丈運ぶ樣に此時間を縮少すべし。底で亭主方は、客方、席を出たらば出で、菓子器を取入、釜の蓋を締、席中を輕く座掃にて、掃淨むべし。次に水指を飾付、茶入を置合、釜の蓋を切掛、障子を明掛け勝手口を締切、水屋は例の如く、茶碗飜を拵へ置べし。又着衣は、此の處にて正服に改むべし。夫人令孃等は、所謂白襟紋付たるべし。今の代は、おはしより流行なれども、茶は優美高尚の風を好む故。茶會抔には、裝は長目に着飾るべし。此の設計調たらば、客方へ、案內すべし。自身迎に出るも、銅羅を打も、時と場合と、客の品位にもよるべきなり。

（未完）

女禮

汁椀替出し様

有住常子

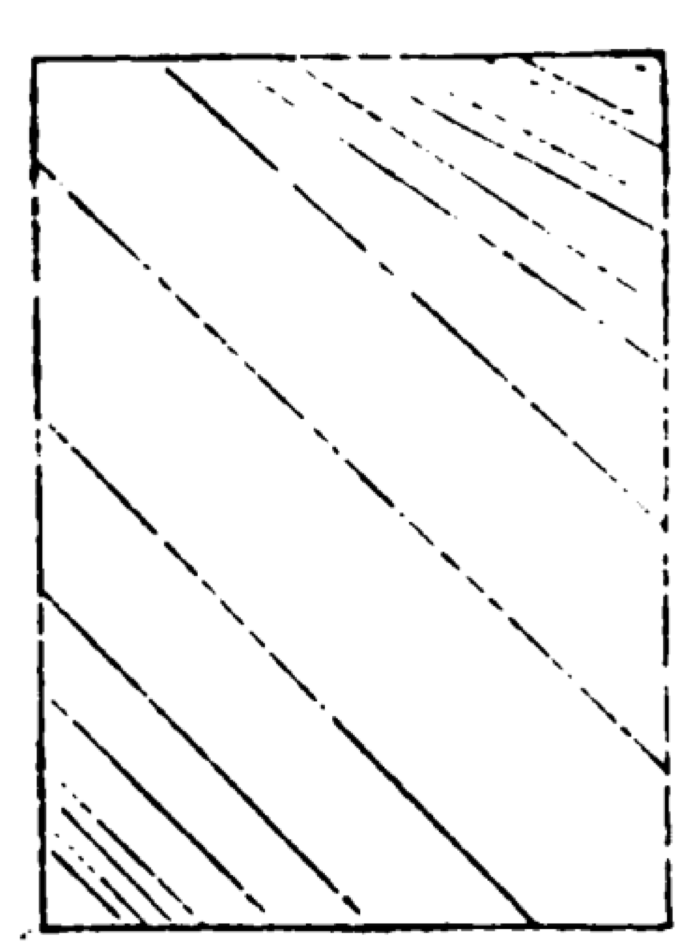
先、もり替を、ばんにすゑて、兩手にてもち、左足よりすゝみ出で、人前にて、少し左へ向き、いつものごとくすわり、先、兩手にてもち出だしたるもり替のわんを、膳の先へすゝめ置き、本膳へ、一すゝみなし、からわんを、兩手にて取りばんの前へ置き替の汁わんのいとぞこへ右手をかけ、左手をそへ、ふたをからわんのうへに、其の儘、取りのけ、替のわんを、兩手にもち差し上げ置、からはんをまん中へ直し、前に引き、兩手に持、左右と引合せ置き、右足より、三足引き、左足にて廻り、一足にそろへ、左より、しづかにあゆみ、勝手に入るなり。

折形

長かもじ包

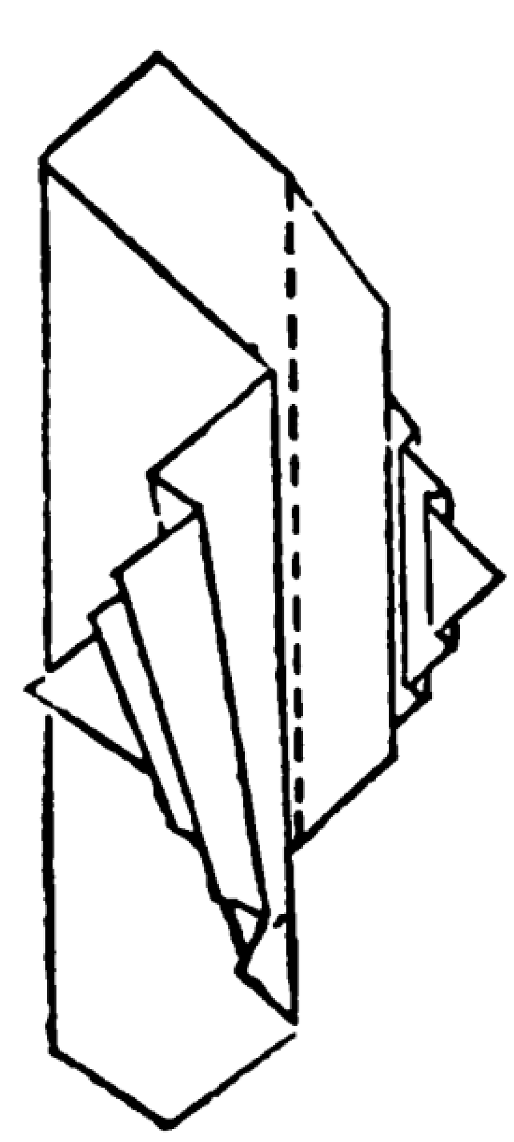
有住齊

第一圖



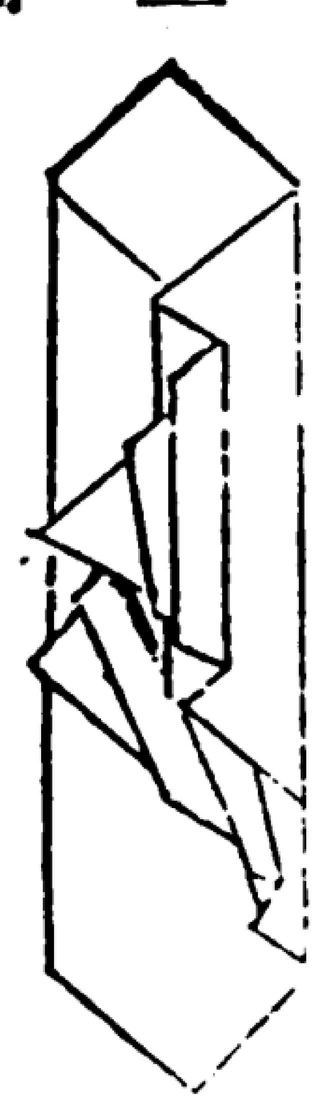
（初）

第二圖



（中）

第三圖



（完）

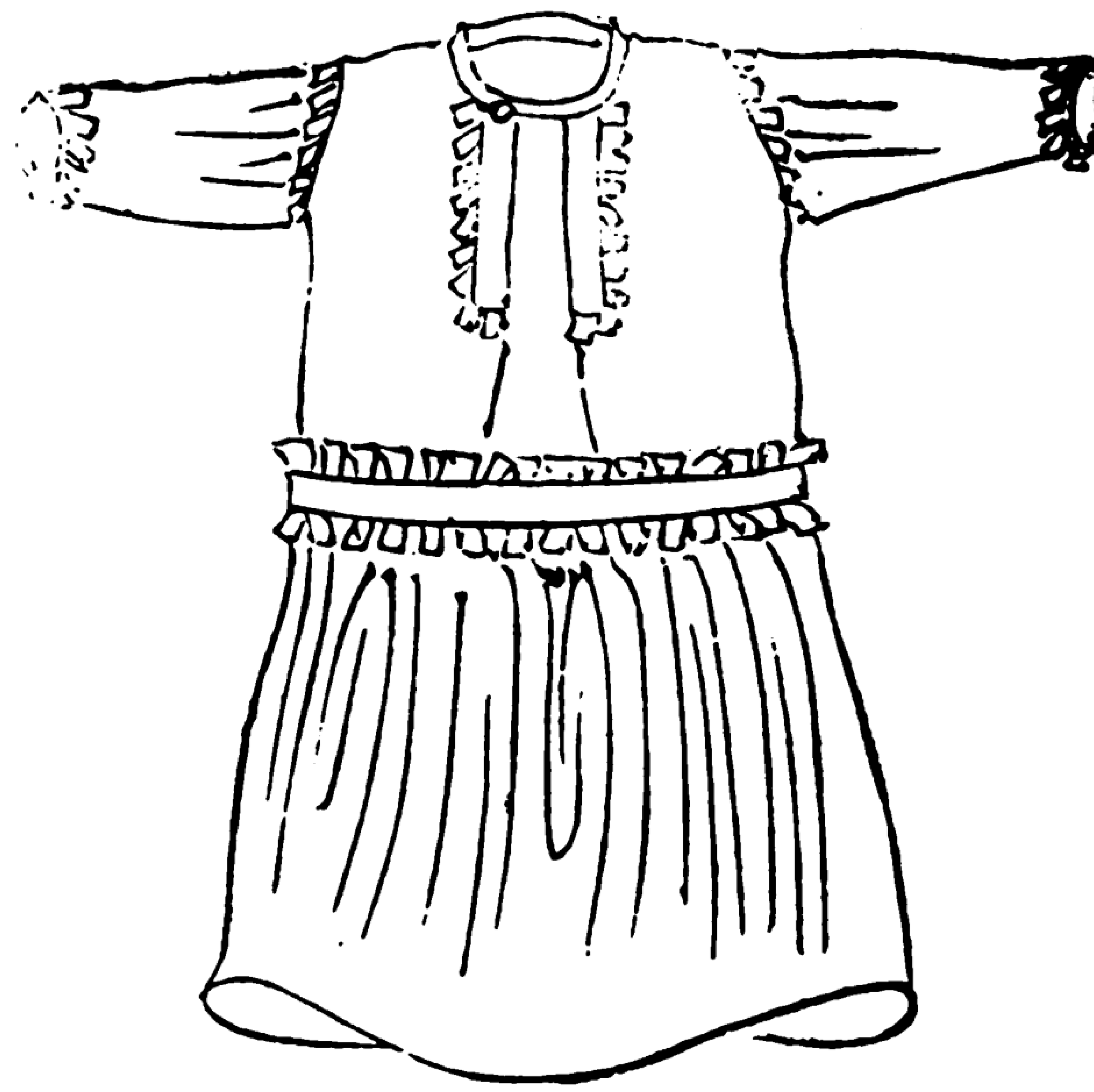
是はさげ髪の時用ゐるなり
しんもつの節は、包方かくの如とし

たちぬひ

西山たい子

(十二)　小供の夏服ぬひ方

まづ飾切を袋に折り。二重かざりならば、下のかざり切を、一分か二分ばかり上、かざりより、長く出して、ひだをとりおくべし。それより袖をとりて、袖口何寸、付け何寸何分とはかりて、單物をぬふ如く、最初表よりあさくぬひ、ひきかへして裏より、又ぬひ、即、袋と云ふになし、袖口の方を一寸ばかり表へかへし、かざり切をはさみて、まくり付くべし。それより胴をとり、袖付をあけおきて、わきをぬひ、うしろも切りし處にみかへしをつけ、ぼたんをつけ、穴をあけ、さて前を眞中より、四五分の處を、左右ともに袋にをり、其の折りたる間に、又みかへしの切の如き細きものを二重に折りて、はさみ付け、又其の下の間にかざり切をはさみ、かへしどりにてぬひつくべし。次に襟をとり、又かざり切をはさみて、表にぬひつけ、裏にてくけおき、腰切れ、(ころもと云ふ)をとりて、袋になし、襟ぐけをなし、又腰になる方を絲にて細かに、ぐるりと空ぬひをなし、胴まはりと同じに、其の絲をひきしぼり、いせをつくりて、胴とはぎあはせ、其のぬひ目あらはれては拙ければ、帶の切をとりて、兩はしを裏がはに折りかへし、其のはぎたる所のうしろより前まで、ぐるりとぬひつくべし。此の處にもかざり切をはさむべし。又袖をとりて、之にもかざり切をはさみて胴にぬひつくべし、飾り切は、小供ものは、如何に澤山にするもくるしからざるなり。さて、かくしをよろしき所につくべし。左に圖を見合せてぬふべし。



だいどころ

巻き豆腐

豆腐を、しぼり、水を去り、摺鉢にて、能く摺り、葛を、投れて、つなぎとし、にんじん、木くらげを、せんに打ち、くはゐ、栗、麻の實杯、加へて、豆腐に、つつみ、メリケン粉をときて、衣とし、胡麻油にてあげ、うま煮にして用ゐる。

泡雪汁

おぼろ豆腐を、布に包み、能しぼり、大根をひき、山葵おろしにて、おろし、水を去り、豆腐一合に、おろし二合、葛粉を、茶碗に、半分程とき、能く、交せ合せ、鍋に、湯を沸騰せ置き、其中に投れてゆで、別に、味噌汁を、製し置き、目杓子にてすくひ入れ、淺草のりを、かけて用ゐる。

からげ汁

こんぶの煮汁にて、味噌汁を製し、茄子を二ッに割り、中を少しくばめ、山椒、けし、など投れて、紫蘇の葉にてつゝみ、干瓢にて結び、よく煮て、葛を、少し、とき投れて、用ゐるべし。

寄せ慈姑

くわゐの皮をむき、山葵おろしにておろし、葛粉と、砂糖少しを加へ、擂鉢にて、能く擂り、好みの形とし、蒸籠にて蒸すなり。

茄子の煎出し

茄子を、二ッに割り、胡麻油にてあげ、昆布煮汁に、醤油加減の汁をかけて、器に盛り、大根おろしを、添て用ゐる。

茄子龜の甲燒

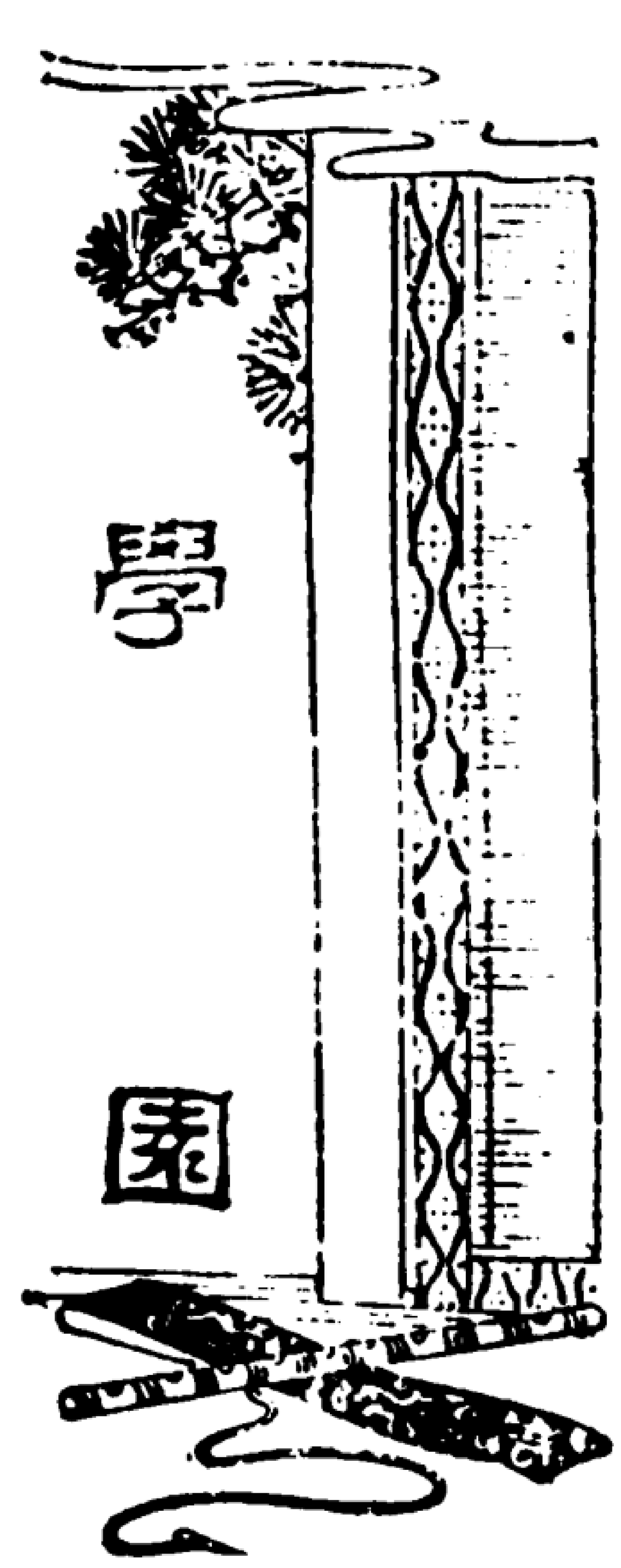
茄子の皮をむかずに、たてに、二ッに割り、皮目に、あらく ❖ 圖の如く、庖丁目をいれ、鍋に胡麻油をひきて、煎燒とし、生姜醤油にて、用ゐるべし。

小茄子、胡桃、卯の花あへ

茄子をゆで、さつと、味をつけ、くるみをゆで、皮を去り、これも味をつけ、卯の花を能くすり、味淋と鹽にて鹽梅し、能程に煎て、前の二品を、あへる。

蕗のきやら煮

蕗の、皮をひき、さつと湯を、通し、日光に乾し、一寸程にきりて、生醤油に、たうがらしを、加へ、二三時間煮るなり。



秀歌集（四十五）

鹽井正男

○

朝ぎりに淀のわたりをゆく舟の
　しらぬ別れも袖ぬらしけり

○朝霧。朝の空の霧なり。○淀のわたり。山城の國なる淀川のわたりをいふ。こゝより難波の方へ通ふ舟の出づる所なり。○しらぬ別れ。わが知己にあらぬ人の舟にて別れゆくをいふなり。今舟にのりて別れゆく人は、わが知己にはあらぬなり。わが知らぬ

外の人なれど、かくいふなり。○袖ぬらしけり。袖を濡らすワイと感動したる詞にて、袖ぬらすとは、涙のこぼるゝをいへるなり。

○一首の意は、立ちこめたる朝霧の中に、淀川の渡を出で立ちて行く舟よ、我知己を乗せて行くにはあらず、知らぬ人の舟出しゆくなれど、何となう別れ行く方の身にしみて、知己ならぬ我も、涙のこぼれて袖をぬらすワイ。定めて知りたる中には、いかばかりか悲しき別ならむ。なごりのをしからむ。さこそは、泣きて別れをしむならむよと、霧立ち迷ふ朝まだき、淀の渡の出でゆく舟を見て、知らぬ身にも、何となう身にしみておぼゆるあはれより、知れる中はいかに悲しからむ舟出ぞ、別れぞと思ひやりたるなり。やさしき誠の情うたひつくして、げに〳〵あはれに身にしみておぼえまゐらすべき御歌になむ。千歳の下、よみたてまつる身も、また、涙のこぼるゝをればえ奉るになむ。

○

けふはなほ都にも近しあふ坂の
　關のあなたに知る人もがな

○これは、藤原の隆祐といふがよめるにて、こゝには、雲葉和歌集より取り出だせるなり。○けふはなほ。このなほは俗にいふまだといふ意にて、今日はまだといふことなり。○あふ坂の關。あふ坂は、近江なる逢坂山にて、都より東へ出づる道なり。そこに、昔、關をおきたれどなり。○關のあなた。關のあちらと俗にいふべき所にて、逢坂の關より東の方をさせるなり。○知る人。我知りあひの人にて、やがて知己なり。○知る人もがな。がなは希望の意をあらはすがといふ詞に、感動のなといふ詞を添へたるにて、やがて、希望の意をあらはすなり。もも感動詞なり。されど、我知己のありがたきものよ、ヽアーといふごとき意なり。

○一首の意は、今日はまだ都も近し、知る人のわた

りに近けれど、旅路とはいへど、なほたのもしき心地す。やがて、逢坂山を越えんには、都には遠ざくり、知らぬ他鄕となるなり。さこそはおぼつかなく、さびしきことならめ。あはれ、逢坂山のあちらの道にも、わが知りあひの人のありたきものよ、知りあひの人のあれどよい、はしきものよ。さすれど、いかどかりか心大丈ならむといふやうなる心にて、知らぬ東の道さして、馴れたる都を立ち出でたる旅のはじめの日ばかりの心もちを、うたへるものなり。誠に旅に立ち初めたる日ばかりには、かゝる思ひのするものにて、よくまことをうつしえて、これも、げにげにしく、やさしき歌といふべし。

○

秋はくれ霧のまがきは霜がれぬ
　さてもすむやととふ人もがな

○これも、雲葉集より取り出でつ。寂蓮法師のよめるなり。○秋はくれ。秋の過ぎ果てたるなり。○霧のまがき。この歌にては、霧の立ちこめたる籬といふ意の如し。而して、霧のまがきといひて、山家を示したるなり。また、霧の深く立ちめぐれるさまを、垣に見たてゝ、まかいへることもあり。曾根好忠の歌に「山里の霧のまがきの隔てずぞをち方人の袖も見てまし」といふあり。これらは、霧の立ちこめたるを、まがきに見たてたる如し。されど、この歌のは、やゝ異りて、霧の立ちたる籬なり。秋は霧の立つものなれば、秋は果て、霧のつゝみたりし垣根も、霜枯れたりといへるなり。○霜がれぬ。霜にあひてしぼみ枯れたりといふ意にて、秋には、さすがににほへる籬の草木も、秋すぎて霜に枯れはてたりといふなり。○さてもすむや　。それでもなほ住みて居るかといふことにて、やがて、秋はくれ籬も枯れたり、それでも、お前はなほ變はらずに住みて居るかといふことなり。○とふ人もがな。とふ人もあれとか、とふ人もはしいとか、希望せるなり。もがなのこ

とは、前の歌にいへり。

○一首の意は明かなるべし。とふ人もなき山家、秋は果て、霧の籬も、霜枯れはてゝ、いよ〳〵こらへぬむかりの淋しさ。それでもマアー住むで居るかとむかりは、とふ人もあれやといふことにて、何といふことはなけれど、あはれげにして、よそにはきゝすてがたきけしきなりや。殊に、霧のまがきの詞にて、山家をきかせたる詞づかひ、この頃の巧みなる手振りにこそ。

○

君が植ゑし松むかりこそ殘りけれ
　　　いづれの春のねの日なりけむ

○これは、後拾遺集にあり。作者は源の爲善、題には、「三條中務親王家に子日の松をうゑて侍りけるを、彼のみこみまかりて後に、その松を見てよみ侍りける」とあり。○君。三條中務親王をさせるなり。○松むかりこそ。松だけがと俗にいふ意にて、むかゝゝりはのみの意なり。○いづれの春。いつの春といふに全じ意なり。○ねの日。昔、子の日の遊びとて、正月の子の日に、人々野邊に出でゝ、小松を採りて、うつし植ゑなどして遊びけり。千代を祝ふ心なり。初めの子の日のみにあらず、正月の中の子の日には、いつにてもよきなり。

○一首の意は明かなるべし。たゞ、此の歌は、第三の句の次に、「あはれ此の松を採りて、うつしうゑたるは」といふ如き詞を足して見るべし。君は亡くたりて、今は、君がうつし植ゑられたる松のみが殘て居るワイ。あはれ、思へむ、君と共に此の松をうつしうゑたるは、いつの春の子の日であつたか。あはれ、なつかしやといへる意なり。松むかりこそ殘りけれといひおきて、「此の松をうつしうゑたるは」といふべき詞をはぶき、直ちに、詞をすゝめて、「いづれの春の子の日なりけむ」とうちあげたるあたり、させるにはあらねど、感情のふかく身にしみておぼゆ

るものあり。

源氏物語講議（廿八）

下田義天類

哀れなつる事忍びやかに奏す。御返御覧ずれば、いと畏きはおき所も侍らず。かゝるおほせごとにつれても、かきくらすみだり心地になむ、あらき風ふせぎしかけの枯れしより、こはぎがうへぞ静心なき。などやうにみだりがはしきを、心をさめざりける程と御らむじゆるすべし。

是は前回の續きにて、陛下が御返事を聞かせ給ふ所なり。

○あはれなりつる云々、とは前回にいと細かに有りさま問はせ給ふと有りし所を受けて、御使の靭負の命婦が、彼の二條の里亭のあはれなりつる事ども見たり聞たりしたる儘に、忍びやかに一一に御前へ奏上したりとなり。此の奏上したる詞の内には若宮のみありさまより、二條のすべての御有さま、また母北の方が語り續けたる更衣の素性話し等までも、籠りて居ること勿論なり。いと細にありさま問はせ給ふとありし詞にて察すべし。實はこゝに命婦の詞に上せて二條の里亭にて有りつる事柄どもを一々に、再び書き列ぬべき所なれども、さては同じ事がらが、重り合ひて、讀者の倦怠を招ぐ可き嫌れ有るが故に、あはれなりつる事忍びやかに奏すといふ一句の中へ彼の長々しき物語をも含ませて省きたるものなり。こころ得おくべし。

○御返御覧ずれず、二條の北の方より奉られたる御返事を御覧ずれば、即下の如くありたりとなり。

○いとも畏きは置き所も侍らず。これ、即御返翰の詞なり。曩に靭負の命婦がもたらしたりし勅書に、『今は猶むかしの形見になぞらへて、ものし給へ』とありしを請けて御挨拶を申上げたるなり。かく老ばれ

て薄命の淵に沈める身をも、御見捨遊ばさせられず若君に附副ひて、參内せよとの優渥なる御勅掟を、蒙る事の、最畏きは置き所も侍らずとなり。置所のなしといふは、その有がたさが身に餘り、家に餘りて置き所もなき程なりとの義之。優渥なる御恩遇の廣大なる分量を形容したる詞なり。

○か丶る仰言につけてもかきくらすみだり心地になむ。とはか丶る有難き、仰言を承るに附けても過ぎにし娘が、存命で居て此の優渥なる御寵遇を蒙りましたならむ、親子二人の身にとりて如何ばかりの喜びならむと、先き立ちし更衣のことが、一層慕はれて、かきくらすみだり心地になむ、捗々しき御返事も申し上げ難きとなり。か丶る仰言につけても の次に『何々更衣を忘れ難くて』といふ語を含め、またみだり心地になむの下に『はか〲しき御返事を申し上げ難き』といふ語を含めて、共に省筆したるものなり、心を潜めて、味ひ見るべし。いとも畏きは云云、といふ所よりこ丶までは、御返事中の一節なりこれにて、御返事の全文をあげ盡したるには非らず、唯要とある一節を擧げて、その餘は省略したるさまにかきなしたる所なり。

○あらき風ふせぎしかげの云々、御返事中に、ありし歌なり。彼の命婦がもたらしたる勅書中に、宮城野の露ふきむすぶ風の音にこはぎが本を思ひこそやれ。とありし御製の返歌なり、彼の歌に導へて心得べし。さてあらき風とは、今宵の野分の如き暴き風なり。防ぎし蔭は、小萩に當てじと、防ぎし蔭なり。小萩の上ぞしづこ丶ろなきとは、小萩に當る風が直接になりし故に、安心して落つきて居る事が出來難しとなり。しづこ丶ろは靜心にて、靜謐に落つきて居る時の心也。一首のこ丶ろは、是までは今宵の如き暴き風が、吹き來ても、夫を防ぐ蔭がありて、擁護したりしかども、其の蔭が枯れ果てしより、今はそのあらき風を直接に小萩の上に請くる故に、常に心が置か

れて靜謐に日を送り難しと、詠めるなり。此の歌の小萩も若宮光源氏の君に喩へたるものなる事は、彼の御製と同じ事なり。あらき風も防ぎし蔭も、皆比喩なり。あらき風とは更衣の身邊に集りし誹難攻擊の聲にたとへたる言葉なり。防ぎし蔭とは、それを一々に、程能く受け拂ひたる、桐壺の更衣にたとへたるなり。枯れしよりは、更衣が身罷りしよりなり。小萩は言ふまでもなく、若宮光君の御事にて、しづこゝろなきは、若宮光君の其の上が、常に氣遣はれて、靜謐に月日を送り難しといへるなり。御製は、こよひの野分だちたる秋風に若宮の御上を氣遣はせ給へる趣なるを、御返歌は夫を取直して反對儕のしむけにたとへて、若宮擁護の希望を、朝廷に奏問したるなり。同じ言葉を以ちて、他の意を顯はす。これを換骨の文法といふ。返歌の一体なり。

○などやうにみだりがはしきを、これより双紙地の文なり、此の外にも御返事には猶これ〳〵と、書き記してありしを、其の肝要なる所をのみ摘み出して、その他は省きたるもの也。故になどやうにとへるなり。みだりがはしきとは謹愼の意を缺きたる所あるよしにて亂雜なる形容をいへるなり。古註に返書の認めぶりが、みだりがはしかりしなりといへるは、一渡りさることと聞ゆれども、茲は猶返翰の意味ことにこの返歌の意味がみだりがはしきなりとやうに見る方穩當なるべし。さるは、反對儕なりとて、皆陛下の御親任あらせらるゝ所の方々なり。故に更衣御存中には、深く御謹愼を加へさせられて、露ばかりも、これに對して怨みがましき議をば、挿挾み給はず。注意を加へ給へり。これ女子たるものゝ愼むべき所也。然るを今北の方はこれをあらはに言ひあらはしたるのみならず、あらき風ふせぎし蔭などゝまで云ひしは謹愼恭敬の意に缺けたる所なきにあらず。即敬禮の意をとり亂したる所多しといふべし。夫れをさしてなどやうにみだりがはしきをとはいへ

るなり、此のものがたりの常として歌文章などのあとにつきたる評語は、大方はその手蹟墨繼などの事をいひて、その意味を評したることは稀なれども、そは多くはこれを褒め賞したる所に用ゐたる注意にて非難したる所には、その意味を評し云へること常のことなり。混同すべからず。

○心をさめざりける程と御覧じゆるすべし。これも双紙地の評語なり。心收めさりける程とは、愁傷の餘りにかき亂したる心を、とり修めざりし程なり。この程との間に心修めざりける程に書きたる返事なるが故に、かく敬禮の意を取り亂したる所もあるならむと丶いふ程の語を、補ひて見るべき所なり。御覧じ許すべしは、陛下にもその謹愼を、欠きたる所を御見許し遊ぞさる丶ならむかしと双紙地の文より、推量したるものなり。

以上を取束ねて、申せは、靭負の命婦は彼の二條の里亭の哀なりつる事共を、一々忍びやかに、奏問に及び、さて、彼の母、北の方より奉られたる御宸翰の御返事を、陛下の御前へ差し上げぬ。陛下これを御覧ずれば、さの意味の文字あり。

かく老耄て、薄命の淵に沈める身をも見捨て給はず。御慰問の御勅使を賜はり、ことに若君に附副ひ參らせて、參内すべき旨の優渥なる御勅掟を蒙る事の恐多さは身に餘り、家にも餘りて、置き所も侍らぬまで、有難き御事と存じまゐらせ候。か丶る恭なき御言を、承るに付けても、彼の娘がありし世にて候はゞ、親子二人が身に餘る御高恩と、如何ばかりか嬉涙にくれ候はむをと、一しほ先き立たれし人の事が思ひ出されて、かきくらすみだり心地に捗々しき、御返事も申上け兼ねまゐらせ候。宮城野の御製誠に身にしみて、拜見仕候。あらき風ふせぎしかげのかれしより、小萩か上ぞ靜心なき。とやらに、存じつゞけまゐらせ候、など丶いうやうなる意味の御返事にて、何となく言語の遣ひ方もみだりがはしかりき。されど、これも北

の方か愁傷の餘りにかきみだしたる心を、修めざりし程にかき記したればならむと、陛下には罪なく、御覽じ許させ給ふらむかしといへるなり。

布美安波勢（九）

白松園主人

八月

うみのほとりの月

左持　　祝之

いつはあれど秋のもなか、いづこはあれどこのあかしのうらに、こよひしもふねはてたるはうれしう、いそ山かげにこぎよするほど、月はや〳〵さしのぼれり。波にぬれたる濱の眞砂地さら〳〵と玉を敷きたらんやうにて、いそのさゞれもかぞへわたされたり。見わたしの海の面ははてしもなう、たゞすみにすみわたりてたとしへなし。

右　　保世

もしはやくけぶりも、心ぼそげに立ちのぼり、あびきする海人のよび聲も身にしみて、見るものきくもの、いとあはれに、かぎりもしらぬ海づらに、夕月のひとり立あらはれしを見るに、我身ひとつのと、千里の君のよみ給へるも、おもひ出でられて、浪かけぬに、袂もひぢて。

評判　左の文は、まさごぢとさゞれおなじやうなる事かさなりて、つたなけれど月のけしきをよくかきえたり。右の文はなんなけれど月のここちすくなし。持とす。

左　　清風

風もなぎ、浪しづかなる海づらを、くまなく月の照りわたり、をちのしまねの、さやかに見えて、いはむかたなくおもしろし。うらわをめぐる蜑小舟、いざりのほかげのたえ〴〵なる、よと〻もにいとまなきしわざかなと、これなんあはれに見なされける。

右勝　　徳

ちりばかりのくもりもなく、月たかくさしあがりてすめるよの、やゝふくるほどに、海のおもては波風しづまりて、たひらかになりもてゆくまゝ、八十の島山くまなくてりわたりて、いとえんなるにもよほされて、あまの子ども、ちひさきふねにのりて、こゝの島かげ、かしこのいそべなどより、おほくうたひのゝしりてこぎいづるも、例よりはひときはをかしうめづらしう見やられて、いといたう心ゆくよはになむ。

評判　左の文は、月の事末にては消えたるやうにてわろし。右の文は何事もたらひて、いとめでたし、かちとす。

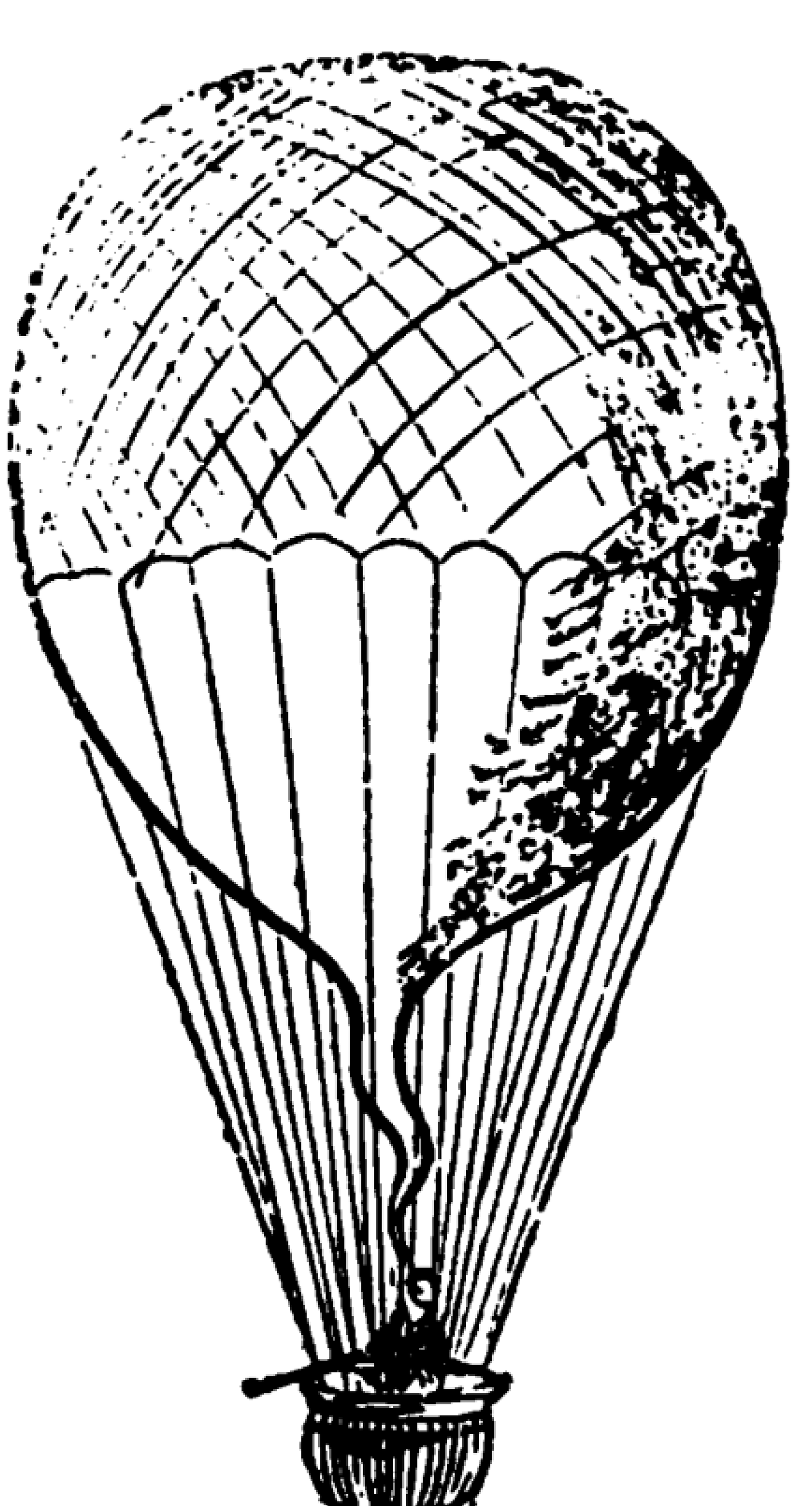
左　　重豊

かぎりもなき汐ちのはてより、たゞ物のわき出でたらんやうに、さしにほひたる出しほの月こそ、海のひろさもさらにうちおぼろかるゝこゝちもすれ。

右　勝　　尚文

こゑをほにあげてくる雁に、ふとめさめて舟子どもにこゝはいづこととへば、あかしとなんいふ。あなをかしの所に、舟とまりしつるかな、あたりのさまを見んと、とまのひまよりさしのぞくに、いとくらきよにてものゝあやめも見えず、たゞいそうつ浪のうちかゝるが、玉を、くだくやうにきら〳〵と見ゆるなりけり。そがひのかた、すこしあかり、はつかばかりの月さしのぼりて、ほの〴〵見えゆく海ぞら松原、えもいはずゑによくにたり。

評判　左の方もめでたけれど、右のかたいと〳〵めでたく、月ならで此の文もあなおもしろや。



漫錄



教梯抄（八）

續拾遺集戀五

戀の歌の中に

従二位頼氏

身のとがに人のつらさをおもふこそ
わすらるまじきこゝろ也けり

夫木集戀

六百番歌合に

法橋顕昭

いさやさは君にわはずぞわたらじと
身をうきはしにかきつけて見む

家集

戀五首の歌の中に

權中納言定家

飛騨たくみうつ墨なはをこゝろにて
なほとにかくに君をこそおもへ

古今集序

雜上七十二首

かつらきのおほきみをみちのおくへつかはしたりけるに國のつかさ事おろそかなりとてまうけなどしたりけれどすさまじかりければうねめなりける女のかはらけとりてよめるなり

これにぞおほきみの心とけにける

あさか山かげさへ見ゆるやまの井の
あさくは人をおもふものかは

同

雜上

女どもの見てわらひければよめる

けんげい法師

かたちこそ深山かくれのくち木なれ
こゝろは花になさばなりなむ

同

同

なりひらの朝臣のはゝのみこながをかにすみ侍りける時なりひら宮つかへずとて時々もえまかりとふらはず侍りければしはすばかりにはゝのみこのもとよりとみの事とて文をもてまうで來たりければあけて見たりければ言葉はなくてありける歌

老ぬればさらぬわかれのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな

返し

世のなかにさらぬわかれの無くもがな
ちよもとおもふ人の子のため

なりひらの朝臣

後撰集雑上

太政大臣の左大將にてすまひのかへりあるじし侍りける日中將にてまかりて事をはりてこれかれまかりあかれけるにやむごとなき人二三人ばかりとゞめてまらうどあるじさけあまたゝびの後ゑひにのりて子どものうへなどまふしける序に

兼輔朝臣

人のおやのこゝろはやみにあらねども
子をおもふ道にまどひぬるかな

拾遺集雑上

菅原の大臣かうぶりし侍りける夜母のよみ侍りける

ひさかたの月のかつらもをるばかり
家のかぜをも吹かせてしがな

金葉集雑上

宇治にて水車を見てよめる

早き瀨にたえぬばかりぞみづくるま
　われもうき世にめぐるとをしれ
　　僧正行尊

同　同

經信卿につくしてつくしにまかりたりけるに肥後國盛房太刀のあるを見せむなど申けれどもせざりければいかにとおどろかしたりければ忘れにけりと申たりければよめる
　　源俊賴朝臣

なきかけにかけたる太刀もあるものを
　さやつかの間に忘れはてぬる

千載集雜上

右兵衞督に侍りけるとき中院右大臣中納言に侍りけるに弓をかりおきて侍りけるをつかさ辭まをしてこもりゐ侍りける時かの弓をかへし遣るとて八とせまで手ならしたりし梓弓かへるを見るにねぞなかれけるとありしかへし
　　中院右大臣

何かそれおもひすつべきあづさゆみ
　またひきかへす時もありなむ

同　同

題しらず
　　紫式部

かずならでこゝろに身をばまかせねど
　身にしたがふはこゝろ也けり

新後拾遺集雜上

貞和二年百首歌に
　　等持院贈左大臣

わたり來て身はやすめとも浮はしの
　あやふき道をいかゞわすれむ

夫木集雜

六帖題朝

朝ごとにあらふとすれどつもるらむ　民部卿爲家
みの塵をかりいかできよめむ

拾遺風體抄雜

日吉社百首歌の中に　隆祐朝臣

大井かはむれゐるさぎのたつあとを
あさ瀬としりてわたる旅びと

（つゞく）

君子喩於義小人喩於利（續）

石舟道人

そこで論語を繙いて見ると、君子と小人との事を區別して申された所が、澤山ある。君子求二諸己一小人求二諸人一『君子坦蕩々小人長戚々』君子周而不レ比、小人比而不レ周　君子懷レ德、小人懷レ土、君子懷レ刑小人、懷レ惠、君子固窮。小人窮斯濫矣』などゝあり。其の意味は其れ〳〵に少しづゝ異なれども、詮ずる處、常に義と、利との二字に歸せざるはなし。そこで究竟する所は、君子と小人との別と云ふ者は、只義と利との二字である。即義に由て行ふ者は、君子にして、利に由て行ふ者は、小人である、又單に君子の方面の事計を申された所が、澤山ある。而て其の裏面には、何時も小人は反レ之と云ふ意味を含でをらぬと云ふとはない。守レ死善レ道とか、不レ患レ無レ位患レ所三以立一不レ患レ莫二己知一求レ爲レ可レ知とか、不レ患三人之不二己知一患レ不レ知レ人とか、事レ君敬二其事一而後二其食一とか、君子病レ無レ能焉。不レ病三人之不二己知一也とか、君子謀レ道不レ謀レ食耕也餒在二其中一矣。學也祿在二其中一矣。君子憂レ道不レ憂レ貧とか、飯二疏食一飲レ水曲レ肱而枕レ之樂亦在二其中一矣。不義而富且貴於レ我如二浮雲一とか、見レ得思レ義とか、君子操行心術を論じられたるに、其の反對の裏面には、必小人の操行心術が顯てをる。さうして君子

の操行心術は、常に義に非るなし。小人の操行心術は、常に利に非るはなし。義利の二關が君子小人の追分である。さて其の追分は何處かと云はゞ、即ち玆章の喩二於義一喩二於利一と云ふが、發程第一歩の地である。滔々たる世上、義に喩る者果して幾人かある。祿を干めんが爲に學び、人に知れんが爲に學ぶ、誰か然ざらん。世上君子儒なきを怪む勿れ。道を不レ謀して、食を謀り。道を憂ずして、貧を憂へ、見レ得義を忘れ、其の事を不レ敬して、其の食を先にし。己に不レ求して人に求む。誰か然らざらん。世人、小人儒多きを訝るなかれ。源濁れて、流清ず。本不レ正、末必亂る。其の學に志し、道を學ぶ時に當りて、喩二於義一喩二於利一己に、其の第一歩を誤る。何ぞ其の小人儒たるを疑はん。そこで當世の學士とか、博士とか何とか蚊とか云ふ學者達が、種々樣々な書物などを著して、種々樣々な理屈を謂ふ。ちよと讀でみると誠に面白い樣なれども、一向世道人心を裨益すると謂ふ點に於ては、誠に其の精神がないっ

其の口にする所の道徳とか、仁義とか云ふ所の者に就てみると、格別古人の語に異た所も見えぬ。さうしてそれが一向敎にならぬは何故であるかと謂ふ事は、研究してみねばならぬ。そこが矢張、玆の章の道理だ。だれ一人諭二於義一た學問志道者がない。盡諭二於利一學問志道する者ばかりである。そこでだれ一人、君子儒になる者がない。盡く皆小人儒ばかりである。そこで誰一人喩二於義一敎を立て道を論ずる者がない。盡皆喩二於利て、道を論じ敎を立る者ばかりである。そこで其の精神に於て、已に正鵠を誤りてをる。正鵠を誤てをる者であるから、其の敎、盡く無精神の敎で其の言も、盡く無精神の言である。無精神の敎言、安ぞ能く人を動さん。其の説く所、敎ふる所は、誠に立派の樣なれども、視二其所一レ以、觀二其所一レ由、察二其所一レ安、人馬瘦哉人馬瘦哉で、どうも苟安務得の心術操行が、何處となく文字の上にも、書物の上にも顯れて、其の喩レ於レ利の痕跡が、蔽はんとしても顯れてをるこれが、

先刻申した習氣の理窟だ。君子儒、小人儒、其の云ふ所を聞けど、同一の事の様なれども、爭はれぬ者で、諭二於義一諭二於利一の區別が、不レ知不レ識何處かの言葉尻に顯れて、其の腸が見穿たれてをる。如レ視二肺肝一だ。そこで同じ道德とか、仁義とか、云つて見やうが、小人儒の云ふ所は、既に其の根底の出處が諭二於利一と云ふ、利の心から目安を割出す者であるから、何處にか、其の趣味が顯れてをる。同じ仁義道德と云ふなら、誰が説でも同じことでありさうな者なれども、其所が妙で、佛書に能くある言だが、正人説レ法無レ不レ正邪人説レ法無レ不レ邪で、本々正法邪法とて世の中に二法ある者ではない。孟子も道は一のみと云た。そこで小人道とか、君子道とか、二つはない、同じ一つの道、君子が説けば、君子道となり、小人が説けど、小人道となるのである。道に正邪はなけれども、其の説手一つで正法となり、邪法ともなる。妙なことを言ふ様なれども、決して妙なことでない。早く譬て言ど、同し礜石でも、醫者が用ゐれは藥になり、素人が、用ゐれど毒になる様な者で、鳥渡これと同じ道理な者である。心に喩る所の者が君子は義、小人は利と異るから、仁義を説ても、道德を論じても、其の起點を釋ぬれど、利の心から淵源してくる者であるから、仁も、義も、悉く利の習氣を帶てをる。利の習氣を帶てをるから小人道だ。即邪法だ。同じ仁を説き義を論ひ、何處の端を味ふてみても、利の心と云ふ者が少しも見ゑぬ。何處を摘でみても、義の精神が充てをる。何處でも義の精神が充てをるから、君子道だ。即正法だ。こういふ道理な者である。今學問と云ふ者か耳目の學でなけれど、口腹の學なり。諭二於義一者が一人もない。義と云ふ者は、人が感ずるけれども、利と云ふ者の人を感ぜしむることは出來ぬ。いくら仁義道德など丶云つてみやうが、何にもならぬ。皆徒言空語に歸して仕舞ふ計りである。説く人も、聞く人も、皆諭二於利一者計りであるから、説く者は、人の耳に利なる様に説き、聞く人は己の耳

に利なる様に聞く。そこで己に利ならざることは聞かうともせず、又聞ても聞かざるが如しだ。人々利ならざることは言はうとせぬ。此が今の世の中の有様だ。どうも諭二於義一者が一人もないから仕方がない。そんな心で立言しても、説法しても、精神が缺てをる者であるから人の精神を感化裨益さするのなんと云ふことは、出來る筈がない。精神が精神を動すと云ふことはあるけれども、無精神が精神を動すと云ふとは、とても出來ぬことである。そこで、書物でも、何でも作れば、作る程人が粗末に思ふ樣になる、敎へられる人が、惡いばかりでない。敎ふる人が惡いのである。そこが本々諭二於義一と云ふ小人の心を以て、道を學ぶからどうしても、小人儒となり、小人道となるので、諭二於義一心を以て、道を學ぬからである、四体不レ勞して、傲然夫子と稱すれども、さて諭二於義一者か、諭二於利一者かと、孔夫子の前に裁決せられたるなれば、額に汗せざる者、果して幾人かある。喩二於義一喩二於利一と云ふは、實に千古、小人君子の申して分る丶所以を示して、人に知らしめられたる、孔夫子の御言葉で、尤も適切明快人の三思、三省尚不レ足とせざる不可る所である。今諸君學を好み、道に志すと稱す、未レ知果て諭二於義一か、諭二於利一か、諸君の猛省を促さゞるを得ざる所以なり。聊か感ずるあり。故に饒舌を辭せぬのである。

十二月十五日稿　（完）

編者云ふ。この說もと男子のものしつるなれば、言の葉、自ら、なよやかならず。されど理義はいと明快なれば、こゝに揭げつるなり。さる心して見てよ。

主從心得草（承前）

諏訪忠元（寄贈）

紙問屋のしくじりは、短冊紙や、色紙やといふて賣に

あるき、藥種屋のどら打は、焚蒼求に、虎屋の五種香といふてうりにあるき、質屋のしくじりは、お定りの紙くずかい、古着屋のどら者は、からかさの古骨、古椀買と呼びあるき、兩替やの欠落は、車力仲間へはいり、湯屋の番頭は、寄合辻番と出かけるも、皆是其職の緣によるもおかし。各々一心になつてかけあるき漸々一日に九拾文か、百文の利分を得て、諸事萬事の賄ひをして、世を渡る者多し。惜いかな。主人に居て其の働きを致しなば、餘程目出度身上となるべきに、殘念千萬なり。此時後悔の心を起し、怠りなくかせぐ時は、稀には身上に有付者もあり、又先主人へ歸參する者もあり、又再主取して、目出度身となる者あり。おそく共忠義正直を第一として。一生を送るべし。又始めよりあやまちなき人は、彌々忠義を盡し、主人大事を忘るゝ事なかれ。さすれば福德は澤山に來て、行末繁昌すべし。又忠義正直ある時は、一切の邪魔外道寄付事なし。かりにも油斷なき故に、買物に來る人にも、萬事氣を付て丁寧に取扱故にかいに來た人もよろこび、又重て來る者也。別していやしき下男下女抔は、主人の買物にも愛相のよき所へ來る者也。一日に一文宛よけいの德用あれば、一年に三百六十文、是を以て、主人の損德を考ふべし。たとへば鼻紙たばこなど、主人よりふんだんに渡したる物故に、冥利の考へなしに、遣ふ者は、おのづから麁末にする者也。又忠義冥利を知つたる人は、是も只は出來ねと、大切にする故に、少しも麁末にする事なし。ちり紙一日に一枚かんりやくすれば、一年に十八帖なり。是にて萬事考ふべし。忠義の心なき時は、色々樣々な橫合事を思ふて、うつかりと考て居る故に、かい物に來て下男抔が見損じて、乞食と思ひ、通らつせ抔と申す樣なる麁相の事もあり。又ある時は、鉢坊主抔を、かい物かいと取違へ抔致ておかしき事もあり。是忠心義心なき故の事也。忠義正直さへあれば、勘定違ひ、其外の不調法も少なき者也。大體年季奉公人と申す者は、上下ならして、一人前一

日に三もんめ宛もふけねど、入用たらぬ者也。十人の奉公人に、一日に貳もんめならしもふけて、漸々元直段になつてゆかぬ者故、餘程たんともふけねどならぬ者也。其のわけは、商ひ元手の利分、其の外、不時のかゝり物あつて、中々主人の徳用はなき者也。若此算用に心のつきたる人は、主人の物とて少しも麁末にならぬ道理也。一切の奉公人共、此事をよくしつて御主人の物を大切に致し、かげひなたなく、損失なきやうにすべし。是主人の爲ばかりにあらず、我身も天の冥利に叶ひて、福徳は願わずして來るべし。又よく考へて見るべし。日々のくい物、着物の入用は、何所から出ます、皆主人のふところより出る也。餘ほどもふけて差上ねば、主人の大損也。日々の働きは我身の養ひ也。主人の爲には少しもならずして、皆我身の爲のつとめ也。爾るに唯日々主人に働てやるやうに思ひ、主人のつとめおそろかにする人あり。是何といふ了簡か知れがたし。日々のくい物、着物、小遣の入用は、何所から出ます、天から降りもせず、地から涌もせず、皆主人のふところより出る也。爾るをしらずして、くい物、着物、小遣は、天からでもふるやうに思ひ、唯出來さうに思ひ、勤働く事は、唯主人にはたらいてやるやうに思ふ奉公人あり、不屆千萬といふべし。かやうな道理をしらぬ者は、何樣の惡事をせんもはかりがたし。早くいとまを出すにしかず。かやうにいふを間違と思ふ奉公人は、先我身上を持て、飯米、小遣、着物等のあるやうにして見るべし。中々出來る物にあらず。どふはたらき、どふ工夫しても出來がたし。爾るに主人のおかげによつて、飯米、小遣、着物共思はずにくらすといふは、ありがたき事也。主人の眼より見る時は、あの位なはたらきでは、どふ見ても飯米、小遣、着物の代はなし、年中には余程の足也、盆暮の勘定があぬと、苦勞してござる。爾るを知らずして、主人にしたゝか働いてやり、徳用を付ると思ひ、太平の八の字御飯をたべる抔は、あまり。了簡なしといふべし。是は考ふるに及ばず、毎日

毎日月に見て、知れたる事也。其の考もなしになまけて居て、大飯をたべる杯は、不屆千萬、此上はわるべからず。奉公人たる者、此道理をよく心得て、忠義一途に、晝夜つとめ働くべし。左すれは大飯をたべる共、あまり罰は、あたるべからず。大飯をくふわたいは、よほど勤めはたらかねぞなしとしるべし。

歌俳百人撰　上之巻

定家卿小倉の山荘にゐて集め給ふ百人一首は、末世の寶書にして、犬うつわらべも、口ずさめり。夫になろうて近代、百人詩といへる書あり。又、法眼千翁俳諧發句をよく、百人一句と題せるもあり。又、中興諸家百人一首といへるあり。又此頃新撰百人一首といふ寫本出たり。予、つらつらおもふに、新古人の口に殘りて難有秀逸の歌もあれど、おもしろく妙なる發句もあり。是を、其のまゝに納めおくは、人知らぬ深山へ、芝蘭の匂ふが如く、本意なき事におもはれ、和歌發句をまじへ取り集めく、歌誹百人撰と題す。此の外にも、耳に殘りし、秀逸名句數多あれども、教訓とも成べき事を、撰出して、書記しぬ。此の書に尊卑をわかたぬは、風雅のみちなれぞなり。中にも、恐多き御名もあり。賤しき乞食の名も出したり。玉簾ふかき雲の上人より、あまさかる鄙に至る迄、席上したるとて、更にとがむる事なかれ。世々和歌集にも、讀人人知と載たるは、行末を知らぬ旅人、甚賤しき賤の男、物乞ふるやからも有。是、人物を撰むにあらず、其の歌句を義談するのみ。此書の中に、さまで面白からぬ歌句も、或は、其の場の即妙なるも有。又、人躰に似合たる秀逸も有。又讀安き、文字も、くどくど敷假名も侍るは、童兒にも、見安からんためぞかし。前後の混雜いとゐなく書つらねしは、位なふして高位に交る風雅の道とのみゆるし玉ふかし。

梅が枝に蒜の風を吹交え●
　道しわるよにをなじ香ぞする　　海壽翁

第一有徳院殿吉宗公

請つぎし國の司の甲斐もなく
　めぐまぬ民にめぐまるゝ身は

百人一首巻頭、天智天皇、秋の田の御歌の塲なるゆへ、御仁徳厚き、大御所様の御詠歌を爰に出し侍る。然るに此の御歌の心、上五文字受繼しとは、正徳六年四月晦日將軍鍋松君御他界まし〳〵て、御世繼無之、依之、御三家御老中御評定の上、紀州より、吉宗公御入わつて相續し給ふ。是、則、正徳六年五月也。御代を請繼せ給ふ間もなく、御領の民百姓夏なり御年貢の頃にて、諸國の御代官衆、御年貢取上相納、皆濟目録にて、金納何程と申事を、御老中へ申上、其の書付は、御勝手掛り、御老中公方様え申上候事、恒例なり。依之其の節夏御年貢、皆濟の目録を御老中、土屋相模守、持出、吉宗公へ申上たり。君、是を聞し召れ、代をうけ繼し間もなく、未、天下の萬民に、ろく〳〵に、名を知られず、いわんや何ひとつ、民百姓のために、心を用ひし事も無く少しの恵なき内に、最早、萬民よりは、夏成の年貢を納めくれしは、まことは、民の辛苦の恵によることと、下の心を察しやり給ふ。彼の、我衣手は露にぬれつゝの御歌にも、おとるまじ。代を請繼しからは、民を撫育する筈なるに、左はなくして、恵まるゝは、國の司の甲斐なしと、下を恵みの御仁心恐多く、難有御歌也。此の君の賢なる御事は享保鍳といふ書に委し。此の御詠歌は、天智天皇の御歌の御心をせに似たれは、巻頭に、直し侍りぬ。

第二　　松永貞徳翁

花清し人も蓮の育から

此長頭丸貞徳は、幼名圓陀丸とて、連歌より、俳諧とい●はれたる時の宗匠の始奉り、禁裏に殿上人口すさみ

給ふ句を聞きて、其の身は階下に膝行し、句の善惡、甲乙をわかち、一點二點より、段々に、高點に至るまで傍に有りおふ、金蓮の手水鉢を打ならして、一點ならは一ッ、五點ならば五ッづゝ、はぢく。今に至りて、引墨する事を、金蓮をはぢくといへり。此の貞徳翁、此蓮の句を吟じたり。蓮は、花の君子になぞらへ、唐土にては、牡丹を、花王といひ、日本にては、櫻を、花王とぞいへり。花の清き事、此上なし。さるによつて、佛ぼさつ、是を愛し給ふ。佛前、または、寺などに、多くある物故に、蓮と樒とは、みな人、いまわしきやうにおぼへて、嫌へども、左にあらず。清きもの、最上なり。年始などに、萬歳の來て、祝しはやすを聞に、法華經の文ありて、蓮の事をのべたり。樒も、伊豆一國にては、門松のかはりに立る。恐多き事なれども、江戸御城にても、歳暮、年越の日、吉例にて、赤鰯に、しきみを交えてさす一間あり。中にも、蓮は、泥中より生して、泥に不染して、花いさきよく、人は、氏より、育といふごとく、いかなる田夫野人の子成共、そだてがら也。(中略)

みな、育がらのうちに有。士農工商ともに、萬、蓮花の如く、心をもつならば、何かあらん。たとへ、貧にもあれ、心さへ直なれば、是清貧にして、子路が、やぶれたる衣を着て、きつねの裘を着たる人の内にて、俵を背負も、はづかしからず、周茂叔も、蓮を愛したるも、こゝろ清きを、賞美せしゆへなり。いかなる山林波濤のすへよりも、忠貞孝子の出たるにて知るべし。

第三　　證明院殿學靈大姉

おもふ事なき身なれどもふるさとの
名もなづかしき都鳥かな

是は、淳信院殿家重公の御廉中にて、京都より、御下り、比奈の宮様と申奉る。御果報つたなし〳〵、世を去り給ふ。此の御歌は、一とせ角田川にてよみ給ひし

なり。至て感情深く、能叶ひしとはいひながら、御述懐の躰ありて、後年、御不幸ありしは、不吉の前表といひし人も有。夫は、歌の譯をしらぬものゝ云し成べし、此の御歌の心は、雲の上より、春々と、東へ御下り、將軍の御簾中にならせ給ふ。何ひとつ、御心に叶はぬ事はなけれどもとの上の句也。名もなつかしきとは、聞さへ戀しき御里の都にいゝ懸給ひし御手爾葉、恐ながら、面白し。いまだ、御父母のましませばしたひ給ふ御孝心あらわれたり。是、人として、上より、下まで、孝道をわすれては、返時も有べからず。しかれ共女儀には、三從のさわり有て、おもふ樣には、心とげがたきは、是非なし。かゝる簾中となりては、露ほども、おもふ事なき身のよふに思はんなれど、さ樣にはあらず。かゝる、やんごとなき、御身にて、安からぬ御物思ひは、あるものを、ましてや、埴生の賤女の見の上は、三從は、猶〳〵おもひやり給へかし。

第四　　芭蕉翁桃青

道のへの木槿は馬に喰はれけり

是は、中興の俳祖ぜせを翁の句也。江州粟津義仲寺に、墓あり。其の外、諸國に、門人の建てし石碑百七十餘ケ所に及べり。此の句は、翁、一とせ、行脚の節、越後の柿崎といふむらにて、有百姓の悴重治郎といふ者、生とく、出過ものにて、不斷喧嘩口論せしを、兩親、殊の外歎き、ぜせを翁に語りしに、其の悴教訓の爲にやられし句也。委敷は、予があらはせし、誹哲妙談集にあり。茲に略す。是は、よき教訓の句なり。木槿も山中深谷に咲きなど、人に手おられもせず、馬にもふまれまじ。いらざる道端に出張て咲たるゆへ、馬の爲に喰はれたる也。人も、十が九ッ、物毎に、ひかへめにして、引込でいれば、障りもなし、口利先立、人を押退ても出たがるゆへ、めどに取られて、喧嘩口論の相手となり、品によつては、切ッつ及ッつも出來る也。去れど、不滅の貝といふものは、潮を喰として、更に

磯邊えも出ず、たゞ、海のそこに潜りて居るゆへ、網にもかゝらず、釣の恐もなく、命長し。人、たまくヽ是をゑたる時は、其の貝のぬけ売までも、重寶とせり。又、風鳥とてあり。風を喰として、更に、求もなければど、里に近くは出ず、高山かけり遊べど、弓鐵砲のわなにもかゝる愁もなく、人、稀に、是を取れど、羽までも、寶とす。人もかくてそあらまほし。或は、藝能にからまされて、市中に引出され、道徳智識といわるゝ身も、都會に交りては、道のべの木槿同前にて、はては喰はるゝぞかし。むかしは、徳を隠し、わざと、難をこしらへし人も有。天台師は、とくをちゞめ、疵をあらわせおしへ給へり。せぞくに云出づる杭打るゝの場をのがれたり。

第五　　水戸中納言光國卿

見れど唯何の苦もなき水鳥の
　　あしに隙なき我が思ひ哉

此の御歌は、一通り、よく聞へたり。水鳥の流に浮みし處は、ゆうくヽと何の苦も無く見ゆれども、鳥とならずど、苦勞は忘れず。足遣ひ、少しもひまなく、やるせなく、いそがしき事、言語にも述られず。片時も、足を靜にすれど沈むなり。只、人は、觀察にて、我身をおもひ、人の身をも、よく察して、わが身寒けれど、人も寒し、我身暑けれど、人も暑からんと、おもひ、我が身つめりて、人のいたさを知れといへり、萬事にさつし届かざるは、仁義の道にあらず。歴史にも見へたり。御歌の體、人は、元より、かく、水鳥の上までも、御察しの届く事、淺からぬ御事なり。されど、人として、他をうらやみ、何がしは、富家にして、手前よけれど、不斷樂にして、苦勞はなし、など、只一通り見た計にて、人每にいへども、其の人のひまなさくるしみは、水鳥の、足に、心遣ある如く、おもひやられたり。殊さら、光國卿は、御三家御歴々なれど、只、御威勢強く、なんの苦もなきやうにおもわれけれども、

あまたの御家臣、國民の安樂をはからんとの思召は、いかばかりの御苦勞ならん。萬事、御歌の中に籠りて、いと難有。黄門公の御有様は、西山遺事といふ書に見えたり。過し寛文六年午六月、江戸御城に、下馬先え、何人か、高札を建てたり。三聖七賢十惡人と印、其の人は、誰々と、姓名あらわせり。初の三聖人の第一は、水戸黄門公と志るしたり。御一代のうち、あまた、書籍を作り給ふ事、夥しく、元祿十三年夏の末時、鳥啼し頃

ほと丶ぎすなれもひとりはさびしきに
　我をもいざなへ志での山路に

是、御逝去の前表にやと、御近習の人々、殊の外心ぼそくかなしみしに、果して、同年十月の中頃より、御病氣、將軍綱吉公御聞被遊、綱條卿、急に、御暇なく、晝夜不分御下りにて、御看病被遊候得共、其の甲斐なく、十二月六日の明六時、御壽七十三にして、御逝去なり、京都より、あまた、いたみの御歌なし給わる。

野邊の色も秋は千種のさまぐ\に
　夢と成行冬かれのそら

絶たるを繼、すたれたるを起すも、此の君にあり。

なき世まで誰か志たわん何事も
　正せる道の深きこゝろは

あまたあれども、事しげゝれども、もらし侍る。

（つゞく）

二孝女

井上賴文

大地の震動すべき前徴にやありけん。安政二年なが月の末つかたより、天温和に、風のどけく、晝は小雨ふるをりもあれど、夜は、いつも空はれて、星の光あざやかなりきとぞ。心得おくべき事なりかし。かみな月二日といふ日は、朝のほど小雨ふりいでしが、つかの間にやみぬ。夜に入りては、空朧氣に曇て、さながら春かとおぼゆる心地よさに、枕とりて、早眠る人も多かりき、神ならぬ身の、誰かはかゝるのどけき夜に、

まがことのおこらんと思ひがけんやは。花の園にたはむれて、胡蝶の夢をむすぶまに、亥の時の二點ともればしき頃、暴に大地震動き、家藏のくつがへり破る音、恰も千五百の雷の一時に落ちかゝりたらんが如く鳴響き、人々の、あはて、ふためき、啼叫ぶ聲、さまじともすさまじかりきとなん。此の時、千住の宿に、何某といへる賈人ありけるが、その妻某は、老母を救出さんとて、背負ひたるまゝ、くつがへる家の下になりて、はかなくなりぬとぞ。この妻は今年、やう〳〵二十だかりなりけるが、みめ容姿のうるはしきのみか心ざしやさしく、日頃まめ〳〵しく姑にかしづき、夫につかふること厚かりけり。夫某は、あやにく、ものへ往てあらざりしが、大地震に驚きあはて、歸來れど、家はこと〴〵く倒れて、いとあさましきありさまなり。母やいづこ、妻やいづこと尋ぬれど、何處いにけん影だに見えず。召仕の男女等は、みな外面に在て云く。このあたりにて、母上様〳〵と呼給ふ御聲を聞き侍しが、其後は何地いにたまひけん、おのれらは、おそろしさに、我身さへ忘られて、前後も覺えずといふ。さては、此の家の下にこそ埋れけめと、屋根を穿ち、倒合ひたる柱、棟など取除けつゝ見れど、いたはしきかな、妻は老いたる母を背負ひたるまゝ二人とも、壓に打れてはてたりけり。日頃より孝心深き性なれど、爭でか一人にて遁れ出べき。一度は遁延びしかど、母の姿の見えざれど、復危き家に立入て、援け出さんとする間に、家屋くづれかゝりて、その下に埋れしなりけり。家内の人は更にもいはず、あたりの人々もはせつどひ、共に袂を絞りきとなん

（未完）

柿屋雜稿

赤松景福

かすみ

霞霧など、古は時を定めずいへる事。又詩人が霞字を誤用せり、といふことにつけて。今霞るもの有れど。今

霞のことに付て按ずるに。

萬葉十卷冬過て春きたるらし朝日さす春日の山に霞たなびく

同　時は今春になりぬと御雪ふる遠き山邊に霞たなびく

かやうに霞は春のものとやうに、古よりいひなせり。霞立春日之里と冠辭にいへるも、(春霞春日里ともあり)自らさることと聞ゆ。萬葉集中、霞をよめるもの、總計八十首ばり有て、其十分の八までは、春にかゝれり。次に、

同　十卷朝霞たなびく野邊の足引の山ほとゝぎすいつか來鳴む

是は夏にかゝれり。次に、

同　一卷秋の田の穂のへにきらふ朝霞いつへの方に我戀やまむ

是は秋に係れり。次に、

同　廿卷打靡く春を近みか烏玉のこよひの月夜かすみたるらむ

是は冬にかゝれり。かやうに時に拘らずよめれど、今は凡春三月の内なるべし。賀茂社歌合判詞の趣に因て、霞と出たる題は、春の初をよむとするは、餘りに詞苑を狹く畫れるもの也。初春霞といふ題と單に霞といふ題との別もなきことにて、かやうの習は捨つべし。さて歌書にも或はいへる如く、漢土にて、霞といへるは、我俗言に朝燒夕燒とて、日の出入に空の紅艷なるをいふなり。

霞說文に赤雲氣也。玉篇に東方赤、增韻に日旁彤雲、通作レ緞と有り。詩文に朱霞、紅霞、丹霞、絳霞、赤霞、李嶠詩に晚霞飛處散朱暉といひ、又桃杏の花、美人の臉などに喩ていへるも、皆赤色を常とせり。しかるに今本邦人の詩に、白き花を霞に見立ていふが如きは、和漢の差別を知らぬものか。劉長卿詩に仙陂疊靑霞、(楊烱少室碑文にも靑霞の字見ゆ)張羽の詩に服食唯消五色霞、及び紫霞の仙、是等は神仙道士に係われむ、殊更に異色をいへるも有べし。我歌に用ゐる霞の

衣、霞の袖は、春の着る、或は佐穂姫の着る料に言ひなせり、此類彼にては神仙などにいへり。薩都刺詩に天風吹動碧霞裙、瑤池内史翠霞衿。霞裳の字は謝眺が七夕賦に見えたり。又歌に霞洞は仙人の住處を云ひ、それに比して仙洞をも云へるは、漢語の義を帶びたるが如し又流霞は楊雄甘泉賦に見ゆ（抱朴子に見えたる流霞、孟浩然詩に何惜醉㆓流霞㆒とあるは、酒を云へる也）此語の本義は飛霞などの如く、流は飛動の狀をいふにて、必しも水に係るに限らず。我國にも古はかくもいひて、萬葉に春霞流るゝなべに、又沫雪流る、又櫻の散るを流らふとよめるも見えたり。されど後は川などによせて讀むが穩なり。

詩歌合家長　隔てつる槇のを山もたえ〳〵に霞流るゝ宇治の川浪

是也。又

和歌所歌合　春のたつ霞の光ほのぼのと空にあけゆく天の香山

「此光も威光なるべし」といへれど、是は詩に霞色霞光などいへる如く、只その光景なるべし。又漢字の本義によめるはいと〳〵稀なり。

後柏原院集　紅の名に立よりや心をば春のかすみの色にそ有けむ

慈圓　くれなゐに霞の袖は成にけり春のわかれのくれかたのそら

歌にあつては反て異樣にてよからじ。彼紅光燦爛たる霞とほの闇きかすみとは、その實相違ありて、似つがはしくもあらず。但し文字は萬葉を始め、多く用ゐたれど、歌に霞字を用ゐる事妨なし。本邦古人の詩の霞字大抵誤て歌のかすみに作れり。懷風藻に吉田連宜が、從㆓駕吉野宮㆒詩に、雲卷三舟路、霞開八石洲、とは秋の詩の樣なれど、本義の霞かと思へど、猶あらず。彼にては霞は固より四時の別なし。杜審言詩に雲霞出海曙、梅柳渡江春、是は早春の候なれど、歌にいふ霞のやうなれど猶あらず、王勃が滕王閣序に、落霞與孤

鷺齊飛とあるは秋霞也。さてかすみには靄字あたれり。

靄字典に云。説文に雲貌、韻會に雲集貌、又氣也、韻書に烟靄、埃靄、春靄、暖靄などありて、我春霞によく、叶へり。此字固より四時を論せず。又烟景といふも我春かすみに叶へり。桃李園序に、況陽春召我以烟景、李中詩に蒼々烟景昏とあるは是也。又單に烟ともいふべし。猶烟霧等別に識す。

右拙稿詩歌辨略の一條なり。歌人は詩文を作らざるも、論なうよき事なれど、漢學の久しく傳はれる我邦にて、歌の題、歌の詞の上に、彼此辨ふべきもの有るを以て、拙なき筆をかりみずものせる也。

行脚の掟

一一宿なすも、故なきに、再宿すべからず。樹下石上に臥すとも、あたゝめたる筵と思ふべし。

一腰に寸鐵たりとも帯すべからず。惣て物の命を取る事なかれ。

一君父の讎ある處には、門外にも遊ぶべからず。倶に天をいたゞかざる忍びざる情あればなり。

一衣類、器財、相應にすべし。過ぎたるはよからず。足らざるもしからず。程あるべし。

一魚、鳥、獸の肉を好んで、食ふべからず。美食珍味にふける人は、他事にふれやすき者なり。菜根を咬て、百事をなすべき語を思ふべし。

一人の求めなきに、己が句を出すべからず。望をそむくも宜からず。問はざるに説くは、説くにあらず。問ふに、答へざるはよろしからず。

一たとひ、嶮岨の境たりとも、所勞の念を起すべからず。起らば中途より歸るべし。

一馬、駕籠に乗る事なかれ。一枝の枯杖を、己が、瘦脚と思ふべし。

一好んで酒を飲むべからず、饗應により固辭し、がたくとも微醺にして止むべし。亂に及ばずの禁有。幽

亂紀歳之戒、祭に醅を用るも、酔を憎んでなり。酒に遠ざかるの訓あり。愼むべき事なり。

一船賃、茶代忘るべからず。

一他の短をわげ、己が長を顯はす事なかれ。人を誘て己にほこるは、甚賤しき事なり。

一俳談の外、すべからず。雜話出でなど、居眠りして勞を養ふべし。

一女性の俳友にしたしむ可らず。師にも弟子にもひらぬ事なり。斯道に親炙せむ、人をもて傳ふべし。總て男女の道は、嗣を立るのみなり、流蕩すれど、心敦一ならず。俳道は主一無適にして、成す而已省るべし。

一主ある者は、一枝一草たり共、取る可らず。山川江澤にも主あり、勤よや。

一山川、舊跡親しく尋ね入るべし。ふらたに私の名をつくる事なかれ。

一一字の師恩たりとも、忘るゝ事なかれ。一句の理をだに解せず、人の師となることなかれ。人に敎るは、己を成して後の事なり。

一一宿一飯の主もをろそかに思ふべからず。さりとて媚び諂ふ事なかれ如此人は、世奴なり。斯道に入る者は、斯道の人に交るべし。

一夕を思ひ、旦を思ふべし。旦暮の行脚といふ事は、好まざる事なり。人に勞を懸る事なかれ。しむ〳〵すれは、疎んぜらるゝの言を思ふべし。將た麁食たりとも好むべからず。

花がたま

井上頼文

田園所見　醒庵

靑秧寸々水田を彩りて、蛙聲哢々暑氣を催し來る。田園これより、漸多事。不レ知今朝雨吾田幾畝青と矼を渡りて尋ぬれば、路傍の叢竹、新筍の簇立せるを見る。就きて之を

採らむとすれど、蝮蛇游々として、人を怖れざるも憎く、日光新晴を放ち、早蟬樹頭に喧し。仰ぎ見れど、藤花老松に纒ひ、紫房半天に匂へり。又奇絶。

水は山背を下り來りて筧に落ち、轉じて上中下段の田に灑げり。静心なく花の散るらむ、卯の花、山吹などの流れ浮ぶを見るも亦情あり。

朝に聞くものは水鷄の聲、夕に見るものは螢の影、雉子鳴くなる麓の里河、鹿聞ゆる河端の軒、此の邊の風物や、都人士をして、價を評せしめなど、豈啻春宵一刻千金の比ならむや。

晝間隴畝に起ちて見渡せど、白き赤き手拭もて、頭を覆ひたる村娘村婦が木强なる男子と打交りつつ、三々五々として、早くも田植に着手せるを見る。かのもてのもに聞ゆる田歌は、互に相應答して、時に嬉々たる笑聲を漏せり。凡て此の境や、眞に天地の樂土なる哉。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

起きよ國文學者　　聽水

杜鵑天邊を翔りて、血に鳴かむとす。螢火水畔にもえて、身を焦さむとす。起きよ明治の國文學者。汝は今猶、春眠、曉を覺えざるものの如し。汝は「ける」「かな」と歌ひて、空く三十一文字の小天地に跼蹐せり。汝は中古の文体を弄して、僅々二三行のもの、道路に步行せり。所謂赤門派なる二三の掌中にわたら我が國文を委ねて、恬として顧みざるか。何ぞ椽大の筆を振ひて、大に腕に縒をかけざる。世の國文學者よ。廂を貸して、おも家取らるる愚を學ぶ勿れ。今や杜鵑鳴かむとす。螢火もえむとす。國文界の爲に八千八聲を叫べ。國文界の爲に五月闇を照せ。國文學者は正に枕を蹴て起つべきなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

綠陰叢談（二）　　白松園主人

鎌倉以降、武士道行はれてより、廉恥の二字を以て、

社會人心の大勢を左右し、あらゆる道德の標準とするに至りしかば、婦人社會にありても、平安朝時代とは大に其の趣を異にして、たとへば菊花の上に霜を衔し、女郎花の峯の月に對ひぬるが如く、たをやぎたるが中にも、凛として冒し難き處ありき。顧るに我國の女子道德は、奈良朝までは、大体に於て自然の發達をなし、平安朝に至りて、大に智識の進歩すると共に、忽地一の横雲は山の半腹を掩ひて、皎々たる明月、殆光を失はんとせり。然るに武家專政の世となるに至り賴朝前代の失敗に鑑み、武士を戒飾して、朴直廉耻の風を創唱せしより、所謂武士道なる者、鎌倉室町を一貫して、德川時代に及び、近く維新前までの、唯一なる道德となれりき。婦人は勿論坤位に在る者なれど、男子社會の風潮に伴ひて動く者なる事は、爭はれざる事實なりといへども、正義によりて身を處するは、人生の就も高尚なる所以なり、卑猥なる男子、腐敗せる道德のために、神聖なる光明を沒せらるゝは、蓋し、劣等なる婦人といふべし。婦人といへども墮風亂俗にあひては、之れを既倒にかへすの氣概なけれど、敬愛すべき資格を失へる者にして、社會を汚俗に陥れし罪科は、半面の責を逭るべからず。吾人は婦人に望むに、彼の泥中の蓮を以て、品性の最上摸範とせんことを以てす、抑も我國女子道德の、泥中の蓮たらん者を、歴史上に求めんには、いづれの時代をか以てすべき、吾人は武士道に伴へる、女子道德之なりと答へんとす。即此の時代の道德は、奈良朝以前に於ける、自然の發達に駕したる、所謂古有的極美の時代なりけれどなり。

小宰相の局、靜御前、大姫、巴御前、時頼の母、正行の母、寂阿の妻など、數へ來れば光輝ある婦人、限もなく多かるが中にも、優にも哀れにも、純正なる粹美を、長く史上に馥郁たらしめしは、新田義貞の妻、勾當の内侍にこそ。幾度語るとも、飽き足らざる美談なれど、今云ひ出でんとはするなり。太平記の記者は艷

麗の筆を揮つて先其の發端を説いて曰く。

此の女房は頭の大夫行房の女にて、金屋の内に粧を閉ぢ、鷄障の下に媚を深くして、二八の春の比より内侍に召されて、君王の側に侍り。羅綺にだも堪へざる貌は、春の風一片の花を吹き殘すかと疑はれ、紅粉を事とせる顏は、秋の雲、半江の月をはき出すに似たり。されば椒房の三十六宮、五雲の漸くに遶ることを忻み、禁漏の二十五聲、一夜の正に長きことを恨む。

之記者が先其の纖姿婀娜として、花月を羞殺せしむべき容皃と、禁庭の雲の上に出仕せし經歴とを、簡單に叙述せし者なり。

去ぬる建武のはじめ、天下、復亂れんとせし時、新田左中將、常に召されて、内裏の御警固にぞ候はれける。或夜月凄まじく、風秋なるに、此の勾當の内侍、半、簾を捲きて、琴を彈じ給ひけり、中將、其怨聲に、心引れて、覺えず、禁庭の月に立ち吟ひあやなく、心そゞろにあこかれてけれど、唐垣の傍に立ち紛れて伺ひけるを、内侍、見る人ありて、物佗しげにて、琴をば彈かずなりぬ。夜痛く深けて、類ひまでや有明の月の、くまなくさし入りたるに、はつらからめと、打ち詠じてしほれ伏したる氣色の折らむ落ちぬべき萩の露、拾はゞ消えなん玉篠のあられより、尚あだなれば、中將、行末も知らぬ道にまよひぬる心地して歸る道もさだかならず。

初めて、義貞との關係を語る、南朝柱石の將軍も、さしも戀情には、うち勝つこと能はず。遂に、

我袖の涙にやどるかげとだに
しらで雲井の月やすむらむ

といふ短冊は、内侍の許に傳へられたり。されど内侍は君の聞召されんことも恐しとて、手をだにふれで、そのまゝかへされたりき、内侍はこれ淫奔の處女にあらず、あだなる戀にはひかされぬなり。然るに誰か之を奏しけむ、君聞召して、内侍を義貞に賜ひぬ。後朝

敵勢を得て、南風次第に競はずなりて、義貞北國へ退く時、内侍をば今堅田といふ所に留めおきぬ。

かゝらぬ時のわかれだに、行くには跡を顧みて、頭を家山の雲に廻らし、留るは末を思ひやりて、泪を天涯の雨にそふ。況や中將は、行末とてもたのみなき、北狄の國に赴き給へば、生きて再び廻りあはん後の契もいざ知らず、又内侍は都近き海人の磯屋に身をかくし給ひければ、今もやさがし出されて、憂名を人に聞かんずらんと、一方ならずなげき給ふ。かくて翌年の春、内侍の父行房朝臣は、金崎にて討死せられし由仄に聞えしかば、内侍の悲歎やらん方もなく涙の雨に朽ちぬる事歟年、只中將に相見んをたのみにて、憂年月をあるかなきかに送りしが、義貞屢々戰捷ちて、勢頻りに振ひしかば、今は、道の程も、暫く靜かなりとて、内侍を迎にやられしが、藤島の戰ひにて、俄に戰死せられしことをば、夢にも知らで、忽地凶報に接せられけん心のうち、書き出でんも、なかなかにおろかなり。太平記に、當時の狀を記して曰く、

内侍は此の三年が間、暗き夜のやみに迷へるが、俄に夜の明けぬる心地して、軈て先づ杣山まで下り着き給ひぬ。折節中將は、足羽といふ所へ向ひ給ひたりとて、此處には人もなかりければ、杣山より輿の轅を廻して、淺津の橋を渡り給ふ處に、瓜生彈正衞門尉、百騎ばかりにて行合奉りたるが、馬より飛びており、輿の前にひれ伏して、是はいづくへとて御渡り候ふらむ、新田殿は昨日の暮に、足羽と申す所にて、討れさせ給ひて候ふと申しもはてず、涙をはらはらとこぼせば、内侍の局、こはいかなる夢のうつゝぞやと、胸ふさがり肝消えて、中々涙も落ちやらず、輿の中にふし沈みて、せめて、はあはれ其人の討れ給ひつらむ、野原の草の露の底にも、身をすて置きて歸れかし、さのみは後れさきたゝじ、共に消えもはてなんと、泣き悲み給へども、早其輿かき返

せとて、急ぎて又杣山へぞ返し入れまゐらせける。
杣山は、そのかみ暫し中將の住家となれりし處なり、書き散らされし色紙の歌、何となき手ずさみの筆の跡も、都を思ひ人を戀ふる言の葉ならぬもなけれど、之を見るにつけても、いよ〳〵悲哀に堪へずして、紀念の跡にて、中陰の程をも過さむやと思はれしに、やがてそのあたりも物騷がしくなりて、敵近づくなど聞えしかど、それだに叶はで、空しく都へかへられぬ。
仁和寺のあたり、幽なる宿の、主だに住まずなりぬる蓬生の宿に送り奉る。都も、今は、却りて旅なれど、住所も定まらず、心うかれ袖ぞぬれて、いづくにか身を浮船のよるべもあるべきと、昔見し人の行末を尋ねて、陽明の傍へ行き給ひける路に、人數多立ちあひて、あなあはれなんといふ音するを、何事にかと立ち留りて見給へば、越路遙に尋ね行きてあはでかへりし新田左中將義貞の首を、獄門の木に懸けられて、眼塞り色變せり。
嗚呼悲慘の極、誰か之を讀んで、内侍のために泣かざる者あらん。「思二其人一至二其鄕一其處存其人亡」多年勤王の旗を飜して、國家の柱石、忠臣の龜鑑たるべき人の、敵鋒に仆れしのみならず、山を築き壇を立てゝ祭られこそせね、せめて葬をも營むべきに、御首を、木にかけて、往來の人に見せんとは、たとひ敵といゝひながら、情なきわざかなと、目も暗れ心も消え果てゝ、いかで二目とは見らるべき、傍なる築地のかげになき倒れぬ。知るも知らぬも、是を見て、あはれ痛ましの御さまやと、袖を絞らぬはなかりけり。晩鴉哀を告げて茂林にさわぎ、遠鐘腸を斷ちて暮色沈めども、蓬が本の露の上に泣きしほれて、更に立ち上らんともせざりけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

瑜伽振鈴の響き、一乘暗誦の聲、嵯峨野の奥、往生院のあたりなる柴の扉をもれて、曉の月に愛別離苦

の夢を覺し、筧の水の音に厭離穢土の心を洗ひて、欣求淨土の念、日々に進みつゝ、なき人の菩提を弔ひて、墨染の袖に明暮を修行すましける尼御前は、翠髪花顔一代の英雄を泣かしめたる美人、勾當の内侍が操の果なりと知られけり。

見聞隨筆（二）

なにがし

去年の暮の事なりき。一夜、北風烈しう吹きて、電話の線を鳴らし、大路は凍りて、道行く人の下駄の音高し。時は、既に亥を過ぎたるらん。四邊は漸く靜閑にして、犬の遠吠をちこちに聞こえ、辻によぶ鍋燒饂飩の聲寒げなり。折柄、あぶり出し辻うら……心意氣つぢ占と、朗なる優しき聲して、呼び來るものあり。聲の細くして鋭く高きは、正しく女性とは推せられ、又、其の聲の單調にして、しかも、息の續きがてなるに、いと稚きものならんことをも推し測られき。聲はやうやう近うなりぬ。あはれ、如何なる人の子にかあらん、人は、皆戸をとざして焔を擁し、幼きものどもは、皆臥床に入りて、暖き夢を結ぶべき時なるに、可憐のことや。「我が子なら供にはやらじ夜の雪」、親の心は、皆かくあるべきに。さては、親のなき身にか、また、親を養はんとて歟。ともあれ、賣代の要あるものならん。いざ、買うて得させんとて呼び入れぬ。身にまとへるは、襤褸にはあらで、二子といふものなり。頭は、紫メリンズにて覆ひ、足には、紺足袋を穿き、手には、毛絲にて編める半手袋をはめたり。肩より斜に腋下に懸けたるズックのカバンは、これぞ、彼の辻占を入れたるものなりける。大きやかなる提灯の燈に映れるを、瞥見れど、齡は、やうやう七歳八歳にもならん歟と思はれぬ。眼ざし涼しくして、溢るゝばかりの愛嬌を湛へ、鼻筋通り、口元緊りて、相好いやしからぬ樣、由緒ある人の落胤とも見ゆ。恥らひてか、よくは之言はねども、育も賤しきものとは思はれざりけり。二つ三

つばかり購ひて、さても可愛のものや、齢は幾つぞと問へば、九歳と答へぬ。何處よりは來つると問へど、本所よりといふ。夜も更けたるに、獨身にて歸るにやと問へば、首肯きぬ。あはれ、この寒空に貧りありくこそ傷はしけれ。父やなき、母やなきと問へど、唯笑ひて答へず。やよ、夜は更けぬ、道も遠からんに、とく歸れ、人々も待ちつらんをとて、暇とらせぬ。

次の夜も、又次の夜も、時をたがへず呼び來て、門邊に佇み、幾度となく、繰返し〳〵呼びあぐる樣、其の意、買はんことを求むるものに似たり。其の心根のいたいけなるまゝ、人して買はしめぬ。それより後は、夜な〳〵呼び來て、時をたがへしことなし。たま〳〵其の聲を聞ざる夜は、何となく物足らぬ心地するに至りしが、今年の三月ばかりより、つひに、其の聲を聞かずなりにき。爐の邊茶を煎る席などには、彼の上を案ずるとはなしに、噂などしあへりけるに、この程、また、夜な〳〵彼が聲をきくに至り、彼が健在なるに、心落ち居る心地しぬ。むしあつき夜の軒端、彼の凉しき聲をきかば、暑さ忘れて嬉し。

隨感隨筆

白松園主人

○人心の腐敗

近來人心腐敗の絶項に達しけるにや、日本道義は、全く社會の邪魔物と見なされて、日々に蝟集せる新聞紙上の悖徳談も、見慣れてはあさましとも思はず、却りて面白き事と思ふに至りぬるは、なべての觀なるが如し。かくては勸懲の趣意立たざるのみならず、却りて、社會を腐敗に導びく機關ならんとすめり。風俗壞敗して道德地に墮ち、士氣全く腐亂せし者といふべし。かくては敷島のやまと心は常山の花にも劣り、君子國の美名は小人國の醜名ともなりぬべし。悲むべき事ならずや。

案山子

田端隱居

案山子とは、秋、田苅る前、稻の穗の熟する頃、雀、烏等を追はんために、みのに笠を被せ、人の姿などさせて、田の面に立つるを、小禽、誠の人と見て、初めはおそれて逃げちりぬ。されど、いつも、一つ所に、一つの姿して、たゞ立ち居るを、雀ながら、よく〳〵見て、其の誠の人ならぬを知り、遂に恐れざるに、人、又工風して、之に、ひもを通し、なることをつけて、居ながらふりならす。烏、雀、其の音におどろきて、又逃ぐ。されど、かくする事しば〳〵なるに、はては、之もをぢずなりぬ。もし、人の、田のぐろを通るあれば、烏雀おどろき立ちて、遂には、案山子の笠の中にかくるゝに至る。あはれ、おはん爲の案山子、中々に、かくれ家となる。笑ふに絶えたり。之、おどしを以て、主旨としたればにて、烏雀すらしば〳〵のおどし、遂には聞かず、反つて、之を幸福とす。まして、萬物の靈たる人間をや、おどし、或は、いつはりもて、如何に、たくみにおどすとも、何かは、いつまで信じておそれかしこまん。一旦僞あらはれては、反つておろかになさるゝものなり。あはれ、人、いつはりは、此の案山子の如きものぞと知れや。

才くらべ

蓬生夫女史

狂歌ばなし

不吉を吉に祝ひなをしたる曾呂利新左衛門の狂歌にも劣らぬめでたきはなしこそあれ、むかし、あるやんごとなき君の他家より養君を迎へとり給ふとて、樣々設けたる中にも松の島臺いかめしくつくらせけるに、如何にかしけん、その島臺の足折れたるに、人々いたく忌みけるを、當時名高かりし風來山人、之をきゝ、それ

はいとめでたきしるしなるを何を忌み給ふ事かはと



てやがて、筆をとり、さらく\と短冊にかきけつたり

あしといふ事は殘らず取りすて、
　よき事ぞかり殘る若松

としたりしに、人々かんじ興がりたりといふ。其の後、其の家、何事もなかりしとなん。いとめでたかりし狂歌にて、吉も不吉も祝がらにこそ。

百種園有武といふ人は、通稱を、中村得、字を玄機、號を南嶺、又有山人と呼びなして、狂歌に名高かりける人なりけるが、山人、つねに諸國を遊歷して、その風景風俗を考察して筆記することをこよなきたのしみとしたり。一年、丹後國の府中と云へるより、駕籠をやとひ、ある山路をこえゆきしに、日くれて、月のれも

しろくさし出でたれど、駕籠を下りて、その景色をながめをりしに、駕籠舁ども、傍にありて、しきりに酒代を請ふてやまず、山人はそら嘯きて

酒代をやみとねだりて旅かでに
月みる邪魔をなせる雲助

とよみたりしに、流石の駕籠舁どもゝ、心に愧ぢたりけん酒代を請ふをやめて、諸共に月を見て歸れりとなん。

豐臣秀吉公、かねて御秘藏せる井戸茶碗ありけるが、ある時、近侍に仰せて、そが茶碗をめされけるに、過ちてとりおとして、五つに割れたるに、御氣色のかはりしを、御前に侍りける人とりあへず、

つゝ井筒五つにわれし井戸茶碗
とがをぞ我におひにけらしな

とつかふまつりしに、秀吉公が御氣色もなほり、中々に興がらせ玉ひけるとなん、之もまためでたき事なり。

一休のとんち

一休和尙御遊歷の折、何處なりけんある山伏道づれとなり、幻術のくらべあひをなさんと云ふ。折りしも、一匹の犬來れり、山伏之を見るより、とりあへずあの犬を近づけ申さんとて、何事か口にぶつ〳〵となふれど、何の功もなきを、一休は懷よりやきむすび一つをとり出し、犬に投げつけ、なほ一つを、手に握りて立てりしに、犬は尾をふり、ころ〳〵とよろこびて、一休の傍近くより來りけり。必竟、魔術と云ふも、幻術と云ふも、人間たゞ一の才にこそ。

張合（その六）

白魚女史

心にまかせぬ涙をやう〳〵に拂ひて、かりのたよりに事よせたれど、文代、部屋にかへりては、又一入にみ

なぎる涙せきあへず一日は涙にかきくらし、一夜は、涙に泣きあかしぬ。流石に烏のねどころをはなるゝ聲めづらしう、はじめて我に歸れど、淸少納言が、むかし、一の人に、一に思はれし事のうらやましく、そゞろまた己が身の口惜しく思はれて、其の後も、とかくに、沈みがちなり。

浪男も、もとの心すてがたくてや、之も大方はこもり居て長歎息しむ〳〵なり、

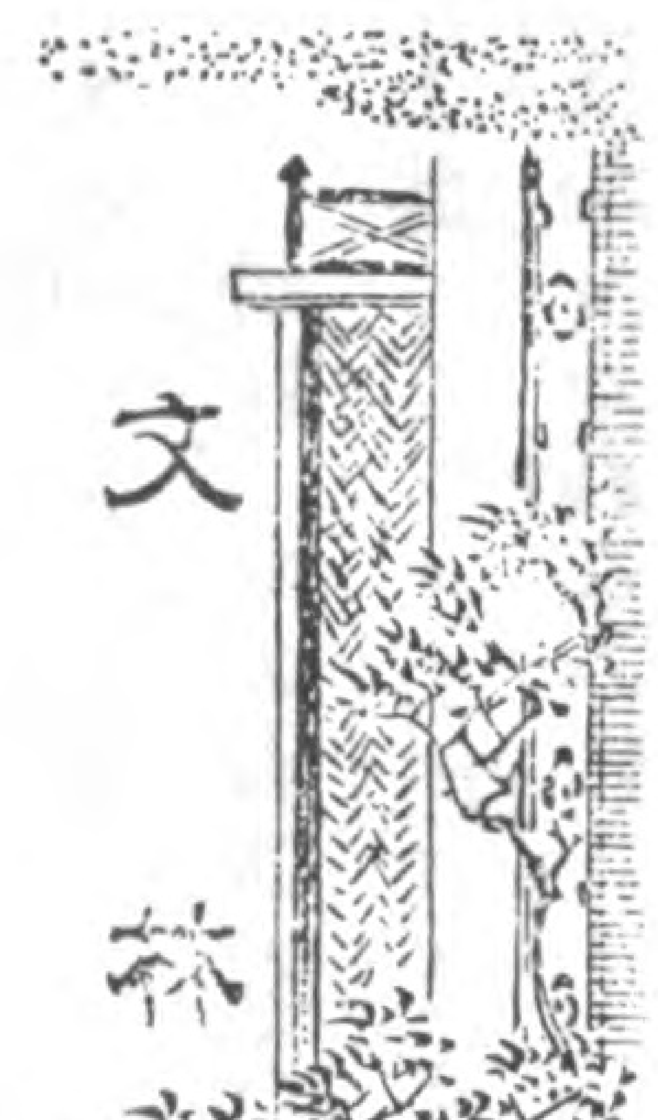
事にはかしこき人も、子を思ふ情にはおろかなるものなり、白川元雄、きびしく其の子をこらし、其の子も重ねて爭はず。父の意に從はんとすれど、又何となうすまぬ心地。之れはあまりに、我があつせいなりし也。結婚は大切のもの、人の一生をたのしくも、あぢきなくも、なすものなるに、言葉きびしく云ひしは、己のあやまり。かうやうの事は、女にとはする事とて、妻して幾度か、とはすれどあだし心はもはや、さつぱりと捨てましたとのあいさつ、父はいよ〳〵心すまず。こや浪男、あだし心ではない、己が、あつせいだつた、ふらんでもよき、親のけん力をふりしも、文代にこえたるものなしと思ふた、己のせまき眼、たでくふ虫の一種やも知れず。のう浪男、今の自由結婚とか、やそ敎結婚とか云ふ結婚は、あまりによしとは思はねど、むかしよりのあつせい結婚もまた、ほめる事ならず。父もさやうに頑固親父にもなかりしを、殊に其方の云ふ事なれど、考へ見べかありしを、おかぼれの一筋より、幼き子にでも聞かするかの如きとは意見、もう、われはとりけしにして、文代には相應の財産つけ、相應の支度をなし、相應の所にとつがすればすむ事。先日の言は、己が、あやまりとして、捨てゝ、改めて、そちの心のまゝを聞かふ。こや浪男、友の妹とは一體誰ぞ、聞かせよとあれど、浪男は微笑、否、私もあれはとりけしました、先日より母上して度々の御問、御答は、母上に致しおきましたと、はれやかに答へられて、父は又とらへん所を失ひ、しばしは、浪男が面を守り



居りしが、浪男、それではあまりに水くさきにはあらずや、日來、己れは、さやうにあつせいはせざりしを、まゝ親か、養子親かに對する如きそちの所爲、それは、とかく支那人の言葉を用ゐたれど、もう、禮の、義の、親の意に背かぬの、何のと云ふ支那風は廢して、こや浪男たゞ〳〵、したしみを以て答へてくれと、涙ぐまんばかりのやさしき父の問ひ、あはれ、家事、細事はすてゝ偏に外事大事をとらるゝ身が、子故にはかゝる小事に、一方ならぬ心をくだらるゝかと思へば、浪男もそゞろ、感謝の涙にかきくれけるが、否、父上、決して父の意に背かぬの何のと申す、さやうのおろかの父に對する孝もて、答へしには候はず。たゞ、文代が、ふと、ふびんに思はれ候て、もとの心を忘れ候ひしのみ。之も文代の備はれる德にや損にやと、から〳〵と笑へば、父はなほすまぬ貌なりしが、やがて、そのまゝ口をつぐみて退きぬ。

思ひは思ひによりて、いよ〳〵深くなりまさりぬ。文代、昨日の悲しき思ひに思ひ加はりて、小女心にさま〴〵の思ひ、もえつ、消えつ、はては、たゞ歌にてよみし、思ふ思はぬの思ひ、いとし、つらしの思ひも、今日此頃の思ひに、思はれ、つゞくる思ひのはてもなく、はては父の戀しくなり。世のあじきなくなり、一層、憂世を思ひたゝましくなり。千々の思にくだけて、父樣〳〵とさけぶふすまをあけて、入り來る叔父、文代を見て、流石氣轉よく、ヲー之よりは叔父と云はず、ほんに父樣と云ふてもらはふのう、文代、そちはまだ三五、ちと、はやくはあれど、其方の父樣と約束せし通り、固めの盃のむは遠からずなすつもり、つけても、そちは　何處かすぐれぬか、此の頃は何となう沈ましげ、殊に食事もすゝまぬやうす、見ればからだも何となうやつれたるげなり。伯母が、否、母樣が、いと心配してぞ、醫師に見てもらふがよきぞとのやさしき問ひ。げに、此の間より伯母がさま〴〵問ひなぐさめし事のやさしさなど、思へば、いつもながら涙のみさし

くみて、はか〳〵しき答へも出でず。唯何處もわしくは侍らずと、云ふを、叔父はなほ、氣遣はしげに、さては、氣うつか、叔父は否父と共にこよ。王子邊まはりこぞ、又心のはるゝならんとやさしくせられては、いよ〳〵こばるゝ涙かき拂ひて、否叔父樣、さやうの心遣なせられそ、私は、外に、思ふ事の侍るを、申しにくさにと口でもれぞ、わなもう、叔父と云ふてくれな。父とわらためてくれ、そして、外に思ふ事とは何ぞ、何も、父には、へだてぬがよき。とく云ひね。遠慮はいらぬ。何かほしいか。又は、父樣のお寺まゐりにでもゆきたいか、何にてもへだてなく云へ、云ひてくれと、聞けば聞くまゝに、やさしき言の葉、文代は厚き涙わきかへりわきかへりて、せく袖もしどゝ、言葉も出ぬを、やう〳〵せきとめ、思ひきりて、叔父樣いつぞや何かの本に、從弟どちの結婚はわるしとしるしわり侍りぬ。切角皆樣の御信切を無に致すやうなれぞとて、やう〳〵に打出れぞ、叔父は意外の詞にたゞ文代をうち守りて、しばらくは詞もなかりけり。



芍藥　　東久世通禧

ふかみくさ散にしのちにさく花の
色もにほひもたくひなりけり

新樹廻庵　　鍋島直大

我やとのめくりの若葉生ひしけり
となりの家も見えすなりにき

雨後新樹　　竹屋光昭

雨くもは晴れわたれともやまのはは
しける若葉にへたてけるかな

池杜若　長谷信成

池みつのみどりもなかはむらさきに
そめてにほへるかきつはた哉

夏夜雨　宮地厳夫

はしゐして見し月影やかくれけん
閨にきこゆるむらさめのおと

張良　手塚光榮

試さるゝこゝろと早くしりてこそ
くつを取ても身をたてにけめ

紫陽花　小出粲

かやり火の烟いふせきやふかけに
紫陽花さけり小やま田のさと

花菖蒲　萩原厳雄

たてよこにこみち作りて花あやめ
咲せしいけのおもしろきかな

合歡木　鎌田正夫

葉もしけきもりの木陰にうるはしく
みゆるはねむの花さかりなり

江上螢　岩崎勝從

涼しくもとふほたる哉なには江の
あしまの水にかけをうつして

深山瀧　前田利嗣

夏もなほころも手さむしおく山の
くもよりおつる峯のおほたき

紫式部　岡部譲

石やまの月のひかりにみかきけむ
すゝりの海のそこのしらたま

居山花　宇井正夫

椎柏くろ木の中にさく花は
神に手向のぬさとこそ見れ

松上藤　伊東格賢

山松の梢にかゝる藤なみの
花こそはるのなごりなりけれ

曾我兄弟の像を見て　大畑弘國

親のためわたをむくいし名は高し
ふしの裾野の露ときえても

宇治の里にて　大林弘一郎

朝露に袖もそほちてをとめこが
木の芽つむなり宇治の山里

家にて釋奠しける日、孔子の像といふ
五文字を、句の上にすゑてよめる歌　赤松景福

くち殘るしだれやなぎものどかなる
かはべの春はたまかづらせり

新樹妨月　島宮太郎

しげり合て涼しき月はもらねとも
青葉の蔭は夏としもなし

初時鳥　足立正枝

花の香に醉ひし心をさまさせて
一聲なのる山はゝとぎす

夜話　蜂須賀隨子

思ふどちこゝろものりて竹馬の
むかし語りに夜ぞふけにける

藤原藤房卿　柳原愛子

千さとゆく駒のみやこに出しより
かけもとどめすなりし君かな

湖上螢　小池道子

いさり火のひかりは消しみつ海に
ひとり殘りてとふほたるかな

山家夏　北島以登子

夏の日はまつの梢になくせみの
ほかにこゑなき山かけのいほ

螢來窓　三條靜子

二つみつ窓のとちかくとひかふは
よへ放ちたるほたるなるらん

旅梅雨　原田蒼生子

みやこより送れる文のかみさへに
打しめりたるさみたれのそら

竹裏螢　坂田泰子

風そふく竹のはやしのおくふかく
みえつかくれつとふほたる哉

石川丈山　服部磯子

ひえのねの麓にひとりからやまと
文のはやしを志めしきみかな

水村水鶏　河村重子

まこもふく風も涼しきゆふやみに
水鶏なくなりかはつらのさと

山ぶき　安富さく子

山里のいさら小川にかげ見えて
そこまでにほふ山吹のはな

首夏風　土波幾子

花故にいとひし風もはしゐして
またるゝ夏になりにける哉

窓新竹　長津つゑ子

ことし生のまとのくれたけしけりあひて
をすもおろさずなりにけるかな

遲日　丸玉子

のるこまの手つなゆるへてやすらへは、
なほくれのこる花の下かげ

琴　安齊さく子

松風のおとにかよひてきこゆなり
月に人まつねやのつまごと

水鶏　東玉子

五月雨に里の小川のみづまして
まこもかくれにくひななくなり

橋上螢

みちのくのをたえの橋の名もしるく
夜はのほたるぞたまとみだる

夏狩

さだしかのたちども見えぬ夏草を
弓末にわくる狩人やたれ

夏草をよめる歌　海上壽子

狛剣わか住なれし、庵近き野邊の夏草、さみたれのふりのまに〳〵、いや日けにしけりわひぬれ、ふみわけて人こそとはね、おきわたす朝露とめて、から蝶の小蝶飛びかひ、おきわたす夕露とめて、夏虫のはたる飛びかひ、朝夕に見らくたぬしも、よしゑやし道はたゆともと、鎌もて草かるわらべ、心なくかりなはらひそ、野邊の夏草、



雜報

●聖徳　明治二十七八年征清戰勝の後、畏きあたりの思召を以て、宮中創設させ給へる振天府は戰時、國民忠勇義烈の誠意を表彰し、之を、萬世の後にも傳へさせ給はん、いともありがたき大御心にいでさせ給へるにて、そが内には戰死將官將校の肖像、幷びに同下士卒人名帖、其の他、海陸諸種の戰利品等、嚴に配列せられたりとぞ。殊にありがたきは、其の御裝飾、配置等は、總て、天皇陛下、御手づから遊はせられ、侍從武官長等にも、いさゝか御手助を許させ給はざりし御事なり。さるにても、陛下が如何に、深く、大御心を留めさせ給へるかを伺ひ奉るべし。拜觀の榮を恭ふせる者は、申すに及ばず、右の御次第を洩れ承らん國民も、誰かは、聖徳の辱きに感泣し奉らざらん。因に記す。今日迄、同府拜觀の榮を辱うせるは皇太子殿下を始め奉り、各皇族殿下、各大臣、樞密顧問官、各師團長、府縣知事、宮內省高等官、林務官等なりと承る。

●東宮御避暑　皇太子殿下には、來ん七月下旬を以て、日光新用邸に行啓せさせ給ひ、本年夏季は、かしこにて御避暑遊ばさる筈なりと承りぬ。

●東宮御所　こたび、赤坂離宮跡に、新に建てさせ給ふべき、東宮御所御設計のあらましは、既に、前號

に報道せることながら、なほ、委しく承れば、和洋兩樣の御建築に付きては、各專門家が、數多の年月を重ねて、經畫し、特に御造營局技監片山東熊氏の如きは、先つ年、歐洲に渡りて、十分に調査を遂げ、歸朝後は、日夜、その圖案に、心を碎きしに、既に、脫稿して、畏き邊の御覽にも供し奉りぬとか。其の圖案に依れば、まことに堅牢廣大の御設計にて、歐羅巴の帝室中にても、ある一等國を除く外は、未、斯る壯大なる御建物を拜見せざる極なりとぞ。特に、其の出色の點は、諸設計諸材料など、悉、最新の物を採用せられ耐震火の上には、古今に類なき御建築なりと承りぬ。こたび、片山技監が、特に、米國の出張を仰付られたるは、全く、鐵骨石皮の建築物調査の爲なる由にて、其の時日は、約、一年程を要すべしと云ふ。日嗣の皇子の太敷きいまさん大宮は、まことに、かくあるべきことにこそ。

●靜岡御用邸　東海道線にて、行幸啓などせさせ給はんことの御道順にて、御一泊、若くは臨時行在所と爲るべき地は、多くは、靜岡、名古屋の兩地なり。さて、名古屋は、既に舊城を以て、離宮と定めさせ給へれは、いさゝかの御差支もあらせられざれど、靜岡には、御用邸、離宮などの御設あらせられざる故に、行幸啓の節は、止を得ず、縣會議事堂、又は、旅館を、行在所に充てさせらるゝを以て、且は、畏多く、不便も、一方ならざりけり。されば、其の筋の人々も、豫てより、心を勞し、此のあたりに、よき宮地もがなと、調査せしめつゝありしに、先月廿日縣廳に向ひたる、舊城外の一要地を買上げ、登記をも濟ませ、御殿と爲るべき地に住める人民には、本月廿日迄に、又、御庭園と爲るべきところに住める者には、來月廿日迄に立退くべき旨を命ぜられ、既に、地固の工事を起されたりとぞ。この御用邸は、兼て、神戸御用邸御増築の御豫定にて切り組みたる諸材を轉用せらるとの事なれば、意外に、速に、竣工すべしと云ふ。

●石黑軍醫總監　去にし四月の頃、ある人、石黑軍醫總監に從ひて、豐州地方に遊び、行中の事を記して日本赤十字社雜誌上に掲げたり。其の中、總監の言行を記したる所、世の人の敎ぐさともなるべく思はるれば、こゝに抄錄することゝしつ。

石黑軍醫總監は、況齋と號せらる。博聞强記。屢、奇警の語を發して、俗病を救治す。余、毎に、先生の謦咳に接し、得る所少からず。此の行、先生、微恙を冒して出でらる。神戶に到りて、小憩し、山陽の發車を逆旅に待つ。時に、先生、發熱稍悶を感ずる色あり。而も、行李を整頓し、或は、左右の些事を處するに、曾て、人を役せず。余曰はく、閣下、事毎に、躬せらる。生輩隨員の、却りて苦心する所なり。請ふ、小大となく、其の命に從はん。生輩、甚不敏、爲に、閣下を煩はすものあるを恐ると。先生、莞爾として曰はく、余曾て、不自由といふ事を知らず。故に、何も、不足に思ふ事なし。試に見よとて、手提カバンを開き、其の中蓋を示さる。一片紙を貼し、カバン中の藏品、悉、之に記す。救急藥籠の類より、其の些末なるもの、脚袢、水足袋に至るまで、大凡、旅行必需の物品備はらざるなし。先生曰はく、凡、身を、軍籍に置く者、常に用務に服する覺悟を要す。偶、命至らむ、咄嗟に、之に應ぜざるべからず。斯る場合に臨み、目錄に照せむ、家人にも、亦、能く、行李を齊ふることを得、如何なる急場にも、錯誤を免かるべしと。余、其の深慮に服せり。

先生又曰はく、一日、御當代有栖川宮殿下に伺候す。偶、會、殿下、御用務の御樣子なりしを以て、遠慮申上げたるに、苦しからずとの台旨に依り、御前に進めば、豈圖らん。畏くも、殿下は、御手づから、御軍袴の破綻、縫紮せさせ給へり。余、大に驚き恐れ、殿下には、如何にして、斯る御敎育を受けさせ給ひしと拜問せしに、殿下顧み玉ひて、我が大宮殿下は、家庭の御敎訓、極めて嚴にをはしき。曾て訓へて宣はく、宮

中に昇りては、或は、侍者を伴ふこと能はざる御場所にも到ることあらん。かゝらん節若し、袴など、物に觸れて破れたらんに、其の儘にては、御前に出づることを得ざらん萬一の爲、針の技も、亦、心得置かさるべからずと。故に、此の智識を得たりと、宣へり。余、感激して、措くこと能はざりきと。何だ、先生に限らん。聞く者誰か、恐懼奮激せざらんや。

余、乘車切符を購ひ、手荷物を預け、其の相勘を呈すれど、先生、先、符面の番號を、手貼に書留め、而して納めらる。顧みて曰はく、方今、都鄙を問はず、小學兒童をして、修學旅行をせしむることあり。歐洲にては、此る場合に、教師は、學童をして、先、自、切符を買はしめ、或は、手荷物の預方を知らしめ、切符の番號は、必記し留めて、萬一、之を遺失したる時などの不慮に備へしむ。此等も、亦、修學旅行の一教科となれり。知らず、我が國に行はるゝ修學旅行の實修果して、此の邊の些事に及ぶや。否やと。

●年廼舍五月兼題　といふを聞けは、左の如し。

垣山吹　　久我建通

人ならはとかめむものを隣より
かひまみしたる山吹のはな　　前田利嗣

いつしかと八重もましりてそてかきに
さきをゝりたる山吹の花　　津輕承昭

さくら花ちりにしのちに見よとてや
垣の山吹さきにほふらん　　水野忠敬

み園生のかきのうちこそゆかしけれ
黄金いろそふ山吹の花　　松平波子

いくたひかとへとこたへぬ口なしの
いろそ咲ける垣の山ふき

小杉榲邨

ゆく春のみちを隔てゝ山ふきの
　垣はもたわにあまる色かな

江刺恒久

咲をゝる八重山吹のさかりには
　垣の内外もへたてさりけり

申橋隆美

家つとに行かふ人や手折るらむ
　かきねにさける山吹の花

遊坐貞方

すみなれし庭のまかきに色はえて
　ゆかしく見ゆる山吹の花

牛山寛

手をらんと立より見れはたをれとは
　いはぬいろなる垣の山吹

牛山晴敞

やまさとの賤かやれかき七重八重
　咲よそはひし山吹のはな

両角政徳

暮てゆく春をはよそにきのふけふ
　かきねにさける山吹の花

河合きさ子

なか垣の八重やまふきのへたつれと
　となりしたしき花盛哉

渡邉すま子

行春をしはしへたてのあしかきに
　よりて咲けり山ふきの花

勝田筆子

蛙なく賤か垣根に一むらの
　山ふき咲けり見てをかへらん

遊坐とめ子

見たれたるもとの垣ねとわかぬまて
　八重山吹のつきみちにけり

飯田稻子

八重ひとへ庭のまほに結こめて
さくもなつかし山吹のはな　諏訪直子

枝たれてまがきにさける山吹の
はなは今こそ盛りなりけれ　諏訪晴子

ませ垣をこえて咲たる山吹の
はな折かざし行人やこれ　諏訪忠元

くつれたる土つが垣ねをつくろひて
さきかさなれる山吹の花

●樂しき家庭　と題して、東京朝日新聞にのれる、いと有益なる記事あり。今、之を、左に抄録せん。

わが邦に於ける一般の家庭は、おほむね、樂しからざるが多く、殊に、中流以上に至りては紊亂したるものいと多し。されば世の、兒童教育に熱心なる者家庭教育を以て、學校教育と、社會教育との基礎根底たるべきを信じ、家庭教育の、忽諸にすべからざるを唱道し、家庭の革新に就きて、多く注意するに到れり。是、固より、當然の事なり。いかに家庭教育の必要を唱ふとも、其家庭の習風、清からざらん限は、毫も其の効を收むること能はざるべし。家庭教育の如きは、抑々第二なり。寧、其本源たる家庭改良を以て、第一とせざるべからず。

茲に、其の住所氏名を公にするを得ざれど、最も樂しき家庭あり。家庭の改良を希へる人々に示して、參考に供へんとす。

○其の家の憲法

樂しき家庭の主人は、某省に出勤せる屬吏なり。本年五十一歳にて、妻某女との間に、男女六人の子あり。常に、家族の、團欒して、樂しく遊ぶなる座敷の壁に一枚の紙を貼りおけり。記して曰はく、

○一家申合規則

四季ともに決して朝寢すべからず

夜は必らず十時半までに臥すべし
毎日定めたる時間には必ず食事すべし
副食物の小言をいふべからず
室内の掃除は勿論總て清潔を旨とせよ
無益に金錢を費すべからず
人の後言を言發すべからず
皆々交情を好くすべし

右の八箇條は我等天に誓ひて堅く守るもの也。云々と。さて、其の末には、主人夫婦を首め、長男、長女、次男、三男、四男、五男と、順次に、姓名を認めて、其の下には、各拇印を捺したり。これ、即是の家の、簡單なる憲法とも見るべきものにて、他には、異りたる制定なけれども、其の夫婦の間、親子の間、さては、兄と弟の間、姉と弟との間、頗好く和熟し、一家つねに、和氣靄々として、其の樂げなる情態は、訪問の客をして、坐に健羨に堪へざらしむるこそまことに、いふかしき程なりけれ。されど、順を逐ひて、是の一家が、申合規則を實行する現狀、及び、其の他の美風を記しもてゆかむ、自然、是の家庭の樂しさが頷かるゝなるべし。

○第一條の説明　この夫婦、及親子は、八疊と、十疊との二室に睡り、嚴寒中にも、其の境の襖を開放せりかくて、毎朝五時の時計を聞つけたる者は、父、及母を起し、次に、其の兄姉より、弟を、順次に起すなり。而して、下婢の、倘寤めざる時は、これをも起す事とす。かくて、五回以上、第一番に起きたる者には、賞與として、月末に、金五十錢以下の學校用品一個を與ふるなり。

○第二條の説明　夕餐の時刻は、四季ともに、午後五時半を定め、夫より、七時までは、親子夫婦散歩し、雜談し、或は入浴（入浴は、大概三日目とす。但し、夏時は、毎夕行水）するなり。而して、七時より九時までを以て、家族の勉强時間とす。是間、父なる人は、役所にて執れる事務の取調をし、時間倘餘あれど、或

は、机に凭りて讀書し、或は碁盤に對して、碁子を排し、時に、兒女等の質疑を説示し、又、日記に、筆を執る。母なる人は、是時間を以て、當日の金錢出納を、帳簿に記入し。下婢を呼びて、明日の副食を相談す。時に、又、彼に、雜巾を刺さしめ、自己の衣類を裁縫てさす。若、刺すべき雜巾もなく、裁縫すべき衣類もなき時は、解衣を命じ、又、毎夜、一時間づゝ、必習字せしむ。但、毎週の副食は、大略規定しあり。即、次の如し。

	朝	晝	夕
日曜日	汁類	魚肉	鳥獸類
火曜日	同	野菜	貝類
木曜日	汁類	同	豆腐類
土曜日	煮豆類	同	豆腐類
月曜日	汁類	野菜	豆腐類
水曜日	煮豆類	同	鳥獸肉類
金曜日	汁類	同	鳥獸肉類

大體は、右の如し。但、汁類にも、味噌汁あり、澄し汁あり。煮豆類とは、煮豆屋に就きて買來れる品にて必しも、煮豆のみにあらず。野菜も、鳥獸肉も、貝類も、豆腐類も、其々妻君得意の料理法あり。次に又、日記帳を認む。これには、種々の事を記し、兒女の勤怠等に關しては、殊に精密に記載せり。他日。賞罰を明かにせんとてなり、是間、兒女等（本年六才の五男を除く）は、皆、八疊の座敷に机を並べ、當日、學校にて修得したる課目を復習す。斯て、九時を報ずれば、一同、直に、勉强を了へて、十二疊の居室に赴き、或は、父の興味ある修身談を聽き、或は、本年十六歳なる長女某と、下婢との女禮を觀る。（琴三味線等は嚴禁なり。土曜日の夜には、長男、次男、三男、四男の劍舞落語等あり。洋々たる春風は、常に、是の樂しき家に滿てり。而して、時計、十時を報ずれば、一同臥床に入る準備するなり。

〇第三條の説明　毎日、三度の食事を一定せざるは、即、家庭の不秩序を示すものなりとて、朝は、六時半、晝は、正午、夕は、五時半と定めたるなり。されど、一同が、毎朝、顏を洗ふは、午前五時より。六時までの間にて、其より、兒女等は一同、父母の前に赴き、いと叮嚀に、『お早う御座ります』と、手を支きて叩頭する

なり。本年六歳の五男も、昨年の夏の末より、毎朝、是禮義を忘れずして行ふ。さるからに、父母は、如何に多忙なる際にも、兒女等が、朝の挨拶せんと、打揃ひて、近く來る時は、必、端坐して、其の禮を受くるなり。父母も、微笑を帶び、兒女等も、亦、微笑を帶ぶ。朝に於ける是の家の光景、斯くの如し。而して、後、一同、室內を掃除し、食後、一時間乃至二時間は、兒女等、皆、登校の準備をし置きて、いづれも、庭に出でゝ遊ぶなり。いかに樂しき美しき家庭ならずや。

○第四條の說明　副食物の小言は、多く、我まゝより出づるものにて、其の煮法の辛き、水臭き等に不平をいへば、下婢を苦しましめ、又、これが爲に、家族をして不快ならしむる事多し。依りて是の一家の者は、決して、副食物の小言をいはず。斯かる善良の家庭なれば、家庭敎育は、自然、不言の間に行はれ、兒女の性質、皆、温良にして、男兒は、男兒らしく、女兒は、女兒らし。

○第五條の說明　室內、其の他の掃除は、まへに記せる如く、毎朝、食事前に、之を行ふ。但、室內は、母親と、長女と、これを分擔ち、庭は、父を始め、五人の男兒、總掛りにて掃除し、六歲の五男も、亦、其の材より高き箒を握りて、相應に働くなり。其の間、下婢は、臺所の仕事を勤めて、膳拵に忙しく、之を了へて、雜巾がけに着手す、下婢の、雜巾がけに着手する時は、即、家族の、朝飯の箸を執る時なり。

○第六條の說明　無益の金錢は、一厘たりとも費さず。尤も長男は、既に十八歲にて尋常中學の四年生なれば、端艇漕遊、遠足などに、金錢を消費すること少なからず。然れども、これは、所謂學生間の交際にて、强に、無益とのみ言ふべからず。是等の臨時費を別にしては、日曜日毎に、金五十錢を給せらる。但、學校用筆墨紙等の費用は、是の中より辨ずる事となれば、長男は、毎も乏しく暮らせり。長女は、月に、一圓を給せらるゝのみなれど、已に、二十餘圓貯蓄した

るは、流石に女なり。次男は、年十四歳にて、日曜日毎に。二十錢、三男は、十五錢、四男と五男は、十歳以下なれば與へられず。

○第七條の説明　社員が、同氏を訪問せし夜、長男が、父に代りて、弟等に、人の後言を云ふべからずとの例話として語り聽かせつゝありしは、或る男、書畫會の席上にて、拙劣なる竹に虎の一軸を眺め、虎を描きて、猫とは、是なりと罵りけるに、傍の人、是は、會主某の筆なりと忠告しければ、果然、熟視れば虎なりといひて、天窓を搔きたりといふ話なりしに、孰れも、腹を抱へて笑ひたる無邪氣さ、其の父母は、如何にも樂しげに、且、滿足らしく見られしも道理なりけり。

○第八條の説明　兄弟の交情好きことは、實に驚かるゝばかりなり。これは、平生父母の訓諭よろしきにも由るべけれど、兄の弟を愛し、弟の兄を敬ふが如き、洵に、他の兄弟多き家の模範とするに足る。例へば、五男某、曾て、輕き病に臥しゝに、當時、恰も町内の祭禮に方り、太鼓の響、笛の音の、いとゞ面白げに聞えしかば、五男は、切に、之を觀んと言いだし、いかに賺かしてもうべなはざりしかば、遂に、長女と、三男と、四男とは、交る〲、五男を、背に負ひて、祭禮を觀物せしめしことあり。又、三男某の、曾て、眼病を患ひて、駿河臺の眼科醫某の治療を乞ひし時の如きは、長女と長男と次男とは、幾んど、毎朝、交る〲、其の家より、一里餘もあるべき駿河臺へ、或は、藥を取りに赴き、或は、三男を連れて、治療を求めに行きけり。これにても、平生、骨肉間の情愛のいかに濃なるかを察するに足りぬべし。

○日曜日　雨天なれば、家族一同、室内遊戲を催し、晴天なれば、大概、打連れて、遊樂に出づ。されど、決して、料理屋等に入ることなし。

○洗濯日　母と長女と下婢との洗濯日は、冬は、一週日に一回、(月曜日)夏は、一週日に二回、(月曜日及土曜日)とす。

○五兒の衣服　夏も、冬も、他處行も、常衣も、皆、絣にて、(長男は學校の制服を着すること多し。)決して、絹布を被しめず。而して其の衣服は、筒袖なり。蓋、驕奢、修飾、惰弱を排し、勇敢活潑にして、儉勤の人を爲らんと欲すれどなり。

あはれ、此の一家のさまは、誠に、今の世に珍しき例ありけり。家庭を正しくして、其の樂を得んと思ふものには、此上なき龜鑑といふべけれ。

●萬國婦人平和會　この會の幹事セレノガ夫人の慫慂によりて、さきに我が邦の重立ちたるある婦人等はとりあへず、賛同の意を、電報にて通知したりしに、今回更に、同會に加盟する趣意書、平和會議の由來、及、辯明書などいふ者を發表し、少くとも、四千人餘の同志者を募りて、加盟の趣を通知せんものと、夫夫奔走しつゝある由なり。婦人の身にして、平和の爲に、力を盡さんとするは、頗、其の天職に叶ひたる者と云ふ可し。且、その國の文明の度を知らんと思はゞ先、其の社會に於ける婦人の位置を見る可しとまで稱へ居る西洋諸國に向ひて、日本の文明を紹介するに、少からざる効力ある可きなり。

●田中河內介父子哀悼碑　本月二日、讃岐國小豆島に建碑せられたる田中河內介は、天下に率先して、尊攘討幕を唱へたる人なり。この人、幼名を、賢次郎と云ひき、文化十三年、但馬國出石郡香住村の醫家に生れぬ。早くより、皇朝の學問に志し、常に、皇室を尊び、國を憂ふる志深かりけり。天保十一年、京都に上りて、中山家に仕へ、其の諸大夫田中氏に養はれて、河內介に任ぜられ、從六位に叙せられたり。嘉永の末、米艦、浦賀に來り、幕府、條約を締結したりと聞えければ、河內介、益、幕府の處置を憤り、士民の間に奔走して、謀ることどもありしに、後、主家をわづらはさんことを慮りて、暫、隱居したり、文久二年二月、鎭西に赴き、眞木和泉、平野次郎、小河彌右衛門等と交を結び、進みて、薩摩に入り、大に、志氣

を鼓舞し、相結托して歸京し、大阪の薩邸に隱れぬ。かくて、竊に、柴山愛次郎、橋口壯助等とはかり、志士數百人を糾合し、藩主島津久光を要して、事を擧げんとす。折しも、久光上京しけれど、之を、姫路に迎へ、平野國臣等と共に、『速に、尊攘の議を建てられ、御親征の御布令を促がし給はんことこそ願はしけれ』と上言せり。久光、其の志を嘉し、厚く勞ひて、伏見まで同行せしに、寺田屋の事起りぬ。河内介は、其の子磋磨介と、誘はれて、藩邸に入り、拘禁せられて、薩州に送らるゝことゝなりぬ。薩人數多、之を擁して立出でしに、『此の者こそ、此度の謀主なれ。今、之を本藩に送らば、如何なる事を仕出でんも測られず。途中にて殺すに如かず』とて、船にて、播磨の海を過ぐる時、父子を縛して、足枷を施し、慘殺し、海に投じたり。是、實に、文久三年五月二日の事なりけり。其の屍、風浪の爲、翌朝、小豆島に漂着したるを、土地の人、之を收めて、同地海濱に瘞めおきたるに、此度之がために、哀悼の碑を建てたるなりといふ。忠臣義士のあとの彰表せらるゝは、まことに喜ばしき極にこそ。

●少年のかゞみ　神田區市立錦華小學校の高等科一年生にて、伊藤均といふ、よに珍らしき少年あり。同區淡路町一丁目一番地寄留長野縣人伊藤新兵衛の養子にて、今年、漸く、十二になれり。養父新兵衛は、先つ年より、海山遠く隔りたる、北海道に渡りて、農事に從ひ居たりけれど、此の少年は、六十にあまる祖父母の許に養はれたり祖父母も、もとは、相應の身代なりしに、故有りて落魄し、今は、さゝやかなる商して、わづかに、其の日を送りけり。されども、教育のことには、心を用ゐ、己等の身の上に顧みて、子供は、乏しきが中に養ふてとよけれとて、庭の教をことさらに嚴しくしつゝありぬとか。さて、此の均は、身體すこやかに、聲さはやかにて、志かも、言葉すくなく、おち居る性質なれど、

人と爭ひしたることなし。又、かの學校に入りしより一日の外、登校時刻に後れたることなく、欠席とては只の一日もあらざりけり。かくいそしみはげむことと尋常ならざりけれど、尋常科を終ふるまでに、四度まで精勤褒狀を得、學術は、あまたの生徒に秀で、常に、上位を占めたりとぞ。

いにし三十年五月十日の事なりきとよ。雨、いたく降りしきるに、均が登校の時刻、少し後れたりければ、校長村田亮輔氏は、均に向ひ、例に違ひ、今朝に限りて後れつるは、何故にかと尋ねけるに、均は、只俯伏きていらへもせざりけり。さて、あまたたび問はれて、餘儀なげに答へけるは「問屋の混雜せし故に、買出にひま取り侍りぬと、言ひ出でたり。漸々、十歳ばかりの子供の、買出などいふこと、いといぶかし。さても、いかなる商賣を營むにかと、思へど、其の場は深くも問はずて、私に、樣子を調ぶれど、此の均は、入學前より、けなげにも朝ごとに、祖父母より、金二十錢の資本を受け得て、納豆を商ひ居る事知られたり彼は、毎日、未明に、荷をおひて、家を出で、本郷新花町なる、ある納豆屋に行きて、一箇、一錢づゝの納豆包、二十箇を買出し、本郷元町より、水道橋に入り猿樂町より、錦町の三丁目、二丁目、一丁目を賣りあるきて、家に歸るに、一箇の賣値二錢なれど、日々二十錢づゝ利益を得るなり、入學後にも、一日とて、休みたることなく、之を賣り終へて、食事をすませ、さて、學校に行く事なれど、登校時刻の違はざるも、道理なりけり、然るに、夫の遲刻の日は、全く、問屋の混雜にて、少し後れたる事明になりければ、校長は益、感服せり。さて、かく儲けたる金は、いかにするかと、再、調べたるに、日々に、餘しうる二十錢、即、月六圓許になれるを、學校費用として、其の內より、月々一圓三十錢をさし引き、殘りの四圓七十錢を二分し、一を、生活の助とて、祖父母に捧げ、一を、己が貯金として、遞信省に預けをくといふことさへ判然し

けれど、校長は、涙を流して賞賛し、常に、他の生徒を敎ふる摸範としけり。

かゝりけれど、本年三月廿五日、均が、尋常料卒業の際には、神田區長より、高等一年分の書籍一式と、同學年分の筆紙墨とを給せられ、神田區敎育會長 細川潤次郎氏よりも、書籍數多を賞與せられたり。されど均は、此の名譽を得て、毫も、誇れる色なく、高等科に入りては、一入學業を勵み、又、如何なる日にも、商賣を、休まざりければ、自、心をつくるもの、多くなり、人々、朝な／＼待ちかねて、彼が納豆を買ふ程になりぬ加之、先に、均を妬みなどせし、同業の少年らも、今は、自、均を尊びて、道を讓るに至れりとぞ、又、神田區長は、斯る少年の、區內より出でしは名譽の事なりとて、こ度、均の素行を具して、其筋に上申する都合なりと云ふ。まことに、めづらしき少年といふべし、抑、かゝる善行は、ひとへに、其の人の性質によるものなれど、家庭の敎訓も、亦、大に力あるものなり。世に、年少き子を持ちたる母たちよ。强に、かゝる商をせしめよとにはあらねど、愛に溺れて、庭の敎を忽にすることなく、日々の務を課し、朝起の習慣を付けて、安逸に流れしめず、學校に入れなど、遲刻欠席などのなからん樣に務めさせ、常に紀律を重んじて、懶惰の心を生ぜしめざるやうに注意をせざるべからず。

●トラホーム豫防の注意　第十一師團軍醫部長半井英輔氏の、トラホーム豫防に關する意見書ありて乃木師團長より、愛媛縣知事に寄せられたる者なるが、學校衞生上關係少からざれど、爰に掲載して、讀者に頒たらん。

古人、言あり。活潑なる神智を、健体に宿ると。善き哉。此の言、之を小にしては、以て、家を齊へ、之を大にしては、以て國を治むべし。抑も、國患を致す疾病は尠からずと雖も、結核梅毒、及顆粒性結膜炎は、蓋、其の主なる者ならん。而して、結核は、暫く措きて、之を問はず。又、梅毒に就きては、已に、法律の稍備るありて、其の成績の良否に、一に、該規の死活に因るを以て、亦、爰に、之を論及せざれども、獨、顆粒性結膜炎に在りては、未、衞生法規の、其

の撞摸を抑制するものなく、殆、將に、全國に瀰蔓せんさする實況なるを以て、爰に、其の豫防法を講せんさ欲す。

顆粒性結膜炎、即「トラホーム」は、强力なる傳染性を有するに拘らず、其の危害、生命に關せざるに由り、人の、之を怖るゝこさ、彼の、八種傳染病に於けるか如く甚たしからざるを以て、能く、上述の如き蔓延を爲すものなるべし。然れども、仔細に、其の病害を敲かは、則、其の過を覺るさ共に、却りて、其の、大に恐るべきものなるを了知せん。請ふ、聊、之を說かん。

夫、「トラホーム」は、輕症に於ては、單純の結膜炎さ誤り易くして、爲に、傳播を免れ難く、其の、重き者は、常に、視力を害し、或は一時、業を廢するに至らしめ、甚しきに至りては、明を失するこさあり。加之、其の痛楚大ならさるより、醫療を怠るもの居多なるを以て、荏苒累久の間、彼が、强大の傳染力は、擧けて、一家を侵襲し、以て、既述の不幸を、一族に及ぼすべし。若、夫、其の慘害、唯之に止まるものたらば、尙忍ぶべけれども、非常の傳染性を有する本症は、固より、底止する所を知らずして、一家より、一鄕に、一鄕より、一國に傳播し、遂に、國患を釀すに至るものなり。現に、當四國の如きは、到る處、本病を見、就中、德島、丸龜、高知等、最も、其の慘害を蒙り、農工商、皆、各、損害を受けさるはなく、之を積算すれは、國の損する所、決して、少々にあらざるを信す。豈、恐れて怖れさるべけんや。而して。其の人を侵すは、山居者よりは、寧、海岸低地にある者に於てし、其の傳播を致すは、一に、觸接的に出でゝ、群集雜居は、實に、一大媒介を爲すを認む。これ、豫防上、重きを措かずんばあるべからざる點なりさす。切に望む、當路に於て、衛生會議の際、本病の豫防法を、審議の上、實行し易く定められんこさを。左に、豫防法に關する卑見を開陳して、以て、參考に供せんさす。

第一、校醫をして、諸學校を巡回せしめ、生徒中「トラホーム」に罹る者あらば、其の輕重に應して、或は、他生徒さ、席を異にせしめ、或は、通學を禁じ、又、該病者の手巾は、二%曹達水にて、三十時間煮沸の後にあらざれば使用を許さゞるこさ。

校醫は、固より、校長教員をして、本病の豫防法を、生徒、及其の父兄に講話せしむるこさ。

塵芥の、眼に、害を與ふるは、最著きものなるを以て、力めて、之を避けざるべからず。例令へば、校庭に於て、体操、其の他、運動をせしむるに當り、風向等に注意し、成るべく、塵芥の飛散せさる場所を撰びて、之を行はしむるを要す。

第二、洗湯に於ては、彼の、貸手拭を廢せしめ、を灌湯を設けしむるこさ。

理髮場、旅店等に於ては、壓、手拭類を、熱曹達水にて洗滌せしむるこさ。

第三、地方衛生會に於て、其の決議せる豫防方法書を編纂せしめ、之を、各役場、及、學校に頒ち、尙、郡市醫にして、豫防法を、公衆に向ひて、講話せしめ、公費を以て、「トラホーム」患者を治療し、或は、地方醫師をして、該患者に限り、實價治療せん事を勸誘し、又、神官僧侶に、豫防書を配布し、之を說教せしめん事を力むる事、

●奇特なる婦人　横濱市役所にて保管せる同市救護所は、目下三十余名の瘋癲白痴、其他の病者を收容し、救護を加へつゝある由なり。こゝに、同市眞砂町三丁目に、山崎トシといふ、女あり、右救護者を救助せんとの目的にて、毎日、一名宛の看護者を同所に派出し慈善行爲をしつゝありとぞ。奇特の人といふべきなり。

●盆栽　盆栽の起因は、頗る遠し、其の始は何時の頃なりしか、詳ならず。近代にては、舊幕府の頃、時の將軍が、郊外に、放鷹を試みし歸途、ことさらに、駒込巣鴨等の槖駝師の庭園を通過せしことなどあり。尤も、當時は、菊花、其他の景物のありしにも由るべけれど、槖駝師、及び、一部の好事者間に、既に愛玩せられつゝありしは疑ふべからざるものゝ如し。下りて、明治年間に至り、西南の役の起りし當時、芝紅葉館に、始めて、盆栽會を開き、漸、流行の兆を現はしたり、爾來、一時、ほとほと中絕したる如くなりしに、同二十五年三月十一日より、三日の間、田口松旭といふ人會主となり、根津の神泉亭にて、盛大なる盆栽會を開けり、當時の審査員には、巣鴨の內山長太郎を始め、伊東金五郎、保阪金次郎、鈴木孫八、他二名の人あり。而して、當時の顏觸は、喜谷市郎右衛門、乙部鼎、故人根津の石川子爵、飯田兆、先代奥三郎兵衛等の諸氏にて、頗る流行の兆ありしに、その後、これを、都下の割烹店に開き、藝妓を聘する等の事ありて、風雅は、漸、俗化しけるより、心ある人は、出品せざるに至り現今は府下の槖駝師等が、商の爲に上野の美術協會內又は、舊博覽會第五號館等を借受け、盆栽展覽會を開く他は、僅に、二三の盆栽家が、相會して、其の所有の盆栽の優劣を品評する事あるに過ぎず、今日に到るまで、再、那の神泉亭當時の盛大なる盆栽會を再興すること能はざるは遺憾なり。されど、盆栽の流行は、年を追ひて、盛になりゆき、其の技も、次第に進步しつゝありとぞ。

教の庭



六月廿日兼題　浦夏月

天　栃木縣足利郡足利町　青木たま子

すゝしさを袖につゝまむよしもかな
ころものうらのなつの夜の月

地　愛媛縣松山市本町四丁目四十九番戸　重松たか子

蜑の子もきよしとめつる聲の志て
うらわすゝしくすめる月かな

人　肥後八代郡八代町四百九十九番戸　田代綾子

すゝしさはかせぞかりかは玉のうら
なみまにやどる月もありけり

秀逸　（十五首）

志ら波の音聞くたにもすゝしきを　本郷　横山柳子
うらのとまやのなつのよの月

すゝしやとみる間も波に影ふけぬ　三河　永井さい子
なにはのあしのみしか夜の月

玉くしけ二見のうらのなみの上に　丹波　羽室家子
いつれはあくるみし夜のつき

くだくるもゆらくも涼し竹志はの　甲府　名取正代子
うらのあしまにうかふ月かけ

長すの浦鹽くむあまがたもとにも　肥後　佐々有鄰子
すゞしくやどるなつのよの月

浪の上にゆらぐも涼しみしま江の　札幌　柳元いと子
たまえのうらのなつのよの月

なか〱に淀むかたなし風はやの　長崎　日高かず子
三保のうらわのなつの夜の月

こよひこのすゝしきなつの月影を　四ッ谷　牧瀬かう子
すまの浦びといかにみるらん

須磨の浦なみよりいでし月なれや　大阪　岸田はつ子
あつさを洗ふかけのすゝしさ

みしかよを月にうかれてあかし浦　伊豫　野中あさ子
すゝしき風のふくにまかせて

ところから光りもいとゝ涼しきか　四ッ谷　都水　春子
かゞみかうらのなつの夜のつき

和歌のうらなみにくたくる月影は　松山　二宮春枝子
空に見るよりすゝしかりけり

砕くるもゆらくもいとゞ涼しきは　磐城　坂田彌代子
うらわのなみにやとる月かけ

浦なみにかげもゆられていそ山の　麹町　戸塚てつ子
わかはをいつる風のすゝしさ

すみの江の夏わすれ草これならむ　三河　加藤加壽子
まつかせすさふ浦のつきかけ

（不以原稿宮着致順）

すゞしさもみわてはるかに浦なみの　溝口貞子
うらをわたれるなつのよのつき

かぜわたるたもとのうらのゆふ月は　澤井しん子
さらになつなきこゝちこそすれ

いそ風の身にしむばかり涙の上に　澤井國子
すゞしくやどるみじか夜の月

くだくるもゆらぐもすずし難波江や　石井登子
うらわのなみのなつのつきかげ

もしほやくいせの浦わのゆふなみに　吉富彦子
すゞしくやどるなつのよのつき

堪へかねしひるのあつさも忘れけり　井口素子
野さかのうらのなつのよのつき

浦とほくかすみもくもゝへだてなく　坂本　遊多歌子
みそらにすめるなつのよのつき

涼しさのいつこはあれとしほかまの　住山識子
うらわにみゆるなつのよのつき

須磨の浦かせもしつけきなみの上に　森山英子
すゝしくすめるなつの夜のつき

しかの浦たわずよせくるさゝ波に　中村壽枝子
やどるもすゞしなつのよのつき

きてみればきくよりすゞし住よしの　菊池忠子
うらわのまつのなつのよのつき

長すの浦かぢひきかけてはらかつる　北里繁子
ふれもすゞしきなつのよのつき

浦つたひあまがふせやはすゞしさに　德永九良子
さゞしかれたるなつのよのつき

なみのほほうきつ沈みつくだかるゝ　陸奥ます子
つきかけ見れは涼しくもある哉

浦の名のたまさまかひてなみの上に　田代艶子
やどるもすゝしなつの夜のつき

夕そらのはれてすゝしきなつのよに　石川孝子
つきすみのぼるたけしはのうら

すまの浦やけすみわたるつきみれは　河田いし子
ふくるもしらぬみじかよのそら

風わたる田子のうらわのゆふなぎに　林環子
さやけくのぼるなつの夜のつき

ま帆かたほさたかにみゆる夏の夜の　立田原直子
なかそらたかくすめるつきかけ

濱まつのねだふくかぜもすゝしくて　立田原寛子
まさご路しろくさゆるつきかけ

うちよするうしほ涼しくはまゝつの　立田原富子
はこしにすめるなつの夜のつき

よせかへる浪もすゝしきなつの夜の　立田原元子

つきかけきよし三ほのまつはら

もしほやくあまのとまやの影さへも
さたかにみゆるなつのよのつき　立田原國子

二見うらなぎのすゑはにかぜみえて
すゞしくさゆるなつの夜のつき　河村君子

みつ汐にかげをうつしてやさりくる
ひかりすゞしきなつのよのつき　高やす子

浦かぜにつきもくだけてしろかねの
さゝなみよするなつのよはかな　淵本家壽子

もしほやく烟もたえて志賀のうら
あしまをいつるなつのよのつき　本庄志雅子

涼しくもまたおもしろし須磨のうら
なみ間をくゞるなつの夜のつき　竹村竹里子

人もなきいほはなれたるうらまつに
すゞしくすめるなつの夜のつき　木村こう子

長き日の暮るゝをまつのうらかぜも
涼しくすめるなつの夜のつき　加納はな子

あつさをばよそにふ明石の浦ふねを
くまなくてらすなつの夜のつき　服部春子

須磨あかしさやかに見ゆる夏の夜の
つきにさをさすかげのすゝしさ　木村きく子

夕月に浦のまつ原かげさえて
波路さやかにてりわたるなり　木村きく子

しらたまのなみにくだけてあかし潟
あかぬすゝみのなつのよのつき　古瀬園子

あまの子が親まちわひてまたれぬに
あけほのちかしなつのよのつき　皆田なか子

短か夜の月にはあれさしかすかに
すゞしくいてぬうらのなみまを　中山さみ子

浦かぜもきよくふきよすなつの夜は
てるつきかけもすゝしかりけり　稲原菫子

なつの夜もすみてそ見ゆる住の江の
うらしづかなるなみの上のつき　坂田きみ子

うら人かすゝみかてらにこぐふねの
かけもふけゆくなつの夜のつき　名取よし子

あめはれし浦のなみまにつきかげの
すめるを見れはなつさしもなし　林禮子

ふけわたるなるさの浦にふなてして
あまもすゝしきつきやみるらん　横山寸賀子

しはしさてたゝすむうらの夕なぎに
すゞしくのほるなつのつきかけ　志茂田廣子

須磨のうらこきゆく船もかつ見えて
みるめすゞしきなつの夜のつき　山根久子

ひるくれてあかぬは田子の浦なみに
ちりわたりぬるなつのよのつき　服部倫子

夏のよのあつさみぬめのうらかぜに
こころすずしきつきのかげかな　德永萬壽子

立よれはしほひにぬれしあまの子が
みるめあかしのなつのつきかげ　德永廣子

みじか夜のふくるもしらでくる人を
まつほのうらのなつのよのつき　小森田輝子

夏のよはことさらつきのかげすゝし
御代すみよしのうらのまつはら　佐々小琴子

ゆふしほのさしくる浦のとまやかた
なつをよそなるつきのすずしさ　佐々宮枝子

夏のよのつきもあかしのうらつたひ
なみにくだくるかげのすゞしさ　佐々値嘉子

行きかよふ人ぞうかるゝしがの浦　佐藤玄子

なみにかげそふなつのよのつき

みじかよのあくるぞをしき夏のつき
かげすみわたるなにはがた
澤田春子

夏のよのうらすみわたるしがのうら／＼
みじかくあくるつきをしぞ思ふ
澤田十萬里子

志賀の浦やなみにやどりて涙よりも
すゞしきものはなつの夜のつき
尾倉銈子

浦なぎてよるとも見えぬゆふなみに
すゞしく見ゆるなつのつきかげ
谷口菊子

いそ山のまつふく風のおとすみて
なみ間にうかぶ月のすずしさ
谷口房子

島山のまつの木の間をもれ出てゝ
うら和にやどるつきのすゞしさ
高橋蔦子

わたつみのかざしのなみと見る波に
ひかりをそふるつきのすゞしさ
谷口さた子

つり舟のかずさへ見えてうらなみに
かげ澄みわたるなつの夜のつき
加賀民子

浮き雲もいそやまかぜにはれ行きて
うら和にやどるつきのすゞしさ
西村千代子

隈もなきあかしのうらのなつのよの
つきのひかりはさやけかりけり
萩原章子

よのうきも忘れにけりな田子の浦
すゞしくすめるつきにひかれて
中村じゆん子

なつのよに三保の浦わをこぎいでゝ
すずしすゞしとつきをみるかな
山田まよ子

なみまつの涼しきかげにみじか夜を
あかしのうらのなつの夜のつき
山田稲子

月かげもあなおもしろとゆめさへも
みぬめのうらに明くるなつの夜
石川樂子

うらなみもしづまりはてゝ鹽がまの
つきおもしろきなつの夜半かな
石川久子

わすれては秋かと思ふすみよしの
うらかぜすゝしなつの夜のつき
石川南江子

あまの子がたもとの浦のつきかげは
さらになつなきこゝちこそすれ
山田璋子

おもふどちかへさ涼しきいそづたひ
そでしのうらのなつのよのつき
磯よし子

すゞしくも難波のうらのみちしほに
あつさをあらふなみのつきかげ
奥環子

すまの浦すゞしくてらすなつのよの
つきにうかれてあそびつるかな
木下菊子

ふじのねを仰ぎみてさへ田子の浦は
すゞしきものをつきいでにけり
友永章子

風わたるまくらすずしきなつのよは
つきもあかしのうらつたひける
那須昌子

夏のよのうらなみてらすつきかげは
ふけゆくまゝにすゞしかりけり
黒田明子

あつき日のくれがたかわし名殘さへ
わするゝうらのつきのすゞしさ
虎口資子

みじか夜を怨むばかりぞすまのうら
まつはらこしにやどるつきかげ
石原くら子

水もなきそらに見るだにすゝしきを
ましてうら和のなつの夜のつき
石原安忍子

夏のよのつきはいづこもかはらねど
かすみがうらにすみるゆかしさ
河方喜代子

浦ひとのしほくむあさをさみくれは
なみまにすゝしなつのつきかげ
澤井清子

なにはえのあしの葉かげに船よせて
濱野清子

つきかげみれはなつさしもなし

なみの上にほたるみたれて須磨の浦　ゆふみつしほにしつむつきかげ　寺田いさ子

波たてず宇らわすゝしくふくかぜに　うかみいてけりなつのよのつき　相澤さた子

白なみのはまゝつかねにつきいでゝ　なつはよそにもみねわたるかな　泉川うた子

夏もなほすゝしくわたるうらかぜに　あかしのつきはすみのほりけり　松島きみ子

山の端もあらぬうらわにながむれさ　見るまみじかきなつのよのつき　齋藤かつ子

晴れてさへ見あかぬものを塩やく　けふりにくもるなつの夜のつき　齋藤よし子

須磨のうら靜かによするみな門より　すゞしくのほるなつの夜のつき　吉田久子

玉の浦そこのもくつもみねにけり　なみにくもらぬなつの夜のつさ　河口ふみ子

やへくもはいそ山かせにふきちりて　すゝしくいつるなつのよのつき　薮内つき子

まちわたる須磨の浦曲のゆふかせに　すゝしくのほるかげかな　新井蝶子

こきすてゝいさ眺めまし夜もすから　ふれにあかしのなつのよのつき　魚住愛子

見るうちにうら波さほくしらむなり　なにはのあしのみじか夜のつき　永井さい子

かやりするふせやをいさゝ浦なみに　てるつきかげをみれはすゞしも　吾妻ちか子

夏をさへしはしわすれてきよみがた　つきもろさもにうらめくりせり　舘脇ます子

波のうへに光りもちりて月かけの　うら松の枝にのほるすゝしさ　諸井久貝子

涼しさはいふふしもなきたけしばの　うら〳〵かけててらすつきかけ　杉浦いさ子

沖つなみよせてはかへるうら〳〵を　みるもすゝしきなつのつきかげ　新海わが子

をろこちのあまの漁火かけたねて　しまかけいつるみしか夜のつき　片山あや子

月かけのよせてはかへる浪の上の　すゝしく見ゆるなつの夜半かな　小曽根しら子

うら波のよるさはかりにみるつきの　かけしらみゆくみしか夜のそら　佐々木富子

千賀のうらや波間にやるごつきみれば　かせなき夜半もすゞしかりけり　伊藤みどり

かけみればなつの暑さもわすれけり　うらわのつきにあきやかよへる　岡部彌世子

ふくかせの音もさやけきうらまつの　こずゑすゞしきなつのよの月　青木治子

しほ浴みてかへる宿りの高どのに　ひかりも須磨のつきそすゞしき　白岩艶子

よせ歸るおさもすゝしきなみの上を　さやかにてらすなつのよのつき　淺井靜子

須磨の浦や清きなきさにかけさめて　みるめすゝしくなつの夜のつき　菊池不二子

むら雲もはれわたりたるうらづたひ　なみもすゞしきなつのよのつき　田坂よし子

すゝしくも月はくもまをもれいでゝ　すまのうらわにすみわたるなり　田中りん子

こまのうらやよせては歸る夕なみに　森峰尾子

やさるもなかしなつの夜のつき　綿野りき子

田子のうらゆきかふ舟のかす見えて
なみうちつれるつきのすゝしさ　秋山ちか子

涼しさにたごのうらはに出でみれば
かへるもなしきなつの夜の月　阿部さく子

みしかよも更けて靜けきうらなみに
すゞしくうつる夏のよのつき　阿部こゝ子

うらかぜの身にしみ〴〵さゝえ渡り
なごりもなしきみづよのつき　山口緒美子

そてがうらつゝむにあまる夏の夜の
つきのしらたまかけのすゞしさ　山田靜子

こゝろにもかゝる雲なくすみよしの
からかぜすゞしなつの夜のつき　兒玉千賀子

みじかよに琴のしらべも聞こえつゝ
つきもあかしのうらのすゝしさ　羽田みわ子

世の中のあつさあらひてみぢか夜の
つきおもしろきすみよしのうら　松木千歳子

すむ月はさながらあきのこゝちして
なつすみの江のうらそすゝしき　佐伯きぬ子

たへやらで凉みかてらに來て見れは
うらかせすゝしなつのよのつき　中村きよ子

こきいてし舟にあつさやのせにけん
うらわすゝしきなつ　よのつき　夏野瑞枝子

夏しらぬつきのよふれなこきめくり
かせさものせてあかしかたよな　高市もさ子

海士かく蚊火の烟もきえやらて
うらわにのこるなつのよのつき　森こさ子

もしほやく烟もきえてすまのうらに
すみわたりたるなつのよのつき

みしかよなあかしのうらなみ上に
見るめすゝしくすめるつきかな　高市さし子

すまのうらやえならぬ夏の月夜なは
みやこのさもはしるや知らすや　白石梅子

心なき海士もしばしはながむらん
いそへのまつにのほるつきかけ　椎野ぬき子

玉くしげふたみがうらのなみの上に
すゞしさ見せてつきいでにけり　勝山忠子

きてみれはげにすみよしのうら浪に
すゞしくうかふなつのよのつき　武田粲子

白浪のよせてはかへす須磨のうらに
ひかりすゞしくやどるつきかげ　内海順子

すまのうらうちよるなみに影うきて
すゞしく見ゆるなつの夜のつき　田中富子

夏の夜はたまのたまわにてるつきの
なみにくたくるかけそすゝしき　宇佐美まつ子

波よするいそのうらわのなつのつき
くだくるかけぞすゞしかりける　栗子うめ子

さゝなみや田子のうらわのなつの月
そこまでかけはすみわたるらん　栗田口のぶ子

さえわたるすまのうらわのなつの月
れなしみつゝあかしぬるかな　須藤花子

夏の夜やすまうのらわのゆふなぎに
かげもすゞしくやどるつきかな　内山そう子

ここかしこつりせぬ船も見ゆるかな
こいそのうらのなつの夜のつき　尾崎秀子

よる波にすゞしきかげのみゆるかな
そでかうらわのなつの夜のつき　尾崎嘉子

田子のうらよせてはかへす夕なみに　高橋なほ子

すゞしくうかふなつの夜のつき

あまかたくもしほのけふり末とほく
うらわすゞしくしめるつきかけ　高橋正子

さやけさは秋さぞまかふなつの夜の
すゑのうらわをてらすつきかけ　服部米子

すみの江のうらかぜそひて夏の夜の
つきにすゞしき浪のいろかな　服部錦子

夏の夜にうらのまさこもよるなみさ
見にてすゞしきつきのかけかな　服部道子

くだけてはたまごちるなる磯のへの
まつにやどれるなつの夜のつき　北原季子

さやけさは秋かさまかふこのうらの
まつにかゝれるなつの夜のつき　寺田みち子

たびやかたいでゝこよひは須磨の浦
すゞしきつきをまつかげに見む　目黒佐喜子

つき満くまつかせ涼しすまのうらの
あまは夏をもしらずやあるらむ　奈良うめ子

しほかせになつなき浦のゆふすゞみ
つきにさまてはおもはさりけり　新泉さ代子

きりかすみへたてなければ秋よりも
きよみかうらのなつの夜のつき　新泉翠子

さゞ波やみほのうらわのまつかけに
やどれるつきのかけのすゝしく　川崎ゆき子

かされてもすゝしかりけり夏ころも
うすきそてしのうらのつきかけ　二宮章江子

すゝしさなつゝめるそての浦なみに
うつるもきよしなつの夜のつき　二宮安野子

磯あみし浦のわらべもかへりはてゝ
島やまのはにつきいてにけり　山下茂登子

こまふれの夕けの煙りうち絶へて
かけもすゝしきなつの夜の月　坂井喜世子

夏の夜はみるほさもなく明ぬれさ
かたみのうらに残る月かな　玉井隆子

うらかせの通ふまに／＼なみの上に
くだけてすゞしなつの夜のつき　八木沼里子

よしあみのむしろなしきて夏の夜の
つきにすゞむかすまのうらびさ　神田秀子

すまのうら波のうれ／＼てるつきに
うちはもつ手もわすれつるかな　神田豊子

鹽かまのうらのさまやにすゝしくも
しばしはやさるなつのよのつき　長澤いゑ子

田子の浦よせくるなみのおさもなく
さやかにのぼるなつの夜のつき　德永きう子

すゝしくもすめるうらわの月かけは
なつもよそなるこゝちこそすれ　長澤ひて子

いつしかに浦こぐふねもかげくれて
さやかにてらすみしか夜のつき　大谷津峰子

月きよしうらかせすみしこのゆふへ
あはれほたるのくろよしもかな　林豔子

まだよひの月さみるまになつの夜は
しらみそめたるうらのまつばら　菅原松子

和歌の浦よせくるなみのおささにて
しつかにすめるなつのよのつき　播宍さみ子

淡路しま手ちかくみにてすみわたる
須磨のうらわのなつのよのつき　吉田碩子

岩屋うらこぎ出てみれば須磨明石
ひと目にすめるなつのよのつき　吉田元子

わくらはにさふかひありて熊野浦の　賀茂鉦子

しほゆのやさのつきぞすゞしき

すゝしやさむかへは月にしらみけり
なにはのうらのあしのみしかよ
服部甌子

うらの名のそてにあまりてふく風は
なつをわするゝよはのつきかな
川合縫子

わかみどりしけるいそへに影さして
みるもすゝしきなつのよのつき
服部かつみ子

くまのうら岩越すなみにすゝしくも
くだけてやさるなつの夜のつき
松澤せい子

打ち寄するなみにや秋のやさるらん
和歌のうらわのなつの夜のつき
松澤しげ子

よる波もなつはなきさのつきの夜は
うらすゝしくも見わたるかな
小川淸子

夜もしから松帆のうらのすゞしさよ
あきかあらそふなつの夜のつき
横手しら子

秋ならてすゞしさあまる今よひこそ
みるべかりけれなにはのつき
横手たつ子

照みちてあかしのうらのなつの夜は
つきさなみこのほかなかりけり
大竹治子

うら風のそれだにあるをなみの上に
すゝしくうかふなつのよのつき
村上みさを子



まいぞなから原稿は明瞭にして御投じあらむ事を願上げはべる

遠方より母の病をとはれたるに答ふる文

天　甲府市山田町　名取正代子

のたまはするやうに、當地も此頃の氣候の不順には、まことに困じはて侍るを、そなた御老母をはじめ、みなみなまめやかにおはし給ふとか、よろこび聞え侍り、さて、母事、さいつ月より、例の持病にて、打なやみ居り侍る事、聞こしめされ、ことさらに、御ねもごろなる御言の葉にそへて、めづらかなるもの、さはに、めぐみ給はり、いと〳〵うれしうなん、さばかりの病にも侍らねど、知らせ給ふごとく、旅の事とて、何事もおもふに任せず侍れど、かへりて然るべき病院に入り、妾がつきそひまつるは更にもいはず、なほ手なれたる看護婦をも、たのみなば、共に心强う侍れど、母もまをしきけ侍れど、さもこそとてなん。されど、きのふけ

ふは、やう／＼おこたりげなれど、此分にて、猶一週りもすぎ侍らんには、またく、つねにかへりぬべしと、くすしもまをし侍れど、いたくな御心いたましめ給ひそ。いづれ、近きうち、故郷にかへりて、よろづこまやかにとこそ、あなかしこ、

地

陸中國盛岡市大澤河原小路八番戸　石原くら子

いとねもころにのたまはせたる、御消息よ。うれしとも嬉しうなん。その後は、こなたよりこそ、打絶えてのみ居侍りしを、かう度々も、とはせたまへることのおもなさよ。まつは父君をはじめ奉り、たれかれの君、いともすくよかに渡らせたまふこと、こよなき幸になむ。さても、こゝの病人のこと、いつも／＼御心にかけさせたまふこと、深く心に志み侍り。かれも、一時は、食物もはか／＼しからず、薬なんどもたゞにやまうとを苦しむるばかりに候ひしを、醫師の君のあつき御心つくしによりて、追々暖くなりゆくまゝに、いたみもやゝおこたり、こゝ一週間ばかりは、かゆ、牛乳、玉子など少しづゝはいたゞくやうになりたれど、此の上は朝な夕なの飲物、食物、はた、風のかはりなどに心つけ候はゞ、日ならずして床上も出來へくと、今はさまさまに心いためし甲斐ある心地してなん。御前よりおこせたまへる御文も、いく度となく讀みかへして、御心しらひのほどを打よろこび、この月の末にもならど、手づから筆とりて、つもる禮をものべまゐらせんに、こたびはたゞそちよりくれ／＼もよくなど申て候ひぬ、かはかりの事にて候へど、かならず／＼深くな案したまひそ。末なから父君をはじめ、たれかれの君にも、この事よく／＼聞えあけたまひとよ。かゝまくほしきことかきりなけれど、さのみはとて、たゞ御かへりことばかりになむ。あなかしこ、

人

但馬國出石郡女子裁縫專修學生徒　飯田さだよ

御忙しくおはしますらん御中より、度々、御親切なる御玉章いたゞき、志つのをだまきくりかへし。うれしく拜し上り／＼、御許様には、露の御障りもあらせられず、御機嫌よく學のにはに、いそしみ給ふとか、こよなき御事に存上候、さて、こなたよりは、御ぶさたいたし候をも、御怒りなく、いつも／＼御ねんごろなる、御文にて母も、事の外よろこび申候、母も一時は、非常に發熱いたし、人心地もわきまへざる程にて、其頃には、玉の緒も如何あらんかしと、朝夕かなしみ居り候ひしが、此頃は大に氣分もよろしく相成候て、庭もせに咲きみだるゝなでしこの花を愛で、樂しみ居申候、醫師も此分にては、遠からず全快致すべしと申候まゝ、何を御案し下さるまじく候、先は御禮旁御かへしまで、かしこ、

以下原稿到着順

山田きよ子

御玉章拜見致し候處、御前樣御方にては、御揃ひ御きげん能う入らせられ候由、誠に御めでたく存じ上げ參らせ候、

扨て御遠方の處御心に掛けさせられ、母の病ひ御みまひ下され、誠に難有御禮申上げ參らせ候、其病は、初めの程は風の心地に候ひしが、のちは其もやう相かはり、段々に重う相成、一頃はすでによみぢの客ならんとまで存じ候ひしが、幸にも神佛にみはなされず候ひけん、此頃は追々快く相成り床の上にて庭を詠めなどいたし居り、又時候も順當に候間、程無う全快仕るべく醫師も左樣申され候間、はゞかりながら御心安うおぼしめし下され度れんじ上げ參らせ候、まづは御返書まで、あなかしこ。女たし書きにて失禮ながら、御とう樣御かあ樣に、よろしう御傳へ下され度ねがひ上參らせ候、

河村君子

先つ日は、母の病氣につき、遠方より、わざ〳〵御尋ね下され、有りがたく存じ候、一時は、病氣も非常に重く、國手も匙を投げんばかりに候ひしが、此頃は、やうやく暑さに向ひし加減の爲にや、入院以來、いと心地よく、昨今は全くおこたりしと申しても宜しき程に相成候へば、乍憚御安心下され度、先は御見舞御禮まで、あら〳〵

稲原菫子

過ぎし日は、いはん方なきねもごろなる、御玉章たまはり、くり返し、うれしく拜し奉りぬ。さばかり御親切に御心にかけさせ玉ふ母の病も、此頃は、日々快き方に向ひ侍りければ、御心安くおぼし給ひてよ。一時は、熱も三十八九度にも達し、かりそめの病とも、おぼし侍らざりしかども、くす師の治療行き屆き侍りてや、將た、叔母君のまことの御心やさゞきまゐらせし、きのふ今日よりは、熱も大方は散じ、食事もすゝませらるゝやう相成り、くすしの君にも、今一二週間もたゝば、本復し給はんと申され、みなの喜びも一方ならず侍れば、何卒御御叔母にも、御心平らに、かへす〴〵も、御案じめし給はざるやう、一筆はしり書して、まづは御返しごとまでかくなん。何れ、母も全快次第、御禮文さゝげまつらん。あなかしこ。

中村さく子

一筆御禮申上候、日増しに暑さに向ひ候ところ、御許樣はじめ、御さり〳〵樣方、御別條もおはさず渡らせられ候由、芽出度ぞんじ候、さて母病氣のところ、御こゝろにかけられ、早速御玉章にあづかり、又御地名産なるしな御送り下され、有難く御禮申上候、御地はさむさ多く、當地は暑さはげしく候故、受病とぞんじ候ところ、醫師の診斷にては流行病のよしにて、よほど案ぜられ候ところ、療治行屆き、昨今はよほど心よく悦び居り候間、御心安う思召下され度、先は御返事迄あなかしこ、

尾谷益子

母のいたつきは心にかけさせられ、細々の御狀を頂き、ありがたさにたへがたくなむ、今日は何時になく心地よろしきやうに見え侍り、されど、御存じの如く、年よりの事なれば、めだちての驗しなどははか〴〵しからねど、斯くては追々こゝろよかるべからむと、樂しくおもひ侍れば、御心やすみおぼし給ひてよ、たゞこの不食のみ、すこし心もとなくはべれど、胸のさはぎだにつかば、飯湯などすこしづゝ、たべられ得べく、扨はいよ〳〵此方のものと醫師申さるゝを、力におもひ居り侍るになむ、されど海とも山とも分きがたくあれど、朝夕ひたすら平癒をねぎ居るになむ、かしこ。

河方喜代子

濱の眞さこの數よりもなほしげく、御許君のいとも　せつなる御心つくしの御たまつさ、遠き山路をへだてなく、いされもころに母の病氣つかひ給ひぬるかたじけなさよ、されば其つと〳〵に、母に申し聞せ侍るにいと〳〵よろこびて、此日頃は幸にも追い〳〵と心地やう成りて、くすしもいま五日六日たちたらんには、大方よろしからんと申されたれは、一同心やすめぬ、いさ〳〵、せつなる御心、みやすめたまへとねぎ奉るになん、あなかしこ、

宇高ます子

いち早くも何處たの風のたよりにか聞しめされけん、海山遠くへたて

てもへだてぬ友垣の御情に、こま〳〵と、ねもころなる御見舞の玉章給はり、けに梅雨の空も心もはれ間なき折柄、おもひもろけす月かげの雲間をもれ出しこゝちせられて、いとうれしく拜し候ぬ、先は御舘皆々樣には、御かはりもなく、御建かに渡らせ給ふとか、何よりの御事になん、扨も母のいたづきなど、よそ〳〵しう早うは知らせざりしとの御恨、さる御事には侍れと、時候柄にや、快きよとよろこべは又あしく、とかくにはか〴〵しからぬに、父は外にありがち、兄は留學中、妹と申てもまだ幼く、さりとて人手賴まむも本意ならす侍れば、朝夕の看護に心もいとまなくて、思ひなく打すぎし罪はさり處なう侍れど、あはれかしこき御心に汲みとりゆるし給ひてよ、先は、とりあへず御かへり申しのみ、かしこ、

都水春子

玉章嬉しう繰り返し侍りぬ、扨も母のいたつき深う御心にかけ給ひて、又しもふりはへ給へる御消息の嬉しさよ、其後は、日増しに怠りざまにて、をとつひ頃よりは、身の痛み頓に減らぎ、熱もやう〳〵下り、粥なんど少しづゝ試み侍るからにいと力づきて、けふは醫師を驚かし侍りぬ、いかで御心安うおぼし給ひてよ、亦遙々とおこせ給ひし御心入の小包、けふしも届きて侍るを、取敢へず打開きて進め侍りしに、誠によく口に適ひしとて、いとう喜び、此かしこまりねもごろに聞え上げてよと申出で侍りてなむ、扨こ度の病のやすからぬは、醫師も眉をひそめたる程なるに、かう速かに快くなりもて行くは、如何なる幸にかありけむと、いづれもこよなう喜び居侍り、此由かぞいろの君へも、よきに傳へ給ひてよ、まづは御返り事まで、かしこ

北原季子

ふりはへ給へる御消息、いと嬉しう拜しまつりぬ、いつにかわらせられず、御ねもごろにとぶらひ下されたまふ嬉しさに、枕邊ちかくよみ聞かせはべりれは、母も只よろこびのあまり、涙をうかべはべりぬ、御かげ樣にてひゞにおこたりがちになりゆき、昨日けふや食事もすゝみまゐりて、折々は御惠み下され候うちむらさきなどこゝろみ申し、其度毎には、げに御心づくしの程ありがたし、やまひいえなば、御國近う立ちいで、深きみなさけのかたはしをだにむくいまつらでやは、なと申はべりぬ、此むきにては、やがてこゝろよき方におもぶきゆくならんと、ひたすら樂しみて、朝夕みとりに手つくしゐ侍れば、いかで御心づかひ遊ばさるまじくねぎまつるになん、まづはとりあへず、御かへりごとまで、かしこ、

川崎ゆき子

一筆示し上けまゐらせ候、先日は、むさくるしき處御いともなう、御尋ね下され、御かまへも申さず候處、ましてたま〳〵の御出を、母の病氣にて、思ひながらも重々の御無禮、何分にもあの始末に候間、御免しも有之候はゞ幸ちの幸ちに存上まゐらせ候、扨て御歸りの滊車にもさはりなく候由、御喜び申上候、又御心にかけさせられ、昨日は御文にて御尋ね下され、誠に有難く心に徹しまゐらせ候、其後は益々樣子相重り、母は御存じの通り平常の勝氣に候らへども、一時色々と心細き事など申候ひて、私も誠にかなしく、來し方行く末まで思ひつゞけて、如何致し申さんと、心細くかなしうて御察しにもあまる位に御座候、さりながら、其後は、御陰樣にて追々快き方に相向ひ、今日の處にては、夜なども、やすみ申候程に付、先は御安心下され度、猶此後の樣子次第、後の便りに申上ぐべく候、

林艷子

四方の梢若葉しけりて、涼しげになり行き候折柄、ふりはへて母のいたつき見舞給ふることの嬉しさよ、先つ頃は、なやみもひどくて、いと驚かれしが、此程は、追々減らぎ行き、醫師もこれにて變りなくば、あと三週間位にて癒えんといはれ候、これ迄醫師にかゝりしことなき母が、かくも長く打臥したるは、いかなることならん、これにつけても、御許樣は故郷をあとにして、遠く物學びに出で給へる身なれは、一しほ衞生に心を用ひさせ給へ、先は御かへりごとまで、かくなむ、かしこ、

玉井隆子

いづくよりのもれ聞かせ給ひけん、母の病を御心にかけたまひ、いとね

もころなる御玉章うれしさのあまり、幾たびとなく操返し候。さくよりしらせましかばとのあつき御言、身にしみて嬉しく、はやうよりつけまゐらせざりし身の怠り、今更くやしくなむ。さりとて遥く、海山を距てさせ給ふ身の上にまで、あたら御心をなやませたてまつらんことの本意なければとて、さしひかへつるに侍れば、あしくな思しとりたまひそ、さて母の病はいぬる月のはじめつかたのことなりしが、ふと風の心地あしとてうちふしゝかば、たゞちにくすしをむかへつるに、こはかりそめならぬ病のよふ申されしかば、いづれもうちおどろかれて、日も夜もすから看護のわざに心をつくし、一日もはやく本服せん事を祈りつるかひやありけん、この五日六日以前よりは、とみに快き方にむかひ、少しはこゝろゆるされ候よふなりければ、かならず御こゝろにかけ給はぬやふ願ひまゐらするになむ。まつは取あへず、御禮かたく／＼かくなむあなかこ、

佐々有鄰子

此ころはいとゞほしく侍りしに、風の音の遠方に住みたまふる、中垣のへだてなき君の御もとより、消息たまはりしに、とるておそしとおしひらき拜讀いたし侍りぬ、いとかたじけなく委細かにかきながしたまひて、病にやせる母の病容ないかにと とひおこせたまふがたじけなさなににたとへて御答白侍らん、先たづものは涙のみにて、筆の命毛にかきつくしがたく母とともにそなたをふしをがみて、今日よりは病の床をはらひて、常よりもすこやかになりなんものと、母がよろこべるをかへりみごとにかくなも、あなめでた、かしこ、

山田ゆたか子

母事いたつきのおもむききゝとらせ給ひし由にて、ねもごろにたづねおこせ給へるいと嬉しう、くりかへして拜しまゐらせぬ、一度はくすしにも見はなさるゝまで、あやうく見ね候ひしかば、自らも人にもはや、なきものと思ひあきらめ候ひしを、人々のあつきみとりのかひありて、このごろは、いとこゝろようなり、折ふしに起きなほりて、むづかしからぬ文などはよむやうになりて候へば、いかで御心安うおほしめされてよ、御文を度々讀みきかせ侍りしに、なき人かずに入るらんと思ひさだめし身の、かくおこりて、ふたゝびよどみなき御言葉きくやうになりたるうれしさと、よろこび申候、小包もて賜はせし御菓子、このあたりにては、もとめてもなきものなれば、なほさらにうれしう、くすしもかやうの品ならばとて、ゆるされて候へば、ながら樂しみ申すべくなん、よきにゐやまうしてよと、いひつけばべりぬ、今十日あまりもすぎなば、また／＼おこたり申すべく、ざる上は、箱根あたりにゆあみする心ぐみにはべり、君にもこのごろはすぐれさせられずこもりがちにのみおはしますとか、そのころ行かせ給ひては如何、なれば聞ゑまゐらす、まづは御かへりごとのみなかくなん、あなかしこ

藪内つざ子

梅雨の頃とはいへ、とかく雨がちにて、不順の氣候に候へども、御さはりもましまさず候ふや、さて、母事、病の床にうちふし居候をきこしめし給ひしよしにて、御ねもころなる御文にて、御たつね下され、殊に母の常にこのみ候結構なる品、遠方の所御贈り下され、病人のよろこび一方ならず、御文のおもふき、病人にもきかせ候ところ涙をうかへてよろこび入候、此御恩いつの世にも忘れ申すまじく、御禮は拙き筆にはつくしかね候、私も一時は心配いたし候へども、四五日前よりやう／＼よき方におもふき、食事もすゝみまゐり候まゝ、此分にては不日本復いたすへしと、醫師の君も申され候まゝ、決して御心配下さるまじく、これぞと云ふよき事はさま／＼なし、看病致し、一日もとく快方に趣き候様祈祈居候、猶兩三日の内、又々容體申しあぐべく候へど、とりあへず御深切に仰せ下され候御禮まで、あら／＼申上候、かしこ、

田中りん子

こまやかに母の病を訪ひたまふ玉章、うれしうくりかへしはんたりぬ、母人も過し頃は、こゝちもすくれずうちふしてゐけるに、きのふけふは、いとうこうちよしとて、食事も常にかはらで、とうべぬ、今しばし養生せんとてまた床ははなれねどなりふしは、庭の梢の茂りあふほとりに端居して居るなり、やがてすが／＼しくなるらんとおもひはんへり、い

さもこゝろやすくおぼしめしてよ、君のやさしきみこゝろより、こまやかにさはれたへろにまかせ、まはらぬ筆の跡先には、返しものするになん、かしこ、

田中ゑい子

御心に懸けさせられて、度々御親切に母の病氣さはせられ、此上なううれしくぞんじ上げまゐらせ候、御かげ樣にて、こゝ五六日前より、餘程こゝろよく相成り、醫士も大に安心致され、隨て皆々よろこび居り申候間、御安心被下度候、あまり長々の病氣にて、ふしゐるたいくつさに、一昨昨日の如きは、夕にゑんがはなごへ出で、弟妹の取來りし鉢など打眺めて、何處より來りしぞなご問ひ、いさ心地よげに、しばしば種々の事な皆々さ共に語らひ、時をすごし申候、此樣子にて氣候に甚しき變りだになくば、追々にこゝろよく相成可申さ存じ候、併餘程躰もつかれ居り候まゝ、今少し當地にて養生いたし、汽車に打乘らるゝ樣に相成候はば、私つきそひ、御地へ一ヶ月斗り養生に參り申すべく候間、其節は御目にかゝらんさ、今より樂しみ居り申候、先は取敢へず御返しまで、

あなかしこ、

眞田さみ子

先つ日は、御親切にも、御見舞にあつかり、難有存候、御尋ねのごさく、母事先月始めの頃より、ふさ風の心地さて打ち臥し、たゞかりそめの事さ存居り候處、日にまし容体烈しく相成、醫師の診察によれは、なかなか重病さの趣にて、一時は非常に心痛致し候ひしが、去る二日頃より、少しづゝ快方に相向ひ申候、此分ならば、こゝ十數日も相過ぎなば、全快致すならんさ、醫師も申候、其上にて、一ヶ月程海のほさりにも參り候はゞ、よろしからんさ存じ候まゝ、御安心被下度候右は御返し迄、

かしこ、

冨岡よし子

度々に御心に懸けさせられ、母の病氣尋ね給ふ嬉しさよ、其後は幸に經過よろしく、兩三日前より、少しづゝ新聞紙などよみ聞かせ候など、樂しむやうに相成り、皆々よろこび居り申候、この樣子にて氣候に甚しき變りだになくば、今一ヶ月斗りの間には、快く相成り申すべしさ、醫師も申され候まゝ、其上にて、須磨の浦邊に住み侍る、叔母の許にしばし保養に參ろ方、よろしからんさ、父も申居候、其御老母樣には、やはり須磨に御滯在あそばし候や、彼地に參らば御目にかゝらるべくさ、母も樂しみ居り申候、聞ゐまつりたき事澤ながら、たゞたゞ御返しのみ、かしこ

本間久榮

御れんごろなる御文いたゞき、難有拜見致し候、さて母の病氣に付き、御心懸けさせられ、毎度御親切の御見舞に預り、御厚意のだんふかく御禮申上候、唯、眞の當分さ存じ居候處、殊の外長引き候ひて、一時は如何成り行くらんさ、安き心も無く、色々さ手をつくし、醫師も、今一度何卒して全快成すべきやうにさ、大に心配成しくれられ候、効にや、兩三日前り、余程快く相成樣見受けられ、醫師も此樣子ならば、日ならず全快致すべしさ申され候まゝ、一同心落ちつき申候、右の次第に御座候まゝ、御内樣にても必ずかならず御心配下さるまじき樣願上候、先は御禮かたがた御返事迄、かしこ



明治三十二年度女鑑歌文月並兼題

日		題	〆切
七月五日	歌	團扇	六月廿五日〆切
	文	待雨	
七月廿日	歌	橘姫	七月十日〆切
	文	蟻	
八月五日	歌	泉聲秋近	七月廿五日〆切
	文	故鄕	
八月廿日	歌	羇中虫	八月十日〆切
	文	舟遊	
九月五日	歌	閑居月	八月廿五日〆切
	文	水害を見舞ふ文	
九月廿日	歌	海邊霧	九月十日〆切
	文	暴風	
十月五日	歌	擣衣所々	九月廿五日〆切
	文	菊の花につけて友におくる文	

●女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所　姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所　姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○書式に違ひたるは總て沒書とす。
○女子は、なにびとにても隨意に投稿することを得

第壹卷第六號十月十五日發行

見本（おもしろきけういくざッし）拾錢

新學界

（定價壹部金九錢六部前金五拾錢十二部前金九拾五錢外郵税壹部壹錢）

（小爲替振込の節は現金拂渡局を東京三田郵便支局と御指定下被成度候）

女流文學●和歌和文書翰文●毎月募集

第壹卷第六號口繪には佛國著名の大油繪親牛子牛天女及び國歌唱奏其他都合四圖を挿入したりこれ他の美術専門雜誌に於ても見る能はざる大作なり本誌の口繪が毎號他の諸雜誌に卓絶せるは人の常に賞する所也

新學界は中等教育の目的を以て發行せる者に係ると雖も最も文學趣味に富みて詞華欄には殊に力を盡しつゝあり和歌の如きは一首毎に叮嚀なる添削を施すは勿論細評を加ふるが故に初學者は忽ちに歌道を悟る事を得心得ある者は其評を讀むの樂みあり滿天下の令嬢諸君……文學的思想を養成せんと欲せば進んで本誌に來れ本誌は熱心に教導の勞を取らん

發行所　東京市芝區松本町四十四番地　文學館

杉谷正隆編

修身百首

定價金貳拾錢
郵稅金四錢

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇びこれに深切なる義解を附して一讀人をしてその本義を了得し而して大に發明する所あらしむるものあり我が國道德の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふこの篇を讀みて其の德器を養ひ給へかし

東京市京橋區築地二丁目二十一番地

發行所 國光社

孝明天皇御遺德

先帝御製（東久世伯染筆）挿入　全一冊定價金二十五錢　郵稅金四錢

恭て按ずるに先朝　孝明天皇は曠古の明君なり不幸にして**事蹟**倘湮晦に屬し**聖德**未だ外に露れず是れ頗る憾むべしと爲す此書は宸翰秘書及び先朝に奉仕せし雲客月卿諸官人の**實歷談**に依り以て汎く**逸事遺聞**を網羅したるものにして庶幾くは聖德の萬一を發揮し奉ることを得たりと信ず

今此書の一班を示せむ先づ**御一代**の章を掲げ編年體を以て降誕より崩御に至るまでの事迹を示し**聰明**の章に於て先皇の英明絕倫なるを概説し**夙成**の章は御幼時の御言行を示し**慷慨**の章は上編は醜夷猖獗の事、其下編は皇權回復の事に痛く叡慮を惱まされたる事蹟を叙し**孤憤**の章は獨り至尊をして社稷を憂へしむの實情を寫す**撫御**は識見卓出の實際を明にし**豁達**は言路洞開の聖德を輝かし**忍耐**は襟裡荒廢供御菲薄にして時に或は十兩以下の御座用金に窮し給へる等の例證を示し**仁愛**は惻隱仁恕の御心甚た厚かりしを明にす、而して前數章に配置する能はさりし逸事遺聞は總て之を**雜事**の一章に網羅し以て先帝の聖德を頌し奉る

發行所

東京京橋區築地二丁目廿一番地

國光社

品川彌二郎
平田東助　合著

信用組合提要

全一册

一部定價金五錢
郵送費金貳錢
郵劵代用は一割
増申受候

商業家の道德を進むるは商業の發達を計る所以の基本なり信用組合は今後殖産興業の上に於いて大に普及せしめざるべからず信用薄弱なる商工業は完全なる結果を収むること甚難し是兩氏が此の書を著されたる主旨なり我が社曩に本書を刊行して同志間に頒ちたりしも部數に限ありしを以て悉希望を滿すこと能はざりき爾來我が社に向ひて之が發行を望まるゝ諸彥日として踵を躡せざるなし今回我が社は大に之が普及を計り同志の希望に應ぜんために更に刊行することゝなせり冀はくは是より四方同志諸彥にまた遺憾なからしむることを得んか

東京市京橋區築地二丁目廿一番地
發行所　國光社

男爵高崎正風先生序 ◎ 本居豐穎先生序

故富士谷御杖先生述

土佐日記燈

大和綴優美 自一巻至八巻 紙數壹千百頁 上中下 合三册

◎全三册●●正價壹圓五拾錢●●遞送料 四種郵便卅錢●小包〇十里迄七錢〇百里迄十二錢〇百里以外二十四錢

富士谷御杖の翁斯の學に至り深かりしは今更にいはず其ものせられし著書れはかるが中に燈といふもの古事記燈、萬葉集燈は翁か在世の頃になり巻となりて、世に廣こりしも、この土佐日記燈は早く文化の末つかたになれるものなるかさるよしありて時の栗田の宮の請はせらるゝに稿本のまゝ奉られしを、後いくはくもなくて翁はみまかれしかは、さなからに埋もりて流布せすなりにき、世の學者見まほしふすれとも、さるよしもなくて空しく年經ぬること茲に數十年、さるを翁の男元廣ぬしかさるへき筋より辛うして寫し傳へたるを、いとうれしくて、こたひ我社にて、摺り巻にものして廣く世に流布せしめんとす抑々此の燈は世にありふれたる註釋書の類とはことにして、貫之朝臣のこの日記を書かれしはかりそめのすさひにあらす、土佐の守に任されしを深く憤る由ありて、あらはには女のものせしさまになし深き心はその言葉のうちに、ふくめたりといふを、本として言詞は更なり文意をもいと委しく解なしなから、いと廣く考證をも引き出でられたり凡國史國文に志ある士は座右に一日も欠く可からざる最良書なり

發行所 東京京橋區築地二丁目廿一番地 國光社 (電話新橋八八)

近衛公爵題辭　故勝伯爵題辭　東久世伯爵題辭　副島伯爵題字
黑田子爵題詠　高崎男爵題詠　島津久實氏題詠　寺師宗德氏序文

國光社編纂　松本楓湖氏挿畫

照國公感舊錄

全一冊
定價金五十錢
郵稅金八錢
郵劵代用一割增

輓近維新史の攻究闡明に力を盡すの人多く隨て此間に於ける偉人傑士の傳記評論續々として梓刻に上るゝも獨り島津齊彬公の詳傳に至ては世未だ好適の著あるなく信憑すべき記なきは識者の常に遺憾となる所なり夫れ王政維新の原動力は薩に在り而して薩の原動力は實に齊彬公其人に在るを知らむ公が詳傳の維新史に欠くべからざるや又言を俟たざる也本書は公が生涯を詳述したるものにして、傳記尊王外交經濟文事民政撫恤の七大綱に分ち卷中の事蹟は一々周密なる調査を遂げ編者が經營慘澹の餘に成りたるものにして事を記する極めて精細筆を遣る極めて謹嚴明窓の下之を繙かむ公が一生の閱歷、歷々として掌を指すが如く又以て維新鴻業の由來を知るに足らん製本亦清麗にして卷中挿む處の楓湖畫伯の圖畫と卷末に付する處の明治諸名家が追懷の和歌は錦上更に花を添ふるもの也

發行所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　靜思館

社告

○代價は通貨又郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送の事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事○未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑
每月五日廿日發行

定		價	廣告料
一冊	六冊前金(三ヶ月分)	十二冊前金(半年分)	五號活字廿三字詰一行金二十錢
拾錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治三十二年六月廿三日印刷
明治三十二年六月廿四日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京市京橋區南八丁堀二丁目十一番地　並木良雄
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　(電話番號新橋八八)　國光社

新刊

家庭の鑑

菊版美本

全一冊

定價金拾八錢

郵稅金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小說を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書册無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へざる可らず、

發行所

東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八）

國光社